

三十歳の時に人に道を説くところの師となつて、齊の王に道を説き、三十五歳には魯を去つて齊に行き、景公に仕へた。しかしあまり用ひられないで魯に歸つた。五十歳で魯の宰相となつた。けれども僅にして再び魯を去つて衛國に行き、陳に行き、また衛に歸つた。それから曹に行つて、宋に移り、鄭へ去り、また陳に歸り、蒲に行き、また衛に歸つた。そしてまた衛を去つて陳へ行き、蔡に移つた。それから楚へ行き、衛に移つたが、放浪十三年にして故國魯に歸つたのである。

彼れはいづれの國へ行つても、己れの志は天下に行はれなかつた。彼れの施政の方針は時の國王等の容れるところとはならなかつたのだ。

『もし人君が人民に法律命令を示して、それを國內一般に行きわたらせようため違叛者に刑罰を加へることにするならば、人民は平氣で法律命令の下をくゞつて悪い事を行つて少しも心に恥づるところがないやうになる。もし人君が人民に道徳を示して、それを國內一般に行きわたらせようため力の及ばぬ者に禮儀を守らせることにするならば、人民は自ら不善を行ふことを恥ぢて善を行ふやうになる。(爲政篇)』

彼れは國王や宰相をして法をもつて國を治めさせようとせず、徳をもつて國を治めさせようとした。彼れは堯舜時代を夢みてゐて時代の趨勢といふものを知らず、未開蒙昧時代の單純少數の人民を統御した昔を今に至つても同じく行はれるものと考へたのだから、世は戰國時代とならんとしてゐる列國の間に介在して天下に覇たうとする國王が武力法治主義を捨て、孔子の徳治主義になれるものではない。孔子が決してその志の容れられなかつたのは無理のないことである。彼れは天下に志を得ず、嘆じて『歸らう、歸らう、わが郷里にゐる門人達は志望が遠大で些細の事物に拘泥せず、その才能も人格も立派なもので、これを教育すれば吾が主義主張を承けつぐことの出来る人達であるが、徒に志望のみが遠大で中正の道理からはづれる恐れがあるから、郷里へ歸つて十分に彼等を教育してやらう』(公治長篇)と言つて、故郷魯に歸つて子弟の教育に専心した。

○

『學問に志さず者が自分の名が死ぬまで揚がらないのは恥づべきことだ。己れを修めて學術徳行が身に積れば自然に名が揚がるものなのに、死ぬまで名が世に稱せられないのは己れの修養の不



足を示すものだ。(衛靈公篇)

孔子は學徳を修めるのは専ら世に名を揚げんがためではないけれど、世に名が揚がらぬやうでは困ると思つてゐる。世に名の揚がることを欲するのはなぜか。

『君子は學に志ざして心の徳を完成することを謀るもので、食を得ることなんか謀らない者だ。農夫のごとき耕作して食物を得ることを謀るものですら常に食物が得られるとは限らぬ。君子は學問をして心の徳が完成すれば自ら求めなくとも人君から舉用されて俸祿を得るやうになるものだ。(衛靈公篇)』

世に名の揚がることを欲するのは人君から舉用されて俸祿を得るためだ。しかしたとへば俸祿を得んがために人君からの舉用を望むのではなく、目的は人君に舉用されたいのだ。なんのために人君に舉用されたいのか、それは志を天下に行ひたいからだ。その志とは徳をもつて國を治め、民を豊にし、世を平和にするにあるのだ。老子が「無爲にして化す」とは反對の行き道であるが、効果は同一を望んでゐる。

『もし聖人が立つて天下を治めるならば三十年にはその教化があまねく行きわたつて一人も不善

の人がなく、一事も不善のことがないやうになる。(子路篇)

『古語に天性善良な人が相繼いで國を治めて百年もたてば残酷な人間もその善に感化されて悪を行はなくなり、死刑などは用ひられないやうになると謂つてゐるが、誠にそのとおりである。』

(子路篇)

『もし今の世に吾れを用ひて政事をさせる君主があれば、僅か一年だけでも相當の成績をあげて見せる。三年かゝれば吾が治國の事業は完成するのに。(子路篇)』

孔子の本來の志望は此處にあるのだ。齊は桓公が覇を唱へた國であるから富國強兵を急務として國民の精神教育に重きを置いてゐない。魯は周公の遺風を存して國民が禮儀道德を重んじてゐる。孔子はそれに對して『いまもし齊が適當の人を得て政治の方針を一變すれば今の魯のやうになることが出来よう。もし魯が適當の人を得て政治を改革すれば古の聖王が治めたやうな理想的の國家になるだらう』と言つた。(雍也篇) その「適當の人」といふのは孔子自身またはそれに似た人物のことを指す。

○



國民が自分達の國の政事を自分達の方針どほりに執行してもらふために適當の人物を擧げて國王となした國王はない。一國を創業した初めての國王は國民が歸服するだけの徳望がなければ國王となることは出来なかつたけれども、しかしその大部分は武力の效果であつた。武力以外に徳をもつて一國の王となつても、それは國民のため國民が主體となつての國王でなく、國王自身及びその一家一門の顯勢榮達のためだ。暴君あらはれ、暗愚の王あらはれて國が亂れて民が苦しむのを見た偉人が國を治めて民を救はんがために立つて暴君愚王を誅して新に國王となつても、それは武力の效果であつて、徳化はその武力を強からしめる一手段でしかない。

國王は自分の王朝を長く傳へしめるために國の隆盛を欲する、國外に威名を誇らんがために國の隆盛を欲する。王族のみ獨り榮華を極めんがために國を衰へしめる國王があれば、それは暗愚の君主である。明君は國の隆盛を望む。國の隆盛は即ち國民が王徳を謳歌して富んで平和であり、隣國の民その徳を慕つて移り住むことである。この隆盛を國王は民自身のためにそれを望むのではなくて國王自身のためである。即ち民は客にして王が主なのである。徳化は國王の方便に使はれるのだ。

しかし天下の亂れてゐる時は徳治主義は直接の効果がなく、武力と法治主義とによらねばならぬ。暗愚の君はそのために徳治主義を捨て、専ら武力と法治主義とを取る。封建制度の亂れた春秋時代の末期たるの時、孔子の「聖王の道」が天下に容られなかつたのは至當であつた。明君といふものは世に稀れなものだ。

○

しかるに其後、今日に至るまで支那、朝鮮、日本にわたつて、殆ど國學國教として孔子の教が踏襲されて來たのはどういふ譯であらうか。それは國にあつては政權所有者、社會にあつては貴者、長上の者、家にあつては親及び良人、兩性間にあつては男がそれを利用して以てその位置を保つた至極便利調法の學説であり、孔子を聖人と崇めて孔子の教を聖人の教で先天的に人間の必ず行ふべき眞理であるやうに造り上げて、弱き者たる國民、子弟、女子をして國家、社會、親や夫や男に叛かしめず、秩序を保つて現勢を維持して行くことになつてゐたからである。

政權所有者が長くその位置を保ち、より盛大になるには國を治めねばならぬが、それを治めるにあつて、武力や法律を用ゐることは費用のかゝる方法で、また面倒くさいことである。孔子



の道の徳化法によれば、それが根本的方法でまた費用のかゝらぬ安全のやり方であるから、利の者は孔子の教を國教としたのだ。

孔子の仁の教は政權者をして仁政を施すことになった。これから言つて、孔子の教は民本主義であるが、この民本主義は一國を維持し、政權者が長く政權を維持するためには、民に仁政を施して民を歸服せしめて置かねばならぬといふ、民を道具に使ふ意味に於ける民本主義であつて、現代の民本主義とは大に意味の違ふものであるから、今までの政權所有者が國教となすに都合が好かつたのだ。

「一般の民衆は愚であるから政治や教育を施しても、これに従はせることは出来るが、その理由を悟り得させることは出来ない。(泰伯篇)これが「民は依らしむべし、知らしむべからず」の政權者のモットーとなる所以である。現代の政治家でも未だこの傾向がある。

それから政權者が民をしてこの教を學ばしめたのは秩序を重んずること、忠義心を養成することの學であつたからで、家長や親が子弟にこの教を學ばせたのは長上を重んじ、孝行心を養成させる學であつたからだ。孔子は「孝」といふことを力をきはめて説いたことは此處に列擧する必要

がないほど周知のことだ。

孔子は堯舜を理想人として堯舜の世を理想國としてゐたから「物事には一定の道理があるが、世の中にはその道理をよく知らないで、こぢつけて新説を立てる人がある。吾れは決して斯様なことはしない」(述而篇)斯の如く理想を過去に置く彼れには進歩といふことがない。これが現狀維持の政權者や長上や人の親には都合の好い教である所以だ。

### (五) 現代と孔子

宋の桓魋が孔子を殺さうとした時、門人達が恐れたのを孔子が慰め諭して「天が吾れを此世に生じて吾れに聖人の徳を與へたのは吾れをして民を救ひ世を導かせるためである。故に桓魋が吾れを殺さうとしても天が必ず吾れを佑けるに相違ない」(述而篇)と言つた。

命は天が萬物に與へるもので、その意義は通常の人には不可解であるから、孔子はこれに關したことは滅多に言はなかつたさうだ。(子罕篇)

子服景伯が公伯寮といふ男の仕方を悪んで孔子に告げて、公伯寮を殺さうと言つた。孔子は「道



の行はれるも行はれぬもみんな天命によることだ。天命は人力をもつて如何ともすることの出来ないものだから、公伯寮の自由に物事がなるものでもない、天命にまかせて置けばよろしい』

（憲問篇）と言つた。

『徳の勝れた人は畏れることが三つある。天の命令を畏れ敬つて、如何なる時でも如何なる所でも仁義禮智の徳にたがはぬやうに心がける。徳の高い位の尊い人を畏敬してこれに師事して決して輕侮することがない。古の聖人が残した訓言を畏敬してこれにたがふことのないやうに勉める。』

（季氏篇）

孔子は天を信じ、天命を信じた。堯帝が天子の位を舜帝に傳へる時に『舜よ、天の御心によつて汝が吾れに嗣いで天子の位を踐むことになつた。中正の道を守ることが出来ないで、天下の民が困窮するなら天から與へられた天下の富と師王の位とは永久に汝の身を去つてしまふ』と言つた。舜帝が夏の禹王に位を譲る時も同じことを言つた。殷の湯王が位に即いた時に『謹んで天帝に申し上げます、常に天帝の御心に従つて決して私意を加へません。もし人民に罪があつたら私一人を罰してください』と天に言つた。殷に代つて天子となつた周の武王に就て、孔子は『周は天

から大きな賜物があつた、それは善人が澤山にゐたことだ』と言つた。（堯曰篇）仁者は天命に安んじてゐるから憂ふことがない。（子罕篇）天と天命との思想は支那固有のものだが、孔子は能くこの天命に従つた。

しかし老子の天命と孔子の天命とは違つてゐる。老子の天命は「道」に現れてゐて、自然法則の「道」に従つて無爲にして自然に化すといふことに向つて行つた。孔子の天命は「聖人の道」に現れて、禮義道德の「仁」に従つて有爲にして人爲の律法に従ふ方面に向つて行つた。

「道は宇宙の萬物に通ずる原理であつて、人が人として行動する以上かならずそれに由らなければならぬものだ、仁者がこれを見れば仁と言ひ、知者がこれを見れば知といふ」（衛靈公篇）この「道は宇宙の萬物に通ずる原理」は老子の「道」とは言葉だけが同じで、意味は大に違ふ。老子のは自然法則となり、孔子のは人爲の法則となつた。

しかし老子は禮を去つて心に平和を得ようとし、孔子は禮に従つて心に平和を得ようとし、老子は無意に師表とならうとし、孔子は有意に師表とならうとし、老子は自ら官を捨て、世に隠れ、孔子は止むを得ず官を捨て、故國に歸つて民間に處し、老子は自然法則に依りながらそれに徹底



せずして有爲無爲に固執し、善惡に固執し、「道」に固執して、自然主義に徹底しなかつたし、孔子は天命に従ふと言つてゐながら、それに徹底せず智慧分別をもつて人生を律して行つた。

○ 『君子、小人、皆おなじく人間である。しかるに君子小人の區別のできるのは教育の如何によるものだ。故に教育を施せば總ての人がみんな君子となる。(衛靈公篇)』

『學に志ざす者は最高の善(仁)を修得して精神上の満足を求むべきものだ。然るに住宅家具のごとき肉體に満足を與へるものに心を馳せるなら、學に志す資格のないものだ。(憲問篇)』

『學問の目的は知徳を磨いて人格を完成するにある。俸給のことなどに考へ及ばない人は眞に學問を好む者である。(秦伯篇)』

『世人が争ひ求める富といふものが若し求めて得られるものなら、どんな賤しい職業をしてども求めようが、天から與へられるもので人力をもつて求め得られるものでないから、吾れは天命に安んじて己れの好む道に従事しよう。(述而篇)』

『君子は不義の富貴に居ようとはしない、貧賤を恥ぢとしない。不義の富貴を貪つて貧賤を恥づ

る者は君子の資格がない。(里仁篇)

私は幼少の頃から以上の如き意味に於て教育された。そして自分もまたそのつもりで學修した。そのために私は貧困に苦しみ、修養の苦悶に悩んだ。斯くして四十歳に至つてこの孔子の君子の教が自分を誤つてゐたことを悟つた。そのために後悔をした。そして心の平和が一時に私を見舞つてくれた。

孔子の教は君子の教であつて、學問をするのは君子になるためで、その道德は君子にして初めて實踐躬行し得られるもので、小人凡夫の決して及びもつかないことだ。孔子は君子小人の別は教育のあるなしの問題だと言つてゐるが、その教育が小人凡夫にはなかく、不可能のことで、孔子のごとき人物でも自分は君子には至らぬと言つたくらゐだ。

私は正直に孔子の道に欺かれて衣食住の生活のことは考へずに一意専心、君子に至るの學を修め、身の修養をなした。そして四十歳の時に、自分は結局小人凡夫であることを知り、君子ならざるものが君子と同じことをしようとするのは大なる誤りであることを悟るに至つて、重荷を下したやうな平和な氣持になつた。



孔子のごとき人物ですら完全に君子になれぬものが、普通一般のものがどうして君子になれるものか。一般の民衆は愚であると孔子自身すら言つてゐる。吾れは其の愚なる者である。とても君子にはなれぬものである。然るに世の多くの者はこの君子の道に引ずられて重荷を負つて如何に多くの悲劇を演じてゐるか。世の多くの悲劇を見るに、この君子の道の重荷を他人に背負せたり、また自分が背負つたりして、他人を責め、己れを責めて苦しんでゐるのが大部分である。凡そ人間は一般に小人凡夫であるのだから、それを正直にそのまま小人凡夫視して、小人凡夫の安全に生きる道を講すべきである。

○

今の世に於て孔子の聖人の道は到底われは小人凡夫を幸福にするものではない。むしろ不幸におとしられるものだ。

人間は先づ生きねばならぬものだ。そのために學業の必要がある。君子になるために學業があるのではなく、生きんがためだ。今の世に於て、學校教育を受けた者が惡事を働くと、高等教育を受けた者がそんなことをやると言つて教育の効果を疑ふやうなことを世間では言ふが、今の

世の教育は君子になるためではなく、生活せんがためである。生計の道を得んがためである。

君子は知仁勇の三徳を備へるから、惑はず憂へず懼れずに心は常に平安であらうが、君子でない小人凡夫の吾れは其のお金がなければ不安であり、悲哀である。吾れは小人凡夫の幸福不幸は富めるか貧しきかである。

仁政をもつて民を治めるこれは誠に有りがたいことであるが、今の世の吾れは孔子のいふが如く愚民ではあるけれど、聖人君子と同じく人間であるといふ自覺のもとに立つてゐる。他人から治めてもらひたくない、如何に惡政でも自ら治めたい自治を欲する人間になつてゐる。吾れは聖人君子から治めてもらふのでなくて、吾れが適材を選んで、その人をして政務をとらしめるのである。吾れは國を富ませるため榮えしめるためにあるのではなく、吾れのために國を富ましめ榮えしめるのだ。

吾れが此世に生を受けた以上は死ぬまで生きるのだ。生きてゐる間の人生を楽しむのだ。人生のために吾れがあるのではなく、吾れが生きるために人生があるのだ。孔子は『あしたに道を聞いて夕べに死すとも可なり』と言つてゐるが、吾れは道を聞いても死ぬまで生



きてゐるし、道を聞かなくても死ぬまで生きてゐる。

孔子は「不義の富貴は浮べる雲の如し」と言つた。それでは不義でない富貴はどんなものであるか。富貴は生きんがために使用し費消すべきものだ。それが浮雲のごとく絶えて無くなるのは不義でも不義でなくなつて同じことだ。たとひ浮雲のごときのもでも、それが無いよりは大に優つてゐる。吾れは富まねばならぬ。しからざれば生きた甲斐もなく、心に平安もなく、義理も人情もなくなつてしまふ。

孔子の教は君子にのみ當てはまる教で、君子養成のためにある。それが國教となり、一般の道徳となつたのは、前にも言つたやうに政權所有者、上長者、人の親や夫などに都合が好い、また人を責めるに都合があつたからである。一般人の小人凡夫には苦しめられる教であつても、幸福にするものではない。

現代の青年男女が自分達の人生には無用のものとして孔子の君子の教に一顧をも與へなくなつたのは無理のないことである。

## 第六講 カーライル

中西伊之助

- (一) 労働者の子、社會思想の先覺
- (二) 超人カーライル
- (三) 衣裳哲學
- (四) 永遠の否定
- (五) 永遠の肯定
- (六) 宇宙及社會觀



(一) 労働者の子、社会思想の先覺

「貧乏人の境遇は、日に日に悪くなつて行く、世界はこのままでは續かぬ。いや續く筈がない。たれもその際涯を見きわめることのできぬ、偉大なる變化が近づいて來てゐるのだ……」

丁度、それは、ナポレオン戦争後の甚しい不景氣の來た時であつた。日頃あまり口敷をきかぬカーライルの父のジエムスも、わが子にかう云つてきかせた。父のジエムスはもとは石工であつたが、その後農夫になつた。——それからもう百年はたつた。が、歐洲大戦後の不景氣は、今や襲ひ來つた。吾々は、再び、カーライルの父から、さうした恐ろしい豫言をきかなければならない時代ではなからうか。

カーライル——その名は、日本人の耳にはかなり親しみを感ずる。そして、英雄崇拜論と衣裳哲學の彼を知らぬ人は少いであらう、その名をきいてから、吾々は多くの新しい西洋の哲人、文豪を迎へた。しかし、眞理は新しいものばかりには限らない。眞理は、太古の霧の中にもひそんでゐる。吾々は、悉くカーライルに左袒するものではない。が、吾々は、英國十九世紀の初期の



生んだ、この偉大な哲人の人生觀にも十分に耳を傾けてみる必要はないであらうか。

十八世紀の末から十九世紀にかけて、英國を中心に起つて來た産業革命は、カーライルが生れて漸く人生と社會に知識の眼を開かうとする時、益々激甚となつて來た。人々はその嵐のやうな社會の變遷に驚異と不安の眼を開くやうになつた。時恰かもナポレオン戦争の後をうけて經濟界の不安は益々盛んになつて來た。そして失業者は續出し、労働者の暴動は到る所に起つて來た。

英國政府は、この社會不安に對應するために、一八三二年、選挙法の改正を行つた。そして、その議會政策に望みをかけてゐた労働階級は、一時、小康を得たやうであつた。が、そのからくりは、直ちに暴露された。その改正の結果、多少の利益を占めたのは、中産商工階級のみで、労働階級は與らなかつた。中産階級は、選挙法を擴張するためには、労働階級と提携はした。が、その改正が達しられると、直ちに労働階級を裏切つてしまつた。そして、貴族階級と苟合した。労働階級の望んだ工場法の改正は、見事、失敗に終つた。それに乗じて資本家は、労働者を酷使して益々暴威を逞ふした。

人民憲法を要求するチャーティズムの運動は、その時に起つた英國の民衆運動に外ならなかつ

た。貴族に屬する地主階級は、穀物條例を作つて、饑饉以上に穀物を暴騰せしめたのが、この運動の直接の原因であつた。

この社會混亂の時代——英國を中心として捲起つてゐる産業革命の不安の中にあつて、多くの思想家、革命家は、口をそろへて、社會改造の急を叫んだ。労働者を父に持つたカーライルは、その中にあつて最も強く社會に謝つた人であつた。彼もまた、社會改革者としての情熱をもつた哲人であつた。

カーライルは、そのために、かなり多くの著作をした。「チャーティズム。」「過去と現在」「現代評論」「ナイヤガラの逆落し」等が重なるものである。

カーライルは、貴族、地主、及び大資本家にたいして、強い憎惡心をもつてゐた。そして、多くの労働者にたいして、熱い同情と、明るい理解を懷いてゐた。彼は、一介の労働者の子に生れて、一片の麵麩の中にも、いかに尊い労働者——人間の汗と血とがこもつてあるかを知つてゐた。

食料品は、暴騰に暴騰を重ねた。オートミールは、一ストウン、十シルリングにもなつた。多







ゐるのに！

社会は統治者に命じた。「襯衣の分配をよくせよ、わが人間の法則をして神の法則の標識たらしめよ」と、そしてその分配はどうか、二百萬の襯衣無き労働者は、救貧院の牢獄中に坐つてゐる。尙ほ五百萬の者はうごりのやうな飢餓の窖の中にゐる。そしてその救済法として諸君はなんと云ふ「わが地代をあげろ」と。そして自分たちは何をしてゐる。鷓鴣や雉を撃つて喜んでゐるのだ。

カーライルは、貴族にたいして、「獵鳥保護者」と云ふ渾名を與へた。獵鳥を保護して、それを見たのしみにしてゐる有閑階級と云ふ意味である。

カーライルは、かうして、尋常平凡な哲人ではなかつた。彼は、少くとも十九世紀に於ける英國に生れた、社会思想の一先覺であつた。が、その價值については、後節に述べる機會があらう。

## (二) 超人カーライル

トマス・カーライルは、一七九五年の終冬。スコットランドの西、アナンデイルのエツクルフェ

チャンの村に生れた。

彼の生れたアナンデイルは、スコットランドが、アイルランドと戦つて、悲壯な血を土に塗つた國境戦争のあつた地である。そのために、このへんの住民は、すべて標悍な人が多い。彼の父、のジエムス・カーライルは、純粹のアナン人であつた。彼が、石工で、その後、農夫になつた労働者であつたのは、前に述べた通りである。

ジエムスは、無口で、氣むづかしやで、且つ勤勉な人であつた。母は、情の濃やかな、宗教の信仰の篤い人であつた。彼女は、カーライルを殊の外愛した。彼女は、そして彼を熱心に教育した。彼女は、彼に、人をなぐらぬことを誓はせたり、バイブルを読むことを忘れぬやうな習慣をつけた。カーライルには、一人の異母兄と、弟が三人、妹が五人もあつた。従つて、彼の一家は、貧しかつた。多くの子供たちは——勿論トマスもまぢつて——オートミールと、牛乳と馬鈴薯を常食として、いつも、裸足でかけ廻つてゐた。

カーライルはかうした家庭に育つた。いつも不足勝ちで、そして一家を支へて行かねばならぬ父は、終日、工場や野外で労働をしてゐる尊い姿を彼は見せられてゐた。



カーライルの人生観は、その父の姿によつて、まづ概念づけられて行つた。彼の幼年から少年時代、——彼が十四の時、エディンバラの大學には入るまでの間に、終日彼の眼から放れなかつた、愛する父の姿を徹して、彼は、彼の大きな人生観の搖籃時代を作つた。

カーライルの人生観は、その老ひたる労働者の人生にならなかつた。人間がこの世に生れて来たのは決して遊ぶためではない。また、考へるためではない。嚴肅に、正しいことを爲し、行ふことである。自分の安樂を思ふ程、間違つたことはない。人は、できるだけ、自分達の快樂を棄てることを心がけねばならない。

人生の分數は、我等の賦運を分子とし、そして慾望を分母とする。分子の方を無限大にしようとしても、それは到底できないものである。無限の價値を得ようと思へば、分母即ち慾望を制することである。禁慾は、眞の人生に入る門である——。彼のこの人生観は、彼の敬虔質素勤勉なる家庭に於て育まれたものでなければならぬ。彼の老いた父の姿を通して、自然と生み出した人生観でなければならぬ。人生は、あくまでも嚴肅なものである。吾々は、しつかりと緊張した氣持で、人生を迎へねばならない——カーライルは、人生にたいして襟を正しうすることが、そ

の人生観の最初であつた。

アナンの町の文法學校から、彼は一八〇九年、十四の時、エディンバラの大學に入つた。貧しいカーライルの家で、トマスを大學に入れることは、非常に困難であつた。が、秀才であるカーライルを、父は愛してゐた。そして、彼を牧師にするつもりで、敢然と彼を大學に送つた。

スコットランドの大學は、オックスフォールドやケムブリッジとは違つて、學生に貧乏な子が多かつた。従つて學風は質素で、熱心に勉強する者もあつた。

その當時のカーライルの生活は、貧しかつた、彼は、田舎から、父が運送屋に持たせて寄越す卵子や、バターを、貸間下宿で食つては、勉強してゐた。學校の成績はいい方ではなかつた。が、數學だけは良かつた。彼はその時に、學科の外に、色々な書物を読んだ。その頃から、宗教にたいする疑問が起つて來た。

彼は大學を卒業すると、一まず、故郷へ歸つて、學校教師をして、牧師になる準備をした。が、彼は、もう牧師になる心はなかつた。

『糊口のために教師をするくらゐなら、死んだ方がましだ』と彼は決心して再びエディンバラへ



やつて来た。そこで、彼はマーガレットと云ふ、一人の少女と戀に落ちた。「衣裳哲學」の中の、女主人公が、そのモデルになつてゐる。

丁度、その頃、英國は、社會不安の漲つてゐる時代であつた。父が、彼に、

『世界は、このままでは續かぬ』と呟いたのは、その頃であつた。カーライルが、彼の親しい友、アーピングと寄り合ふと、いつも社會問題の話で持ち切つてゐた。グラスゴウで暴動の起つたのも、その頃であつた。

一八三四年、彼は倫敦でシエイン・エルシ嬢と結婚してゐたが、彼女は、夫にたいして、「背水の陣」を張れと云つたので、彼はロンドンに出た。そこで、彼の有名な『フランス革命史』を書かうとした。

が、その當時の彼は、不安と絶望に充ちた生活をしてゐた。彼のその時の手記には、かうある。「倫敦に於ける私の境遇ほど、心もとないものはなかつた。私は世間的の友人もない。心を打明ける人も無い。私は五日間もぶつつづけに、妻以外には誰にも話もせず坐つてゐる。妻以外には誰にも話をせず坐つてゐる。如何なる雑誌の編輯者も、私には寄稿をたのむ氣はない。誰も

私の著作にたいしては金を拂ふものがない。——全く無一文になりはしないかと云ふ、笑止至極の不安が私を取巻く」

彼は、前に住んでゐたクレイゲンバトックからもつて来た二百磅の金で、一年間の生活を支持するつもりであつたが、それから先きは、もう全く手段がなかつた。「フレザー雜誌」に出た「衣裳哲學」の出版をエディンバラの書肆に出版することを交渉したが、一向返事が來なかつた。ミルなどが創刊した「倫敦評論」に主筆としてたのまれるかと一縷の望みをかけてゐたが、それもだめであつた。「佛蘭西革命」の第一を書きはじめたが、種々な疑惑が彼を苦しめた。彼は、もう文筆生活をやめて、青年時代に考へてゐた土木技師にならうかとも思つた。そしてその著「佛蘭西革命」がだめであれば、彼はベンをすててアメリカに走らうと決心した。

この逆境時代に、彼の氣魄を伺ふ一つの事實がある。彼のこの時代に、彼の同情者であつたジョン・スターリングの父は、倫敦タイムスの匿れたる主筆であつた。そして、カーライルに、同紙へ執筆するやうに盡力しようとした。が、それには、カーライルが、自分の政見にたいして、保守黨と妥協しなければならなかつた。



そこで、彼は、友人の好意を断つてしまつた。

『佛蘭西革命』は、苦心の結果、漸く書きあげた。そして友人のミルが望むがままにその原稿を見せた。丁度、それは、一八三五年三月六日であつた。彼は、れいの如く、終日『佛蘭西革命』の續稿を書いて、夫人と共に、一息みしながら茶をのんでゐた。と、そこへ、ミルが眞蒼な顔をしてやつて來た。カーライルがミルにそのわけをたづねると、ミルは、誤つて、その原稿を焼いてしまつたのだと云つた。

カーライルは、ミルの歸つたあとで、夫人に云つた。『ミルは可哀想に大へん惰氣である。私たちにとつて、これがどれほど重大な問題であるかは、あの男にかくして置かねばならない』——これが、カーライルの人物であつた。エマーソンは、彼の『衣裳哲學』を、米國で出版するやうに骨を折つてくれた。

その翌年、一八三七年、一月十二日、彼の大著『佛蘭西革命史』は、遂に脱稿した。彼は、嘔つと息を吐いて、戸外に出た。彼は、机を離れる時に、夫人に云つた。

『この本に値打ちがあるかどうか世間がこの本をどう問題にするか、どう誤るか、全く問題にし

ないか、俺は全く知らない。しかし、俺はこれだけのことを云ふことができる。——生きた人間の肺腑から、これ程ぢかに、焰を噴いて出て來た書物を、貴様たちは見たことがあるまい。畜生。どうなりと勝手にしろと！』

が、それが發表された後の、世間の評判はあまりよくなかつた。ただ、ミルと、サツカレーが好意のある評論をした。

しかし、眞に價值あるものは、そんなに長く埋まつてゐるものではない。彼の著書と、彼の學才と、識見は、漸く社會に認められた。そして諸方から、講演などをたのまれた。『チャーチズム』は、小冊子ではあつたが、千部は直ちに賣れた。そして、彼の『名聲』は高まつて來た。

カーライルは、その頃、彼の母に手紙を書いた。

『萬事が、かなり都合よく行つてゐます。私は最早や昔ほどに金に心配して煩悶しないでもよくなつて來ました。「名聲」と云ふものが、若し利益があるものとすればこゝにあります。それより外に、殆んど用はありません。いや、全くありません。』

カーライルの、この心持——この心持は、恐らく、世の中の賣名漢には解し得ぬ心持であらう。



この虚無的な心持が、彼を眞實にしてゐるのだ。彼の人生觀が、強い眞實性をもつて人を動かすことができたのだ。

世間に名聲を要しない人——それが、むしろ煩しく感ずる人の、虚無的な心の眼に映る人生がほんたうの人生である。大きい、燃えるやうな野心のある人にとつては、決して眞實の人生は映りはしない。時代を超越した哲人に、眞の人生觀が生れるのはそのためである。時代を超越すると云ふことは、隠遁すると云ふことではない。あらゆる人間らしい名聲地位財實にたいして、その無價値を發見した人である。

カーライルのこの短い母への手紙の中に、彼の深い人生觀が藏してゐる。

『名聲』——それは、多くの人間。わけても野心に燃える人間たちにとつて、禁斷の美果よりもなつかしいものである。しかし、それは、カーライルにとつては、蛙聲のやうに煩しいものである。その價値は、マコレイも云つたやうに、『バイロンを九天の高きに上げたものも倫敦市民である。彼を九仞の谷に突き落したのも倫敦市民である』ほど水泡の如きものである。その名聲に囚はれて、焦燥する人々の心には、眞實の人生觀は、決して生れない。——カーライルは、眞實な

る人生觀を生むに適當な人であつた。

彼は、更らに母に書いた。

『人が四十を過ぎて、その上に殆んど二十年も胃病と貧乏に苦んだ經驗があれば、成功の爲めに逆上るやうな危険はありません』と、

かうした性格のカーライルは、決して快活な人ではなかつた。彼は、エマーソンの樂天觀が解することのできないものであつた。彼は、エマーソンに手紙を送つて、かう云つてゐる。

『私を寛大に見て下さい。そして同情して下さい。あなたは、私が、どれほど重荷を負ふてゐるか知らないのです。私の神経は、ひどくみだれてゐるのです』

彼は、自分の手記に

『私は年が寄つてゐる。私は老人になつた。私の次の著述は老人の書物であるに違ひない。』  
『私はこの世の中で、なんとまあ一人ほつちになつたことだらう。昔のやさしい愛情は、皆な私の中に宿つてゐる。しかし、それは、丁度氷結してしまつてゐるのだ。』

一八六六年に、彼が、長い著述家生活の中の、唯一の味方であつたカーライル夫人が死んだ。



「最早やわれらは愛することができない。われらの聲をきくことかできない。死せる愛人を思ふ時、悔恨の情はいかにはげしいことであらう。明らかな教訓が二つある。汝は汝の愛する人に親切を爲さむと欲するか、悔ひても及ばぬ未來の來らぬ中、今直ぐになせ。汝の心の友が不注意に、或は無遠慮に、汝の心を傷けたか。あゝ彼をゆるせ。汝が死せる時、彼が自ら罰すべきを思へ。」

「外面的には、なにこともまづ世界で云ふ、「景氣よく」行つてゐる——私のあわれなる同胞たちからは、すい分尊敬されるが。——しかし、それは些細のことになつた。自分でも驚くばかり、全くどうでもいふことになつた——個人的の友だちも澤山あつて、すい分親切にしてくれる。——私はこれらの人々を、全然避けもしないが、また、求めもしない。談話は私を喜ばせるよりも、むしろ、一たいに疲せさせる。私は私自身の思想と追想とを友とし、所謂死人との談話をしてゐる方が、たしかにより悲しくはあるが、より健全な時間つぶしであることを見出すのである。」

彼のこの心持は、社會の虐偽、人間の醜惡を眞に悲しく思ふ人であつたらばすぐ理解することができるであらう。

一九六九年、彼は、自分では決して求めてゐなかつた「名譽」が彼を見つけ出した。彼はヴィ

クトル女王に謁した。一八七四年には、プロシアの勳章を受けた。彼の七十回の誕辰には、ピスマークから祝詞を送つた。その年ジイスレイは、彼に准男爵の位を與へようとしたが、彼はそれを受けなかつた。

### (三) 衣裳哲學

彼の人生觀は、かうした彼の人生より醜醉されて、徐ろにできあがつたものである。そして、彼の人生觀は、その著書の隨所に發見することができるが、しかし、それを最も具體的に述べてあるのは、『衣裳哲學』である。彼の人生觀の系統を研究する前に、まづこの著述を一瞥する。

『衣裳哲學』では、最初に、彼の自叙傳——その作中のトイフェルスドレックと云ふ、衣裳哲學者の自叙傳があつて、その次に、その哲學者の人生觀が述べられてある。

この書物の名の『衣裳哲學』と云ふのは、つまり、人間の着る衣裳を、宇宙人生にあてはめて、彼の哲學を説いたものである。そしてそれは、またゲーテが自然は神の生ける衣裳であると歌つたところに暗示を得たのである。



この書は、第一に、衣裳哲學者トイフェルスドレックの傳を叙べて、カーライル自らの人生觀を述べてゐる。

トイフェルスドレックは、ワイスニヒツラーのワーンガツセー——迷ひ小路——の最も高い屋根裏に住んでゐる。そしてその部屋の書物や原稿の中で、終日煙草の煙を吐いて、空を仰ぎ、遙かに低い地上を蟻のやうに這つてゐる人間の群を見渡して、悠久の人生を考へてゐるのである。

彼は、時々、綠鷺亭と云ふカフェに行く。そこで珈琲をのみ、煙草を吸つて、いつも沈黙してゐるが、しかし、いゝ話相手を見つけると、宇宙、人生について、滔々懸河の辯を揮ふのが常である。そして一座のものは、その説にきゝ惚れる。が、たれも、この謎のやうな人間——哲人の身の上を知つてゐるものがない。彼の宿へは、滅多に来るものがないが、蟋蟀ホイユレックと云ふ友人がよくやつて来るそして彼ののみは、この男の自叙傳を整理してゐると云ふことだ。その自叙傳が、カーライルの手には入つた。で、この謎の哲人の、生涯がわかつたと云ふのである。

トイフェルスドレックは、南ドイツの、エンテプールと云ふ村に住んでゐるアンドレアスフツテラルと云ふ老兵士の家に生れた。しかし、彼はある日、フツテラルの家へ老人が籠に入れて持つ

て來たのであつて、ほんたうの子ではなかつた。

彼は、母になる人から、忍耐を教へられた。が、それは、彼が大きくなつた時、非常にいゝ結果をもたらした。つまるところ、人生は、まゝならぬものであつたからである。自分の意志にたいして、因果の必然や、道德の義務が、遙かに優越を占めてゐる人生である。人は、いくら早く從順を學んでもいゝのであつた。

貧乏な彼の父も、彼を大學に入れてくれた。が、彼は大學を尊敬できなかつた。大學の教授等は、『盲の手引をする盲』で、過去の名聲によつて、十年二十年以前に習ひおぼへた學問をくり返してゐるのであつた。

しかし、ともかく、彼は大學を卒業した。そして司法官試補のやうなものになつた。ここで、カーライルの人生哲學が現はれて來る。

彼の化身である哲人——トイフェルスドレックは考へる。人間には、自分の天分がある。そして、自分の天分と、外界の境遇がびつたりと合致した時、その人は、偉大なものになれる。が、多く、——いや、全く、世の中は、さう詭へ向きにはゆかない。そして、その兩方を調和させる



ところに、人生の大問題が横つてゐる。

しかし、人間は、食はずにはゐられない。その生活のために、自分の天分を殺さねばならなくなる。そこで、さしづめ、手近い職業に就くことになる。そして、その職業の奴隷になつて、馬車馬のやうに徴役人のやうに、傍目もふらずに働くやうになる。

さうした中にゐて、眞に偉大な精神を懐いてゐるものだけは、決して、その境遇に満足することはできない。持つて生れた天分を伸ばすためには、いかなる困難も辭しないと努力する。

つまり、その哲人は、この偉大なる精神をもつてゐる人間であるのだ。

彼は、大學時代から、近世の懷疑思想に囚はれて、人生問題に悩んでゐた。故に、彼は同僚のやうに人生の平凡なプログラムに依つて、生活を送つて行くことができなかった。そこで、彼は、思索と讀書に熱中したりした、とにかく、他のものよりも、變つてゐた。彼は、いはゆる變人とされてゐた。

世の中では、お互ひに持ちつ持たれつ行くところに、いゝこともある。そこで、世の中の才子や、老獪なものは、交際と云ふことに重きを置いて、努めて他人の感情をそこなはぬやうにして、

たくみに世の中を渡つて行かうとするが、彼は、それと全く反對であつたから、孤獨であつた。が、彼の最初に、出くわしたことは、ブルーミネと云ふ、若い美しい女との戀愛事件であつた。そして、彼は彼女の愛を得ることができた。間もなく、彼女は、彼を去つてしまつた。そして、彼女が、他の男と新婚旅行をする現實を目の前で見せられたのであつた。

彼は、ひどく絶望した。そして自殺をしようとまで考へた。しかしその時、幼少から、母に受けた、忍耐の力があつた。そして、性來の寡黙な性質があつた。彼はひとり淋しく放浪の旅に出た。

『弱いと云ふことこそ、不幸である』と、ミルトンの失樂園で、サタンが云つたことを彼は考へた。彼が若し、自分の衷に、神にたいする強い信仰を持つてゐたならば、決してかうしたげしい絶望はしなかつたであらうと思つた。自分が、懷疑思想に囚はれてゐたがために、かくも自分は絶望しなければならなかつたのだ。

しかし、強くなるには、信仰が必要である。自分は、自分がなし遂げた、また爲し得られた事によつてしか、自分を支配することはできなかったのである。つまり、自力によつてしか、自分



は自分のことをして來なかつたのである。が、自分は、一たい、これまでにどんなことをして來たであらうか？　そしてどのくらゐ、自信があつたであらうか。

この哲人——カーライル自身の人生觀は、ここから、大なる轉機として現はれて來たのであつた。彼は、今まで、すべての人生を、唯物的、機械的に見て來た。そして、『永遠にたいする否定』であつた。

が、彼は、もうこの永遠の否定では、どうしても生きてゐるわけにはゆかなかつたのである。永遠の否定、——それについて、もう少し詳しく、彼の今までの思想過程を探究する必要がある。

#### (四) 『永遠の否定』

カーライルは云つてゐる。

『私は無秩序な書庫の中から、館員も知らぬやうな書物を探し出して讀んだ。文學的生涯を送るやうになつたのは、かくして作られた。私は自力に依つて殆んどすべての文化を有する國語を自

由に讀み得るやうになつた。私は科學その他あらゆる部門の書を読んだ。人間が人間にとつては、常に研究の主要な題目であるが故に、思索の特性を讀み、書かれた人から書いた人を研究することが、私の好む仕事になつた。人間性と生活のある基礎的概念が、私のうちに自づから出來かけてきた。そのことは、當時物質及び精神的の世界が、私にとつては、尙機械であつたことを考へると、かなり驚くべきことであつた』

この人生にたいする、機械的説明の努力——これが、カーライルの、思索的生活の、前半の態度であつた。

彼は、大學でも數學を學んでゐた。そして幾何學は、最も高尚な學問であると考へた。それで、彼が、アンナン・アカデミイに教師となつた時も、數學であつた。

彼の數學の研究は、確實な本體の研究と云ふことであつた。文學を好まないのではなかつたが文學のやうに漠然とした、掴みどころのないものに、満足することができなかつたのであつた。彼は、最初の、牧師とならうとした決心を抛棄した。そして法律家にならうとしたが、それにも満足ができなかつた。その苦悶は、既に述べた經歷の中にも現はれてゐる。



彼は、今までは、當時英國の思想界を風靡してゐた實證哲學。——經驗、合理の分析的な精神をもつことにほこりを有してゐた。そして理想主義を排して、機械的な科學の研究をした結果は、信仰を失ひ、若い心の憧憬を拒まれた。

彼の人生觀は、人々は、無意義な人生を機械的につゞけて、自己の幸福を追ふ一つの存在に過ぎないのであるが、宇宙はすべてさうした個人的幸福を拒否して、唯大きい幾多の生命を吞吐する呪はしい存在に過ぎないと云ふのであつた。

彼は、神も、惡魔も信ずることができなかつた。そして人生にたいする、何等の希望も光明も認めることはできなくなつた。彼の人生は、愛もなく、悦びもなく、一種の、漠然とした大きい恐怖——死の威嚇に怯えてゐるより外になかつた。怯懦と戰慄の外に、彼は何物もなかつた。

彼は、宇宙が、自分を傷けようとしてゐるのだと考へた。そして、いつ、自分の軀を、宇宙が呑みこんでしまうかわからないやうな豫感に怯えた。彼が、三週間も絶對不眠の生活を送つたのもこの頃である。

見よ、産業は、到る處に、手工業——平和な家内工業——を驅逐して、工場的、機械的産業が

取つて代つた。労働者の個性、人格は無視されてゐる。社會制度も、機械的に組み立てられて來た。富は一部少數の階級に集中して、貧しきものは、益々數を加へる。人は、單獨に生活することはできない。この、機械の一部の組織の中に組み入れられなければならない。

直觀は斥けられた。組織的、機械的、研究調査——學者は、研究會の書記であり、調査會の事務員となつた。そして、孤獨、直觀の思想家は認められなくなつた。精神科學は衰へて、自然科學は妄信せられるやうになつた。個性の教育は滅びて、職業人の教育となつた。哲學は、ロツク、ヒュムに次いで、ハートリイ、ダアウインの時代になつた。道徳は、偉大な英雄的精神を失つてベンダミニズムに心酔するやうになつた。そして最大多數の最大幸福の外には、道徳は認められなくなつた。人々の心を支配するものは、因果哲學であり、損益哲學であり、そして無神論、宿命論、不可知論である。人間は、活ける靈ではなくて、苦樂計量器であつた。——それは、大きな一つの工場に過ぎなくなつた。

政治も遂に機械化するに至つた。國家は、人民を高貴な生活へ導くものではなくて、個人の慾望を際限もなく満足せしめようとする機關になつた。そして、政治は、投票の數に依つて決定せ



られ、その多数の投票を有するものが、自由であり、正義であると信ぜられるやうになつた。文學に於ても、また然りである。人間の驚異や感激は涸渇して、自然と人間の深い無限の調和を唱ふことを忘れられてしまつた。精神的なもの、純潔なもの、誠實なものは斥けられて、官能的なもの、戦慄を催させるもの、刺激の強いものが喜ばれるやうになつた。そして創作も、意識的に行はれる。——かかる機械観が、カーライルの心に、眞理として受入れられて來たのであつた。ヒュムは、宗教をもつて、無智より生ずる迷信であり、錯誤であるとした。カーライルは幼時より養はれて來た宗教的情操を一擲して顧みなくなつた。そこに、彼の『永遠の否定』があつた。

カーライルは、たしかに、この場合、唯物主義者であつた。唯物論、感覺論、無神論は、彼の信条であつた。そして、彼は、人生の永遠性を否定した。ラ・メトリーの、人間即機械論は、彼を喜ばせた。人生に永遠の生命なし、人は、出生によりて生命を受け、死によりて滅亡する。靈魂は肉體に附隨する一個の活動に過ぎないとした。そして、人生の永遠性を否定した。

### (五) 『永遠の肯定』

トイフェルスドレックス——衣裳哲學者は、この永遠の否定を信じて、半生を送つて來た。が、彼は、もう、この一個の人生機械觀に満足してゐるわけには行かなかつた。彼は、戀人の背反によつて、深い絶望と、苦悶を感じた。この宇宙人生は、かうして一個の大きい機械の如く、惡魔の如く、吾々を蛆虫のやうに潰してしまふものであると感じて煩悶することは、畢竟、自分が弱いからである。『弱と云ふことこそ不幸である』そして強くなることである。

トイフェルスドレックスは、巴里の、リユー・サン・トマ・ドランフェルを歩いてゐると、閃光の如く彼の頭腦を射貫いた光があつた。『永遠の肯定』！そして小我の斷滅！これであつた。人間の悩みは、人間の無限の偉大より來る。無限を望むものは、有限に満足することができない。そこに、人間の苦悶がある。地上には幾億萬の人が住んでゐる。若し、彼等か、その無限を欲して相争ふとしたら、地上は一個の大なる地獄である。然り、今、地獄は現出しつゝある。人生は、これを分數にしてみることが出来る。分子は、自己の享樂である。そして、分母は慾



望である。分子を増さずして、分母を零とすることが人生の、悩みを解く方法である。快樂を愛せずして、神を愛せよ——そこに、『永遠の肯定』がある。

カーライルは、遂に功利的快樂説が、その時代の人生觀の基礎をなしてゐることに、反抗した。眞の偉大なる人生的事業は、歴史的にも、また個人的にも、個人的幸福を求むる動機から起つたものではない。利己的快樂の幸福をすて、人生の最高理想たる理性と愛とに奉仕する時、眞の幸福を求め得られる。そしてそこに、永遠の生命を感得することができる。その生命に生きて、それを、行爲によつて實現することである。不健全な自意識、また感傷的な苦悶は、この永遠の生命を實現する行爲に依つてのみ超越せられ得るのである——カーライルは、かう考へた。

かのゲエテは、

『汝の努力を、愛のうちにあらしめよ、汝の生活を、活動の生活たらしめよ。』

『人生は安息ではない。汝の生命を活動に次ぐ活動たらしめよ』  
と歌つた。この言葉は、直ちに彼の思想となつたのである。

カーライルは、かうして、快樂や、個人的幸福を望む心は、眞實なる自我の基礎でないと考へ

た。そして、もつと根元的な眞我の努力に心を傾けた。そこに、永遠の生命を肯定し、小さな自我の超越に達した。——小我の斷滅である。

カーライルは、カントが、時間と空間のうちに神があるのではなくて、神のうちに時間と空間があるとした考察と、ゲエテが、自我の自由なる實現の生活を實際に示し自然に生命あるものと觀て、自然を神の生ける衣裳であると歌つた宇宙人生觀を融合しようとしたシルレルに近づいて行つたのである。

カーライルの永遠の肯定は、トルストイなど、すべて共通の意義をもつてゐる。そして、人生をいかに解すべきかは、カーライルも、トルストイも、シヨオペンハウエルも、また殆んどひとしいと云つていい。

### (六) 宇宙及社會觀

カーライルは、『永遠の否定』から、更らに、『永遠の肯定』に轉じた。そして、彼はその信仰を、彼の私淑したファイヒテの所謂、自我及び人格の活動性、自發性の活動に向ふために、宇宙觀、



社會觀を打ち樹てた。「衣裳哲學」の主人公トイフェルスドレックスは、こゝに強い信仰を懐いて  
ワイスニヒツォウ大學の「物一般學」の教授となつたのである。そして、徐ろに、衣裳哲學を説  
いてゐる。

人間は、たとへば湯屋などへ行つて、湯槽の中には入つてゐるのを見ると、何人もすべて差別  
がなく、全く平等である。然るに、その人々が、その湯からあがつて来て、各自の衣裳をつける  
と、そこに、種々雑多な差別が生じて来る。そして、赤裸々の時には、想像もしなかつた社會が  
作られる。——彼の衣裳哲學はそこから論議がはじまつて来るのである。

が、人間の衣裳は、羅紗や、木綿や、その他の織物ばかりではなく、またその肉體も一種の衣  
裳である。その中には精神を包んでゐる。そして、種々雑多に美しいのや、醜い肉體をもつてゐ  
る。

更らにまた、この肉體ばかりではない。たとへば、宗教の如き、宇宙の神聖なる觀念を象徴す  
る一種の衣裳に過ぎない。哲學、教育、藝術の如きも、やはり同じ意味に解することができる。  
そしてその中心は、神秘不可思議の靈があるのみである。吾々の衷に生き、森羅萬象の中に生き

つゝある靈のみである。靈のみが唯一の實在であつて、他はそれを顯現すべき衣裳に過ぎない。  
——と云ふ。

このカーライルの衣裳とは、シヨオペンハウエルにすれば、即ち表象の世界である。そして、  
カーライルの靈なるものが、シヨオペンハウエルの云ふ意志である。

衣裳の原始的の目的は、防寒であるとか、醜い裸體をかくすためであるとか云ふのではなくて、  
むしろ人間の裝飾になつてゐたのである。それは、現在でも、野蠻人の生活を見ればよくわかる  
のである。しかし、その衣裳が、人間の軀につくと、やがて羞恥が生れて来る。また防寒ともな  
り、防暑にもなるやうになつた。そして最初の目的以外に、必要なものとなつて来た。

現代を見よ。現代の社會は、全くこの衣裳に基礎を置いてゐると云ふことができる。法服を着  
た裁判官が、柿色の着物を着た囚人に死刑を宣告すると、それは直ちに行はれる。士官の服を着  
た人間が、三百、五百の兵卒の服を着た人間に號令をかけると、その多くの人間は手足の如く動  
くのである。それらはすべて衣裳の力である。

かうして、衣裳は、人間の社會に、秩序を與へるのに必要なものではあるが、しかし、その衣



裳の下には、其通の肉體のあることを忘れてはならない。吾々はその衣裳に囚はれると、王と馬丁とは、永遠の差別があるやうに考へられる。が、それは全く大なる間違ひであつて、その双方には、共に人間らしい慾望をもつてゐるが、しかし限られた能力しかない、全く區別のないものである。むしろ、馬丁の方が、馬の使ひ方を知つてゐるから、偉いとも云ひ得るのである。

しかし、カーライルは、人間に、その衣裳をすて、赤裸になれ、原始に歸れと云ふのではない。彼は、その衣裳ばかりではなく、人間の肉體そのものを衣裳と見て、その中にひそんでゐる靈を尊ばねばならぬと云ふのである。その肉は、靈の顯現に外ならない。人間が、この靈の不可思議を思ふと、たゞ驚異するばかりである。人間は、驚異するより外に、何物もない。

クエーカー教徒、ジヨオジ・フォックスが、宇宙の神秘に心をなやましてゐると、他の人々は酒でも飲んで、女たちと舞踏でもしるとすゝめられたにも拘らず、彼は革の着物を着て、大木の空洞の中で冥想してゐた。これが、人間のふさはしい態度である——と彼は云ふ。

宗教は、人間が世界の神聖なる觀念に着せた形式である。社會は、宗教なくしては存在し得ないのである。人は、同じことを信ずるに依つて、相融合する。若し、人と人との間に、信念の共通

と云ふものがなくなつたら、それは社會でない社會である。政治が、もし社會の皮膚であるならば、宗教はそのかくれたる神經組織である。

この世に、象徴ほど意味の深いものはないであらう。兵隊が軍旗の下に戦つて死ぬ。が、その軍旗は一個の布片に過ぎない。たゞそれが何物かの象徴であるから、兵士はその軍旗の下で死ぬのである。そしてその軍旗に威力があるのである。

しかし、軍旗の如きは、最も低級なる象徴に過ぎない。更らに高級なる象徴は、十字架である。最高なるものは、基督の宗教である。が、この宗教も、宗教改革以來、三世紀にわたつて、風雨に傷んで來た。そして、この神經組織が傷はれて來た。神經組織が傷はれて來たために、社會そのものも、氣息奄々たるありさまになつたのである。今は既に、共通の家と云ふ社會的の觀念は存在してゐない。各人は、人類と云ふ一の家族の一員であると思つてはゐない。みんな、われ勝ちに、自分の得やうとするものを、勝手我儘に得やうとして、自由競争をやつてゐる。一方に、遊食して贅澤してゐるものがあれば、一方には、働いて餓死するものがある。そして、かれらは自由獨立と云ふことを自らほこつてゐるのである。——カーライルは、かう云つて、十九世紀に、



著しく發達した、經濟的自由主義にたいして、強い抗議をしてゐる。

若し統治者が賢人であるならば、尊敬と服従こそ、唯一の自由であると云ふことを忘れてゐるのである。かうして、現在の社會は、いつかは解體しなければならないものであるが、新しい社會は決して古いものが全く滅びた後に生れるものではない。この古い社會の中に、やがて來るべき社會の準備が出來つゝあるのである。社會の新しい衣が織り出さるべき組織的の纖維は、既に存在してゐるのである。

この纖維は、第一に、人間と人間とを繋ぐ眼に見えぬ同情、同感の糸である。われらは、他人にたいして、全く冷淡無頓着ではあることはできない。彼を憎惡するか、嫉妬するか、美望するか、愛するか、憐むか、尊敬するかをす。然るに、前者は、たゞ後者の變態、若しくは逆に過ぎない、『愛するが故に憎む』のである。愛し得ざる不満が、憎惡嫉妬、美望となるのである。

この同情同感がある限り、人間の社會は、決して支離滅裂になる心配はない。

第二には、人間の心に、決して滅びない英雄崇拜の心である。現代の人々は、他人を服従することも、尊敬することもできなくなつてゐる。しかし、その念慮は決して死んでゐるのではない。

自然は、人間の中にある少しの神の顯現でも、尊敬すべきことを命じてゐる。ヴェルテールは、非常に神らしい人では決してない。が、當時の巴里人は、彼を偉人であるとした。賢人であるとして尊敬し、崇拜した。然り、英雄崇拜の心は、決して滅びてはゐないのである。いかに愚なるものでも、自分より賢き人に向つては、自ら頭を下げないではゐられないのである。

カーライルは、人生を、この同情、同感の連帶によつて融和して行くものであると云ひ、そしてそれを結ぶ一つの中心は、英雄を崇拜する心であると云ふのである。

諸君は、私が手をあげて、太陽を捕へたとしたら、それは奇跡だと云ふだらう。しかし、考へてみると、私が手をあげること、そのことが不思議なのではないか。不可思議は、たゞ距離の相違に過ぎない。時間もさうである。昔、アムフィオンは、七絃琴の音によつて、テーベの都を建てたと云はれてゐる。それが不思議であるとするならば、このワイヌニヒツオウの町が、幾百年、幾千年の中に、かく發達して來たことも、また不思議ではないか。

ジョンソン博士は、一生の中で、一度だけでも幽霊を見たいと思つて、コック・レインや、教會の墓場にも行つた。棺に手をふれてもみたが、どうしてもほんたうの幽霊を見ることができな



つた。が、よく考へてみると、人生の七十の生命を一つの存在として考へてみると、實は吾々自身が即ち一つの幽霊ではないか。吾々は、無から生れて無に歸る。我々の周囲を取り巻く永遠より見れば、吾々の生涯は、ほんの一瞬に過ぎない。アレキサンダア、ナポレオンは、今どこにゐるか。われらの肉體——それは、吾々の靈をとりめぐる、一つの影に過ぎない。宇宙に充ちてゐるものは、たゞ、一つの大きい靈ばかりである。多くの人類は、一瞬間、この地球を横ぎつて、神秘から神秘には入るのみである。否、人類のみではない。森羅萬象、すべてさうである。一疋の鳴く虫も、悉く神秘の力の顯現でないものはない。

ゲーテの、ファストの『地靈』の中の言葉を、吾々は思ひ出すのである。

かくて、われ、時の織機を、とどろと踏み、

織りまつる、衣よりぞ、汝は神を見る。

森羅萬象は、神の顯現である。大靈は、宇宙に遍滿する。——カーライルの宇宙觀は、汎神論

的神秘主義である。

カーライルは、一面に於て、民主主義であり、また自由主義であつた。が、また彼の性格は、憂鬱なる思索家で、しかも、敬虔なる基督教の家に生れた。その影響は、彼をして、プラトニククな精神主義者とし、また貴族主義者とした。故に、彼の人生觀は、基督教的であり、且つ英雄主義的であつた。

彼は、自然科学の研究はしたか、經濟學の知識はなかつた。むしろ、その研究をきらつた。彼は經濟學を『殺風景な科學』だと罵つた。彼の性格が躍如としてゐる。従つて、彼の社會思想は直觀であり、十九世紀の産業革命も、彼の眼には、その『殺風景』な社會状態ばかりしか映らなかつた。そこで、労働者にたいする同情も、理解も、藝術家的であつて、遂に彼等を信ずることができなかつた。労働者の粗野と亂雑は、彼の藝術家的の、プラトニククな貴族主義、精神主義が、『民衆』又は『衆愚』をもつて呼ばれる彼等の氣分と合はなかつたのであつた。

この問題は、現代にも尙ほ殘されてゐる大きい智識階級と、労働階級の溝である。が、こゝでは



それを論ずるのではないから、これでこの稿の筆を擱くことにする。

# 第七講 釋迦

江原小彌太

- (一) 法華經
- (二) 觀音と四諦十二因緣
- (三) 淨土三部經
- (四) 釋迦の人生論
- (五) 現實回遡と人生悲苦



(一) 法華經

**序品** 釋迦が耆闍崛山に大衆を集めて大乘の法華經を説いた。彼れの眉間は白毫の光を放ちいろ／＼の瑞相があらはれた。

彌勒『これは不思議だ、どうしたことだ』

大衆『誰れに問ふたらわかる』

彌勒『どうしたことだ』

文殊『おれが昔この瑞相を見た時は諸佛が大法を説いた。いまに釋迦牟尼佛がきつと大法を説くのだらう』

**方便品** 釋迦『舍利弗よ、諸佛の智慧は甚だ深くて難解だ。おれは成佛してから方便をもつて衆生を導いたが、ほんたうの法は大變むづかしいから説くのはやめよう』

舍利弗『そんなこと言はずに、どうか説いてくださいよ』

釋迦『ぢや、説かうか、この妙法は滅多に聞かれないものだが、おれは衆生の悩みを知つてゐ



るから説かう。それも衆生をみんな佛にしたいためだ』

**警誡品** 舍利弗『今この法音を聞いて歡びを感じます。私は同じ法性にありながら小乗の濟度を得てゐたのが不平でした。しかしそれも私共の罪です。いま未曾有の法を聞かれるので疑が晴れて心は安穩になりました』

釋迦『舍利弗よ、お前は未來世に千萬億の佛を供養して佛と成ることが出来る』

舍利弗『世尊、私は無上正覺を受けることを信じます。その因縁を説いてください』

釋迦『或大長者の家の周圍から火が起つた。長者は外に逃出したが、子供は知らずに家の中で遊んでゐた。長者が呼ぶけれども子供は遊びに夢中だ。長者は、外には面白いおもちゃがあるぞと言つた。子供は外に逃出して命がたすかつた。長者は珍寶の大車を子供にくれた。舍利弗よ、これは虚妄だらうか』

舍利弗『火難を逃げただけでも長者の言は虚妄ぢやありません。なぜ珍寶の大車なんかくれたんですか』

釋迦『如來もそのとほりだ。衆生は三毒の火宅に住して大苦に遭ふのを知らずにゐる。おれは

それを救ふために三乗の方便をもつて誘ふたが、後に大乘を與へるのだ』

**信解品** 迦葉『私共は僧の首座にゐて長年になりますが、涅槃を得たのもう充分だと思つてゐました。しかるに聲聞にいま無上正覺の記を授けなざるのを聞いて非常の歡びを感じます。

思ひもかけぬのに無量の珍寶車を得たやうなものです』

**藥草諷品** 釋迦『お前の言ふとほりだ、迦葉よ、密雲は天を覆ふて雨降り、草木は一樣に潤

ふけれど、草木の生長には差別がある。おれの言葉もそのごとく、大音は衆生の一切を覆ふて、みんな歡喜するけれど、それぐの力によつて善利を得る』

**授記品** 釋迦『迦葉よ、お前は未來世に三百萬億の諸佛を供養して佛になる』

大衆『私共をも憐みて佛の記を授けたまへ。私共は常に小乗を思つて、佛の無上正覺を知りませんでした。記を授けたまへ』

釋迦『須菩提は未來世に三百萬億の佛を供養して佛となる。大迦旃延は未來世に八千億の佛を供養して佛と成る。大目犍連は八千の諸佛を供養して成佛することが出来る』

**化城品** 釋迦『大昔に大通智勝如來といふ佛がゐた。この佛が出家しない前に十六人の子が



あつた。彼等は父が無上正覺を得たので父のところへ來た。そして、どうか法を説いて衆生に安穩利益を與へてくださいと言つた。大通智勝如來が無上正覺を得た時に十方世界が震動して光明赫灼となつた。梵天王は、どうしたことだと尋ね、大通智勝如來が菩提樹下に多衆から禮拜されてゐるのを見て、世尊よ、どうか法を説いてくださいと言つた。大通智勝如來は四諦と十二因縁を説いた。大衆の中で解脱する者が多かつた。第二、第三、第四の説法の時もさうであつた。十六王子も無上正覺を得んことを求めた。如來は大乗の法華經を説いた。菩薩となつた十六王子も法華經を説いた。この十六王子の十六番目の王子が即ち釋迦たるおれだ。おれは娑婆國土で無上正覺を得て、お前達のためにこの經を説く。お前達に最初からこの一佛乘の經を説いても駄目だから方便をもつて今まで二涅槃を説いてゐたのだ。二涅槃は眞實でなくて、この一佛乘がほんたうだ』

#### 五百弟子受記品

釋迦『富樓那は説法人の中の第一位である。彼れは未來世に無上正覺を得て佛となる。憍陳は六萬二千億の佛を供養して佛となる。その他の五百阿羅漢もそのとほりだ』

#### 授學無學人記品

釋迦『阿難、お前は未來世は佛となつて諸菩薩を教化する。羅睺羅、お前

も未來世には佛となる。阿難よ、この學無學の二千人も未來世には佛となる』

釋迦『藥王よ、佛前に於て法華經の一偈一句を聞いて一念隨喜する者には記を與へる、いまに無上正覺を得て佛となる。藥王よ、もし法華經の一偈一句を受持し、讀誦し、解説し、書寫し、敬視し、諸物を供養する者は未來世は佛となる。おれが滅後に法華經の一句でも説く者は如來の使である。もし法華經を悪くいふ者は罪が甚だ深い。經典の中でこの法華經が最も難修難解なので、方便の門を開いて眞實の相を示したのだ。一切の菩薩が無上正覺するのはみんなこの經である』

#### 見寶塔品

地中から七寶の塔が涌き出て、中から大音聲で『善い哉、釋迦牟尼世尊、よく法

華經を大衆のために説きたまふ、その説くことは眞實だ』

大樂說菩薩『世尊、どうしたのです、この寶塔、その聲は？』

釋迦『その中には多寶佛がゐる。法華經を説く時にはそれを聞くために現れるのだ』

大樂說『世尊、その佛身を見たいものです』

釋迦『多寶佛が身を現す時には十方世界に説法してゐるおれの分身が集るのだ』



大樂説「どうか世尊の分身諸佛に供養をさせてください」

十方世界から諸佛が現れた。釋迦は七寶の塔を開いた。

多寶如來「善い哉、釋迦牟尼如來、法華經を説きたまふ、私はそれを聞きに來た」

釋迦「諸經の中でこの法華經が第一だ、おれの滅後、誰れがこの經を大切にするか、その者は無上の佛道を得る」

**提婆達多品** 釋迦「或大國の王が大乘を説く者を求めた。仙人が私はそれを持つてゐる、法

華經がそれだと言つた。國王はその法を得て成佛した。それはおれのことだ。仙人は提婆達多だ。後に彼れは佛になる」

多寶佛の從者智積「多寶佛よ、もう本土にお歸りになつては？」

釋迦「少しお待ちなさい、文殊菩薩とお話しになつてからお歸りなさい」

智積「文殊さん、あなたが龍宮で教化した衆生はどのくらゐですか」

文殊「とても澤山で口ぢや言はれませんよ、私はたゞ法華經を説いてゐました。龍王の娘は八歳で直に菩提を得ました」

智積「へえ、それは信じられませんね」

龍王の娘あらはれて「私は大乘の教を開いて苦の衆生を濟度しませう」

舍利弗「それは信じられませんね、女は汚れたもので、法器ぢやないもの」

龍女は寶珠を釋迦に奉つて「世尊はお受けになりました。早かつたでせうか」

舍利弗「とても早いですが」

龍女「あなたも神力をもつて私の成佛を御覽なさいな、これよりも早いでせうよ」と、彼女は忽ち男と變じ、三十二相の菩薩となつて妙法を説く。

**勸持品** 藥王、大樂説の二菩薩「世尊よ、御心配なさるな、佛滅後、私共は身命を惜しまず、

このお經をひろめます」

釋迦「憍曇彌よ、なぜお前は憂ひ顔をしてゐるのか、お前も未來は佛となるさ。耶輸陀羅よ、お前も來世は佛となる」

彼女等「私共も記を聞いて安心しました」

**安樂行品** 文殊「世尊よ、このお經を後の惡世にどういふ風に説きませうか」



釋迦「四法に安住しろ。この法華經は諸説の中では最も甚深である」

**從池涌品** 他方から來た菩薩等「世尊よ、私共は佛滅後このお經をひろめませう」

釋迦「よしてくれ、この娑婆世界にはこの經を説く菩薩が澤山あるよ」

娑婆世界が震動し、無量千萬億の菩薩が涌き出て、釋迦と多寶如來とを禮拜した。

四藥師「世尊はお變りもなくお達者ですか、お疲れではありませんか」

釋迦「達者だよ、衆生はおれを見、おれの所説を聞いてみんな信受して佛慧を得た」

大衆「世尊よ、この多勢の菩薩達はどこから來たのですか」

彌勒「私は彌勒ですが、釋迦牟尼佛に授記されて佛になるのです」

釋迦「よし、彌勒、昔からまだ聞かない法を聞くことが出来るぞ。地から涌いたこの菩薩

達はみんなおれが教化したものだ」

大衆「世尊よ、あなたは無上正覺を得てからまだ四十餘年にしかならんのに、どうしてこんな

大勢を教化なさつたのですか、譯を聞かしてください」

**如來壽量品** 釋迦「お前達、いまにおれの誠の言葉を信解するだらう」

彌勒「世尊よ、どうか説いてください」

釋迦「おれは實に成佛してから無量無邊百千萬億那由陀劫年もたつてゐるのだ。たゞ衆生を救ふ方便のために此土に現れたので、また滅度するのだよ」

**分別功德品** 釋迦「彌勒よ、おれの壽命の長遠を聞いて一念信解を生ずればその功德は無量だ。佛滅後にこの經を大切にすれば一切の種智を得る」

**隨喜功德品** 彌勒「世尊よ、この法華經を聞いて隨喜する者はどんな福を得ますか」

釋迦「無病息災、富貴長命、六神通、三明、八解脱を得る」

**法師功德品** 釋迦「この法華經を大切にする者は六根清淨となつて世界は美化し、無量無邊の義を通達する」

**常不輕菩薩品** 釋迦「得大勢菩薩よ、大昔に常不輕といふ者があつた。彼れは大衆を禮拜して、おれはお前達を輕んじない、みんな佛となるからと言ふ。大衆は彼れを常不輕と名づけた。

彼れは臨終の時に威音王佛の法華經の偈を聞いて六根清淨となつて壽命を増すこと二百萬億那由陀歳、ひろく衆生のため法華經を説く。彼れを不輕の名をもつて輕蔑した大衆もみんな信伏隨從



し、彼れは功德によつて佛となつた。それこそは即ちおれであつて、おれを不輕と呼んだ大衆はお前達だ。この法華經はもろくの菩薩に無上正覺を得させるものと知れ』

**如來人力品** 釋迦、大神通力を現じて廣長舌を出し、一切の毛孔から色光を放ち、せき拂ひをして指をはじく。この音聲あまねく十方の諸佛世界にとゞいて大地が震動して大衆があらはれた。

虚空の聲『釋尊、大乘經の法華經を説く、汝等よ、隨喜し、釋尊を禮拜供養しろ』

大衆『南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛』

釋迦『如來の一切の法、一切の神力、一切の秘藏はみんなこの經に顯説してある。おれの滅後はこの經を大切にしろ、この經のあるところは即ち道場であるから塔を立てろ』

**囑累品** 釋迦『おれは大昔にこの無上正覺の法を修習した。今お前達にたのむ、一心にこの法を衆生に知らせろ』

大衆『承知しました、御心配なさるな』

釋迦『皆様、お引きとりなさい、多寶佛の塔もお歸りなさい』

**藥王菩薩本事品** 宿王華菩薩、『世尊よ、藥王菩薩はどんな難行苦行なされたのです』

釋迦『大昔に日月淨明德如來が法華經を説いた。一切衆生喜見菩薩、おれは日月淨明德如來と法華經を供養しようと、香油香木を飲んで身に香油を塗つて火をつけて自分の體を燃した。日月淨明德佛はおれの佛法をお前にたのんだと言つて涅槃に入つた。彼れは日月淨明德佛の身を焼いて骨を集めて八萬四千の塔を立て自分の臂を斬つて供養した。この一切衆生喜見菩薩こそ藥王菩薩だ。この經を聞いて大切にすれば功德無量で、女がこの藥王菩薩本事品を聞いて受ければ阿彌陀佛の淨土に往生する。宿王華よ、この藥王菩薩本事品をお前にたのむ。この經は良藥で人は不老不死となる。』

**妙音菩薩品** 耆闍崛山の法座に近く八萬四千の金銀の蓮華花あらはる。

文殊『世尊よ、何んの瑞相でせう』

釋迦『妙音菩薩が淨華宿王知佛の國からおれを供養し、法華經を聞かうとしてゐるのだ』

妙音菩薩が八萬四千の菩薩を連れて現れた。

妙音『世尊よ、お逢者ですか、衆生は濟度しやすいですか』



華徳「世尊よ、この妙音菩薩はどうして神通力があるのですか」

釋迦「妙音菩薩は十萬種の伎樂で雲雷音佛を供養したからだ。この菩薩はいろいろの身に變じて衆生のために經を説いた」

妙音菩薩は釋迦を供養して本土に歸つた。この妙音菩薩來往品を説いた時に華徳菩薩が法華三昧に入つた。

**觀音菩薩普門品** 無盡意菩薩「世尊よ、觀世音菩薩はどうして觀世音といふのです」

釋迦「衆生が苦惱のある時、この觀世音菩薩を一心に念すれば觀世音菩薩はその音聲を觀じてみんなを助けたまふ」

無盡藏「觀世音菩薩はこの世にどんな方便で法を説くのです」

釋迦「觀世音菩薩はいろいろの形に身を變じて衆生を濟度する」

持地菩薩「世尊よ、觀世音菩薩品の自在業と普門示現の神通力を聞く者は功德がある」

この普門品を説く時、八萬四千の衆生が無上正覺の心を發した。

**陀羅尼品** 藥王「世尊よ、法華經を大切にすると、どんな福がありますか」

釋迦「功德は甚だ多い」

藥王「私は説法者に陀羅尼の呪文を唱へて守護させよう」と呪文を唱へる。

この陀羅尼品を説く時に六萬八千人が無生の法を證悟した。

**妙莊嚴王本品** 釋迦「大昔に雲雷音宿王華智佛の國に妙莊嚴王あり、その二子が神變を現す

のを見た父の妙莊嚴王、お前達の師は誰れだと問ふ。二子は雲雷音佛が師です、いま法華經をあ

なたのために説いてゐますと答ふ。父の妙莊嚴王は雲雷音佛を禮拜し、無上正覺の記を受く。こ

の妙莊嚴王は今の華徳菩薩で、二子は藥王藥上の二菩薩である」

この品を説く時、八萬四千人が法眼淨を得た。

**普賢菩薩勸發品** 普賢「世尊よ、どうしたら法華經を得られませう」

釋迦「四法を成就すればおれの滅後にこの經を得る」

普賢「世尊よ、濁惡の後の世にこのお經を受持する者には、私は白象に乗つて現れて守護いたします」

釋迦「よし／＼、普賢よ、この經を受持する者を見たら、佛を迎へるやうに迎へろ」



この普賢勸發品を説いた時、多くの菩薩が普賢の道を具した。釋迦がこの法華經を説きおはるや、一切の大衆は歡喜して佛語を受持し、禮拜をなして去つた。

### (二) 念彼觀音と四諦十二因緣

小説や詩の梗概や筋やは實につまらないものだ。その梗概や筋がつまらないからと言つて、故に小説や詩までも價値のないものだと言ふことは間違つてゐる。しかし或事を説明した文章の要點をつまんだものが頗るつまらなくて、何を言つてゐるのか、少しもその或事が説明されてないとなれば、或事を説明したといふ本文の文章そのものを價値のないものとせねばならぬ。

菩薩を佛陀となさしめる釋迦の經文の第一といはれる法華經を一種の詩とするなら、右に私が掲げたその梗概が如何につまらぬものだとしても、法華經そのものを價値がないと言ふことが出來ない。しかし法華經が何か事理を説明したものとすれば、右に私が掲げたその要點が實にくだらぬものなら、法華經そのものが無價値であると言はねばならぬ。

私は古い歌舞伎芝居が大好きである。それはその内容たる思想とか筋とかに引きつけられるの

ではなくて、その形式美に陶醉されるのだ。また私は囃子を入れた長唄の大合奏も好きだが、あれも長唄の文句なんかさつぱりわかりはしない、たゞぼんやり聞いてゐるのだ。西洋音樂のオーケストラに至つては文字や言葉には全然よらずに、たゞ樂器の音律だけだが、そこに私共は面白味を感じる。要するに以上の藝術から私は思想や哲學を要求するのではなくて、情感の満足を得るのだ。

もし法華經を一種の詩とし、音樂とし、藝術品として見るなら、そこに或情感の満足を得ることが出来る。法華經第八卷の觀世音菩薩普門品「念彼觀音力、不能捐一毛、或值怨賊繞、各執刀加害、念彼觀音力、咸即起慈心、咸遭王難苦、臨刑欲壽終、念彼觀音力、刀尋段段壞、或囚禁枷鎖、手足被徂械」を全力をこめて大唱すれば全身に情熱わき、それこそ白刃のもとに飛込んでも何んの恐れるところもなくならう。これは文學的音樂的の感激である。

しかし私はいま人生論を知らうとしてゐるのだ。それに如何なる人生觀が盛られてあるか、智的の判斷を要求してゐるのだ。その目をもつて、この法華經の要點を書いたものを見るに、その愚劣なるに呆然たらざるを得ない。



- 一、いままで説いた經は方便の小乗であるが、これから説く法華經は大乗で眞實の經。
- 二、汝は未來世には佛となるといふ授記、即ち釋迦の豫言。
- 三、法華經を信受し、讀誦し、書寫するものは功德がある。
- 四、觀音力を念すれば火にも焼けず、刀刃にも斬られない。
- 五、大通智如來が四諦と十二因縁を説いたこと。

この一と二とは問題ではないが、第三は甚だ妙に感じられる。法華經を信受し、讀誦し、書寫するものはその功德によつて未來世は佛となるといふことが殆ど全卷を通じて繰返されて、これを徐けば法華經といふものが無くなつてしまふほどだ。そこで私共は他に法華經といふものがあつて、それを大切にすればと言ふてゐるのかと思ふが、實はさうではないので、そんなこと言つてゐるそれが法華經そのものだから誠に妙だ。富士山へ行く道は斯うで、富士山に登ればどうだと言ひながら平坦な道を歩いてゐる、その富士山をそれぢやいつ登るのかと問へば、いま歩いてゐる道が富士山だと言つたら、『なんだ、人を馬鹿にしてゐる』と思ふだらうが、それと同じやうな譯だ。

○  
砂の中から金剛石でも拾ひ出すやうに法華經の中から問題となるものを撰び出すと、第四の觀音力と第五の四諦十二因縁である。法華經第八卷の觀世音菩薩普門品は「念彼觀音力、刀刃段段壞」にその要は盡きてゐる。

吾れ／＼がこの人生にあつてこの觀音力の信念をもつて進めば、ナポレオンが言つたとかいふ「不可能」の語はなくなつてしまふと言つてよい。これは人間の力を信仰的に見たことであつて、それを心理的に見れば人間が全力をこめて進むことに歸するのだ。

多くの人は常には自分の全力を使はず、頗る吝嗇である。女が、「私は力がない」と言つて重いを持たない、しかし火事があると獨で箆笥を持出す。常には五貫目の物を辛じて擧げる者が催眠状態に入つて暗示をかけられると、十貫目の物でも軽々と差上げる。これは其時に外部から力が與へられるのではなく、元來自分が持つてゐる力を全精神をこめて出すからでしかない。

省線電車を下りようとして戸を開かうとするけれど、がち／＼いふだけで容易に開かない、車掌が開けると、がらりと事もなく開く、かういふ場合がとき／＼ある。電車の戸には何んの種も



仕掛もないので、たゞ開けば開くのだ。力さへ入れれば開くなら、それぢやお客は力がなくて、車掌は力があるのかといふに決してさうぢやない。お客は手先だけで、全身に力をこめないのに、車掌は全身に力をこめるからである。この力を全身にこめると全身にこめないとの相違はどこから來てゐるか、それはお客の方はこの戸が實際に開くのか、それとも故障があつて開かぬのか、半信半疑だからで、車掌はこの戸は必ず開くのだといふことを知つてゐる、その信仰があるので全身に力が入れるわけだ。

それが信仰の力の湧く心理だ。火事に焼けた、再興するも再興せぬもその人の心の如何にある、もう駄目だと力を落せば再興しないが、念彼觀音力、刀刃段段壞で進めば全身に先天的にある力が發輝し充溢して勇ましく復興の途に立つのである。

しかしこの觀音を念ずることは他方信仰であつて、觀音を信じないものにはその觀音力が湧かないのであるから、信仰時代を去つた吾れには問題にならぬ。

○  
四諦 吾等の問題となるのは、第五の四諦十二因縁であるかも知れぬ。四諦とは苦集滅道の四

つの眞理のことである。苦諦、この世は苦であること。集諦、この苦は原因があつて集つたのだ、過去になした「業」の結果である、その業は「惑」から起る、即ちこの世の苦は過去の惑と業とが集つたものだとのこと。滅諦、集を滅して苦を解脱した境界、既に涅槃のこと、道諦、苦を解脱し、

涅槃に入る原因、即ち惑を除き、業を滅する修行のこと。

前世に眞理を知らずに惑ふてゐる者が日に悪業をかさねてゐたから此世の苦を嘗めるのだ。故に修行して惑を去つて業を滅すれば後の世に解脱する。これは聲聞の悟と言つて、その悟を得て阿羅漢といふものになる修行は早いのが三度も産れ變らなくてはならぬ。

十二因縁 第一無明、煩惱のために眞性を覆ふて苦集滅道の理をわきまへぬこと、第二行、

無明のために悪業をなすこと、この二つが過去の世になしたもので、現世の因となるものだ。第三識、過去の無明と行との二つの原因のために現世に産れて出ると母胎に宿ること。第四名色、母胎に宿つて五七日たつたこと。第五六處、母胎に宿つて四十九日たつたこと。第六觸、産れ出て二三歳になつたこと。第七愛、五六歳から十二三歳までの間で、苦樂の感がさかんに發達すること。この五つが前世の無明と行との結果である。第八愛、十四五歳から十八九歳までの間で、



愛着心がさかんに起ること。第九取、二十歳以後で、愛着心がますます深くなつて四方に馳せ求めること。第十有、貪愛の煩惱によつて四方に馳せ求めること。この三つが未來世の因となる。第十一生、現世に於ける前記の因によつて未來は六道に生れること。老死の因となる。第十二老死、未來世に於ける老死のこと。斯くて人間は因果によつて六道を輪廻して永久に生死するといふのだ。故に最原因の無明を斷すれば最後の結果たる老死が無くなるといふ、これが縁覺の悟で、無明を斷する修行は四度も産れ變つて悟に入るのが最も早い人だ。

この聲聞縁覺の二つの悟は自己のみの悟で小乗でしかないので、法華經によると、それはまだ方便であつて、眞の佛陀になるには法華經であるといふのだ。しかし法華經は菩薩にして初めて佛果を得るので、この菩薩は聲聞縁覺の二つからいま一步、上の位置にあるものだ。小乗の聲聞縁覺はまだ自利のみの境涯であるが、菩薩は自利利他の具足した境涯である。即ち釋迦は方便によつて人間を聲聞から縁覺、縁覺から菩薩へと引上げて來て、最後に法華經の大乘を授けるのだ。

○  
とにかく釋迦は人間の最上位を佛陀となした。佛陀とは十界の最上位で、迷を離れて自ら諸法

の眞理を悟り、天地の眞實相を知りつくして自在であり、十八不共法を得、四無所畏に住し、衆生を導いて悟の道に入らしめ、自覺覺他の二行を圓滿に成就した極位で、大乘究竟の境涯である。十八不共法といふのは、身に失なし、口に失なし、念に失なし、一切の身業は智慧にしたがつて行ず、といふやうなことを十八ならべたのだ。四無所畏といふのは、佛陀は内に一切智があるから說法する時に畏怖するところがないことを四種にわけたのだ。

菩薩がこの佛陀の境地に入るにはたゞ法華經を受持すればよいのだが、菩薩になるまでに聲聞縁覺などの修行を生き變り死に變り、遲鈍の者は何兆億萬年もたゞねばならぬ。これがなか／＼凡人には出來ぬことだが、凡人たる衆生は法華經を信受し、觀音力を念すればこの土に於て觀世音がおたすけくだされて無病息災、富貴長命、安寧逸樂を得られるとしてある。その他、法華經を受持することによつて佛陀となることを豫言された諸菩薩がみんな衆生のために幸福をはかるといふのだ。

### (三) 淨土三部經



佛説無量壽經 久遠無量の昔、この世に錠光如來が出て、次々に五十三佛あり、次に世自在

王如來が出てゐた時、法藏といふ國王があつた。法藏は世自在王如來を禮拜し、頌徳を誦して言つた。

法藏『如來よ、どうか諸世淨土の修行と莊嚴とを説いてください。私はその長所をとつて一層すぐれた淨土を造らうと思ひます。速に私を佛となし、一切衆生の生死苦難の根本を脱せしめられるやうにしてください』

如來『それは能くお前が知つてゐるぢやないか、今更おれになぜ尋ねる』

法藏『私のやうな未熟のものには到底わかるものぢやございません、お願いします』

如來『大海の水を一人で枴をもつて汲んでも劫數を経れば終に汲み干して底にある寶を得るところが出来ぬ。誰れでも一生懸命に道を求めれば、どんな願でも成就する』

世自在王如來は二百十億の諸佛の國の有様を一々法藏の眼前に示して合點させた。法藏はこゝに於て淨土建立の大願を起した。そこで彼れは五劫年の永い間の冥想によつてその考へが定つた。

法藏『如來よ、私は淨土建立の清淨の行を選びとりました』

如來『そんなら説け、今は丁度よい時だ、集つた大衆が聞いたなら悦ぶだらう』

法藏『もし私が佛になることが出来ましたなら、私の淨土に地獄、餓鬼、畜生の三惡道がないやうにします、それが出来なければ私は佛になりませぬ。私の淨土の人達に執着を去らしめ、煩惱を断たしめます。必ず涅槃の佛果に到達させます。限なき壽命をもつて盡未來際いつまでも衆生を濟度します。淨土の人達に無量の壽命を授けます。十方世界の無数の諸佛が悉く褒めたゞへて私を南無阿彌陀佛と稱へるやうでなければ私は佛になりません。一切の衆生が私の淨土に生れたいと思つて一聲でも念佛するほどの者は必ず生れさせてやります。一切の衆生が菩提心を起して功徳を積み、それを廻向して私の淨土に生れたいと願ふなら私は出迎へにまゐります。一切の衆生が私の名號を聞いて私の淨土を慕つて自力の念佛を稱へて廻向するなら淨土に生れさせます。一切の女人が私の名號を聞いて歡喜して、その罪業深重の女身を厭ひ逃れたいなら必ず成佛させて再び女身に生れないやうにします。私の淨土の人達が受けるところの快樂は極りありません。……』と四十八の大願を立て『それが出来ねば私は佛になりません』と言つて、それを要約



した三誓の頌をとへた。

空中の聲「汝、必ず本願を成就して無上の佛果を得ること間違ひなし」

法藏はかくて國を捨て王位を捨て巨萬の財寶と美女とを斷ち、六波羅蜜の行を修め、功德を積んだ。以上は釋迦の説法である。

阿難「世尊よ、法藏菩薩はもう佛になつて涅槃に入つたのですか、まだ修行中ですか」

釋迦「法藏菩薩はもう佛になつて、今は現にこの娑婆から西方十萬億土にゐる。その世界を安樂國といふ」と、その極樂世界をあらゆる美辭麗句で描寫した。それから法藏菩薩が佛となつて無量壽佛たる姿の光明赫灼たることを述べ、極樂淨土に往生した衆生の如何に幸福であるかを極説した。

釋迦「極樂に生れたい者は正定聚の位に住するものでなければならぬ。せめて一念でも無量壽佛にすがる心を起して極樂國に生れたいと願へば淨土に往生する。但し五逆の罪を犯した者と正法をそしる者とは駄目だ。

釋迦「家を捨て慾を捨て沙門となり、菩提心を起し、一念一向に無量壽佛を念じ、もろくの

善根功德を修する者、また一念一向に無量壽佛を念じ、菩提心を起して多少の善根を積み、齋戒を持ち、堂塔を立て、佛像を造り、僧侶に供養し、佛前にとほりを懸け、燈明を上げ、花を供へ、香をたく者、みんな極樂往生ができる。

釋迦「おれはいま衆生のためにこの無量壽經を説いて無量壽佛とその淨土のあらゆる莊嚴を見せた。お前達よ、無量壽佛の本願を信じ、眞實の極樂往生を求めるがよろしい」

### 觀無量壽經

釋迦が法華經を説いてゐた時に摩伽陀國王の宮城に阿闍世といふ王子があつて提婆達多にそゝのかされ、父王を座敷牢に押込めた。王妃の韋提希夫人がひそかに父王に食物を與へた。阿闍世はそれを知つて母の韋提希夫人をも一室に押込めた。彼女は釋迦のたすけを願つた。釋迦が忽然とあらはれた。

夫人「私は極樂世界の阿彌陀佛の御許へ往生したいと思ひます」

釋迦「汝、思ひを西方の極樂國にやつて阿彌陀佛を明かに觀ぜよ、おれはいまお前のために極樂淨土に往生する方法を説く」

彼れは十六種の觀法を説いた。それは極樂淨土を描寫して、念ずる者に幻覺的に淨土を觀ぜし



める法である。韋提希夫人はそれによつて卽座に極樂世界の廣長の相を見、阿彌陀佛を見て往生決定の信心を得た。

### 阿彌陀經

釋迦が西方極樂淨土と阿彌陀佛とを弟子達に讃嘆して聞かしたのである。それは實に美辭麗句をならべたものだ。極樂に往生する一節「舍利弗よ、もし善男子善女、あつて、彌陀佛を説くと聞いて、その名號を心に信じて、もしくは一日、もしくは二日、もしくは三日、もしくは四日、もしくは五日、もしくは六日、もしくは七日、一心に稱名念佛して心を亂さずば、その人は命の終るに臨みて、阿彌陀佛もろくの聲聞菩薩と共にその前に現れ、この人の命おはる時も心は顛倒せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生すべし」とある。

○

法華經は佛陀になるべき大乘の教であるが、この淨土三部經は全然そんなことは問題にせず、凡夫凡人がそのまま、安樂國に來世は往生することが出来る教である。

法華經にも凡人凡夫のために「念彼觀音力」の教があるが、これは現世に於て、もし大水にただよはされようとした時にその名號を念すれば淺いところへ行かれるといふやうなことを言つた

ので、淨土の教はその身そのまま、直に來世は極樂世界へ行かれるのである。

法華經第七卷、藥王菩薩本事品に「もし如來の滅後、五百歳の中に女人ありてこの經典を聞きて説のごとく修行すれば、こゝに於て命おはつて安樂世界の阿彌陀佛の住處に行きて蓮華の寶座の上に生ぜん」とあるが、淨土三部經の一般的の説き方とは違つてゐる。

法華經は佛陀となるべき大乘教で、入るに難く、自力の門であつて、淨土三部經は凡人淨土の易行の他力門である。この兩經文は要するに一つの藝術品である。賴山陽の耶馬溪の詩を読むのは九州の耶馬溪が如何に優勝の地であるかを思はせるが、それは耶馬溪の詩そのものが面白いので、九州の耶馬溪がそのとほりではないのだ。九州の耶馬溪を知るには案内地圖や寫眞で見ねばならぬ。また其處へ行つて探勝するには地理書を開いた方が事實を知る。それだからと言つて賴山陽の耶馬溪の詩の價值が落ちるわけではない。賴山陽の詩を好きの者は耶馬溪の詩を高聲に朗吟すれば實に愉快である。九州の耶馬溪を知りたいものは案内地圖や寫眞を見なければならぬ。法華經や阿彌陀經はそれを讀むことによつて、それを信ずることによつて、歡喜と安心との情感が湧くだらうが、少しも人生行路を事實によつて説明されてない。四諦十二因縁は聊かそれを説



明してあるけれども、それは釋迦の主眼としない小乘門である。また四諦十二因縁は論理に於て誤りはないけれど、人生を延長して過去現在未來の三世及び數世多生に渡らせたのは、現世のみを人生と見る吾れには失笑せしめるほかはない。

#### (四) 釋迦の人生論

釋迦の大乗佛説の最上理想は人間をして佛陀となさしめるにある。それはこの人生を苦と見るが故に安樂の境涯を欲し、この人生を不自由と見るが故に自在の境涯を欲し、この人生の生老病死と有爲轉變、無常迅速を歎くが故に永遠の生命と常住の世界とを欲するのだ。彼れが觀音力を説いたのは、人間の力弱きと災厄の多いとを悲しむが故に、それらの弱き人間のために設けたのである。彼れが淨土と阿彌陀佛とを創造したのは人間が自力をもつては容易に理想に到達することが出來ず、その上に不斷もろくの苦惱と不安とに悩まされ、殊に死後を心配するところから一瞬にして脱却せしめようとする方便のためだ。

要するに彼れはこの人生を苦の世界と觀じて他に安樂の世界を要求した結果、修行し、悟道を

得て、是等の佛説を説くに至つたのだ。

○

彼れが如何にこの人生を觀じたか、佛説無量壽經の中にそれを詳細に説いてある。「然るに世間の風俗を見るに、人情うすくして菩提をねがはず、五慾のために争ひをしてゐる。この劇惡極苦の世を厭ひもせず、たゞ生きんがためにその日の仕事に追はれてゐる。貴賤貧富、老若男女ことごとく財産のために心を奪はれてゐる。過去のことを思ひ、未來のことを案じて心の安らかな時はなく。

『田を持つてゐれば田のために心配し、家があれば家のために心配し、家畜、奴婢、金錢、衣食、器物、一として心配の種とならぬものはない。水難火難、さては盜賊、怨敵、債主などのために家や財産をなくし、心は憂ひ、悩みは離れない。もし命をとられれば、財寶も妻も子も此世にのこして自分一人で此世を去らねばならぬ。

『また貧賤の者は田がなければ田が欲しいと思ひ、家がなければ家が欲しいと思ひ、あれも欲しい、これも欲しい、たまく不足なく持つたと喜べば、それは夢の間のこと、すぐにまた無くな



る。心配苦勞は絶えない。

『無常は諸行に通ずるが、あとさき定りなき人間の生死をもつて無常の根本とする。これはみんな前世から受ける因果の約束事であつて壽命は常にたもつことが出来ない。人間はみな三毒の煩惱にほだされて心に思ふまじきことを思ひ、身になすまじきことを爲し、口に言ふまじきことを言ふ。愛欲や榮華はいつまでも變らず保つてゐることは出来ない。』

『この世は生老病死の苦界、五濁惡世、人間は五惡煩惱の器、六道に輪廻し、生死流轉するものである』

彼れはこの世を無常と見、人間に諸慾があると見、この無常の世に於てこの諸慾の人間がゐるので、人生は苦であると見た。即ちこの世が無常であると見たのは事實そのまゝを見たので、誰れでもこれを是認しない譯にはいかない。人間の諸慾があることもまた彼れの觀察どほりで、それは事實であるから誰れでもそれを是認せざるを得ない。故に人生なるものはこの無常の世に諸慾の人間が生きてゐるところに生ずるといふこともまた事實であつて、矢張り誰れでもが是認しなければならぬことである。これだけは釋迦だけの特殊の觀察ではなくて、普遍的の客觀的の觀察で事實そのまゝのものだ。

この人生を「苦」と見たところに釋迦としての觀じ方がある。しかし事實として嚴に存在してゐる人生であるから、それを苦と觀じようとも、樂と觀じようとも、何んと觀じようが、それは勝手であつて、そのために人生がどう變るものでもない。人生を苦と觀じた釋迦自身もたゞ人生を苦と觀じただけでは彼れの人生そのものがどう變るものでもない。

問題はその先きである。即ち彼れは人生は苦であると觀じた。そこで人間は苦を避け、樂を求め、性質を持つてゐる、否、人間が避けようとするものを苦と稱し、求めようとするものを樂と稱するのだ。故に彼れが人生を苦と觀ずるところには、そこにその人生を避けて、安樂な別の人生を求める心が生ずる。そこに釋迦特有の人生觀ができたわけだ。

○  
この世が無常であるのに對して、彼れは常住の國を創作した。その常住の國は佛土である。この常住の國は自然現象の變化もなく、人間の生老病死も災厄もない、永遠不滅、無動不變の世界である。



彼れはこの世ばかりが無常であるとは思つてゐない。そのほかに同じく無常迅速の地獄、餓鬼、畜生、修羅、天上の五界があつて、この世を人間界または娑婆と稱し、合せてこの六界を六道と稱し、人間はこの六道を生き變り死に變りぐるぐると輪廻してゐるといふのだ。六道を輪廻してゐたつて良かりさうなものだが、彼れはそれを「苦」と見てゐるから、この生死流轉の苦界から脱却しなければならぬ、否、心ある人間はみんな其處から脱却したがつてゐるといふのだ。そして常住の佛土に安樂往生したいといふことになる。

人間は生き變り死に變り六界をぐるぐる廻つてゐるのだから過去世と現世と未來世との三つがあるわけだ。故に現世の苦は過去世にその因を蒔いて置いたからで、現世でもその種を蒔いて置けば來世は苦の果があることになる。しかしこの六界の中の人間界は事實に於て存在してゐるのであるが、他の五界は釋迦の創作に屬するものだから、過去現在未來の三世因果の法も彼れの創作である。けれどもこの六道の流轉と三世因果の理法とは彼れが自然現象から暗示を得たもので、要するに現象界の觀相である。

人間がこの六道を輪廻して永劫にわたつて人間苦を嘗めてゐるのは心に無明がある、それが因

となつて輪廻の果があるので、智慧によつてその無明を照せば因縁が切れて流轉の人生を解脱し、常住の佛土に行くことが出来るといふのだ。

以上は無常の世界を脱して常住の世界に移ることであるが、人生の苦を生ずる他の原因である人間の諸慾はどういふことになるかといふに、彼れの理想が佛となつて自在の身となり、佛土に住して安樂歡喜に入るといふところから見ると、敢て人間の慾望を絶滅せねばならぬといふのではない。慾望を絶滅すれば慾求も起らず、感受性もなくなつてしまふ。それでは佛の自在も無意味、安樂淨土も無意味になつてしまふ。彼れが人間の諸慾に關しての始末は、この娑婆國土に住するの執着、娑婆國土に於けるもろくの物質と快樂とを食るところの執着、この娑婆世界への執着を脱離することにあるのだ。

こゝに於て彼れの「苦の人生」から脱して「樂の人生」に住するの法は二つになつてゐる。一つは智慧をみがき、修行を積んで、聲聞、緣覺、菩薩の境涯の階段を踏み、更に法華經の功德によつて佛陀となつて、永劫常住の佛土に永遠不滅の生命と自在の身とをもつて安寧平和に住すること、他の一つは六道に轉廻する凡人凡夫でも一念發起して法華經を信すれば佛陀達のおかげで此



世に於て安樂の人生を送り、阿彌陀佛にすがれば六道轉廻の縁は切れて來世は淨土に往生できることである。

この常住にして不變不動の佛陀と佛界とは自然現象の本體たる實在界を觀相しての釋迦の創作である。

無常界に對して常住界を考へ、凡人に對して佛陀を考へ、三世因果に對して絶縁の佛界を考へたことを、空間的に無常界と常住界とがあるわけではなく、時間的に三世因果の六道の轉廻があるわけではなくて、實は自然界の現象と實在との關係そのものを説いたので、現象則實在の理を悟つたのが佛であるといふ風に釋迦の人生觀を哲學的に解釋する宗門もあるが、それは哲學としての問題で、釋迦は最上の説法と自稱してゐる法華經と無量壽經とに於ては前述のごとくに説いてゐるのである。

(五)

現象則實在、娑婆則淨土、人間則佛陀といふ風な解釋の仕方ではなく、無常の世界のほかに空間

的に他に常住界があるものと見、時間的に三世因果の世界があるほかに因果を絶した佛土があるものと見、人間のほかに佛陀があるものと見ることが釋迦のほんたうの人生の觀じ方として、ここに論じて見たい。

世は無常であることは、自然界を眺め、人事百般を觀察すれば實に轉變して極まりなく、生者必滅、會者定離、哀別離苦を感じる。人間の心を見れば諸慾煩惱のために日々夜々安靜なることが出來ぬ。そこまでは良いが、彼れはこの人生を即ち「苦」と見なして、それを脱却することを考へたのが私の問題としたいのである。

無常の世界を脱して常住の世界に生きようとするだけでも、人間を解脱して佛陀とならうとするにしても、人間界にあつて佛の功德で安樂にくらさうとすることでも、また淨土に來世は生れさせてもらはうとするにしても、要するに現實の人間生活を苦と見て、それから逃れようとするものであるから、つまりそれは現實を回避することだ。

彼れは人生の有爲轉變を見て「苦」と觀じて「樂」と觀じない。しかし人生は苦もあれば樂もある、苦樂は對照されて初めて感覺されるものだから、苦があれば必ず樂があり、苦がなければ樂もな







れ自身には何んの不足を感じてゐるわけではなく、それに對する人間の心の中に生ずる心持にその嫌惡の念が基づいてゐるのだ。

この世の變轉は即ち人間の心に苦樂の變轉があることになる。故に樂の次には苦があり、苦の次には樂がある。それで苦が長くつゞくことを釋迦は欲しない、苦が一時も早く樂に移り變ることを欲する。これから見ると、彼れは變轉そのことが嫌ひなのではなくて、苦が一時も早く樂に變ずることは希望するが、樂が苦に變ずることは嫌ひなのである。つまり樂に永劫性のないのが彼れのこの世を嫌ふ理由であるのだ。

愛を嫌ふのではなく、その次に憎があるからいやなのだ。美を嫌ふのではなく、その次に醜があるからいやなのだ。會ふことを嫌ふのではない、その次に別れがあるからいやなのである。財寶を嫌ふのではない、次にそれを失ふ時があるからいやなのだ。生を嫌ふのではない、次に死があるからいやなのだ。若年を嫌ふのではない、次に老年があるからいやなのである。この心持は支那の老子と同じである。老子はこの相對の世界を嫌つて避けて無爲の境地に入らうといふのだ。釋迦もこれを脱して佛陀と淨土とを欲求したので。

釋迦が猶ほ佛陀の境地を欲求したのは人間の不自由を嫌つて大自在の神通力を求めるからである。西曆紀元前五百年の未開時代の人間であるから、自然現象や天變地殃と猛獸毒蛇の危害と神祕的現象とに恐れ戦き、不可思議を感じたのみで、それに抵抗もできず、それを使役驅馳することも出來ず、その理を知ることにも出來なかつたところから、人間の弱さと不自由さを感じた結果、彼れの夢想は遂に佛力自在を創作するに至つたのだ。

要するに釋迦は此世をつまらなく思ひ、人間生活をつまらなく思ひ、人生をセンチメンタルにはかなく考へたのである。此世の無常をそのまゝ是認し、歡喜をもつて見ることが出來なかつた。人間生活を悲喜憎愛の中にそのまゝ是認し、歡喜をもつて見ることが出來なかつたのである。現象則實在、娑婆則淨土、凡人則佛陀、山川草木一切成佛といふことは廻り廻つて間接にこの人間世界を是認する形にはなるけれど、それは現象を考へなほして實在と觀じ、娑婆を考へなほして淨土と觀じ、凡人を考へなほして佛陀と觀じ、一切の物が成佛すると言つても、そこには矢張り成佛そのことを求めてゐる、即ち如何に言はうとも結局は實在、淨土、佛陀を要求しての諸相の觀じ方であつて、現象そのまゝ、娑婆そのまゝ、凡人そのまゝ、山川草木魚貝虫獸そのまゝ



を是認し、面白く見、歡喜してゐるのではない。

彼れは人間生活の苦樂を三世因果の理法をもつて説明して、そこに悟りを得て諦めたつもりでゐる。この世に苦を嘗めるのは前世の因のためで、この世に樂を得るのは前世の果報だと説明する。この世に苦しむのは自分の生き方が下手なので、この世に樂しむのは自分の生き方が上手なのだ、どこまでも現世現在そのものを其儘たゞしく見てゐることが出来なかつた。

彼れが出家遁世して佛道を成就する氣になつたのは、王者の富貴逸樂の中に生きてゐたためである。彼れはその境涯を永劫につゞけて歡樂に耽りたいと思つた。しかるに人間界を見ると、驕るもの久しからず、生けるもの必ず死し、美女も忽ちに老衰することを知つて、自分の富貴榮華、淫樂歡喜も朝露のやうなものだと觀じた結果が常住安樂の境地を發見する心を發起したわけである。

故に彼れが佛を供養することも、佛土を創作するにも、一切が吾れ／＼平民の考へられない、王者の生活を以てそれに當てはめてゐるのだ。その例として法華經と淨土三部經との一節を左に

記す。

### 法華經第三卷、授記品

この大迦旃延は當來世に於て諸の供具をもつて八千億の佛に供養奉事して恭敬尊重せん。諸佛の滅後に各塔廟を起てん、高さ千由旬、縱廣正等にして五百由旬ならん。金銀、瑠璃、砗磲、碼瑙、眞珠、玫瑰の七寶をもつて合成し、衆華、瓔珞、塗香、抹香、燒香、繪蓋、幢旛を塔廟に供養せん。

### 佛說阿彌陀經

極樂國には地に七重の欄干あり、空に七重の羅網あり、中に七重の行樹あり、みな金銀、瑠璃、玻瓈の四寶をもつて圍繞す。七寶をもつて飾る池あり、中に八功德水が満ちて、池の底には金沙を敷きつめてある。天よりは曼陀羅華が降り、空には迦陵頻伽の聲が聞える。

釋迦の是等の想像は後世に大藝術となつて七堂伽藍に佛像佛畫として實現し、王侯を凌ぐ大本山大僧正、本願寺法主のごとき人間をこの娑婆國土に生活せしめるに至つた。



## 第八講

# エマールソン

中西伊之助

- (一) 運命から進取への人生
- (二) 運命の冷酷と不可抗性
- (三) 運命と其征服
- (四) 運命の中に自由と進歩あり
- (五) 紛糾と常住の人生



## (一) 運命から進取への人生

第十九世紀の物質的王国、資本主義の宮殿——亞米利加が生んだたつた一つの寶玉のやうに光るものは、わがラルフ・ワルト、エマーソンでなければならぬ。

彼は、一八〇三年、恰かもカーライルに後れること八年、米國の商業都市ボストンで生れた。彼の父は、ボストンの第一教會に屬する、貧しい牧師であつた。彼が小學校から、同市の拉典學校に入つて、更らにハアバート大學に入る頃には、彼の父は、彼に十分の學費を支出することができなかつた。そこで、彼は學僕となつて、食費四分の三の免除を受けて、文字通りの苦學をつづけた。が、彼の學績は、いつも衆を抜いてゐた。

エマーソンは、カーライルの知己であつた。彼は、遠く不幸なるカーライルに書を寄せて、その著書の出版に盡力してやつた。カーライルも、彼の學殖と天分を賞讃してやまなかつた。そして互ひに、親しい交りをした。そして一つはコンコルドの聖人と呼ばれ、他はチエルシーの聖人



と呼ばれた。

が、彼等の懐いてゐる人生観には、かなりの相違があつた。カーライルの悲観論にたいして、エマーソンは、樂觀論であつた。カーライルは、消極的的人生観の持主であつたが、エマーソンはあくまでも積極的的人生観を持して、人類に向つて、前進の喇叭を吹いた。カーライルと、エマーソンは、その哲學的考察の根基に於て同一ではあつたが、人生に對する態度については、そこから二つの大きい角度を作つて、展開した。

エマーソンの人生論は、一種の運命觀である。が、それは、佛教で説くが如き運命觀ではなくて、むしろ基督教的の自由意志を肯定してゐる。そこに、彼の特殊な人生觀がある。

エマーソンは、人生を、運命の法則に依つて支配せられてゐるものであると云ふ、しかし、彼は、決して世の多くの運命論者のやうに、その運命より一步も出ることができないとは云つてゐるのではない。——ここが、エマーソンの人生觀の最も力強い論點である。

數年前の、ある冬のことである。當時、わが國の都市では、『時勢の理』と云ふことを論ずることが盛んであつたが、偶、四五の士名が、ポストンや紐育の市民に向つて、各時代の精神について、

講演をした。が、それと同時に、倫敦に於ても、著名な雑誌などで、この問題が重要な論題となつた。しかし、私から見ると、時代の研究問題は、要するに、吾々はいかに生活すべきかと云ふ處世の實際問題に歸着するのである。

吾々人間は時勢を解釋するに堪へない。吾々の幾何學は、現代思潮の巨大なる軌道を量ることができない。その回歸を見ることもできない。またその矛盾や衝突も調和することができない。そして唯吾々の爲し得るところは、吾々の本性に従つて進むのみである。かうして、吾々は如何ともすべからざる天命を甘受しなければならぬが、しかし、吾々は自ら思考し、工夫して、自分の進路を擇ぶと云ふことは、また吾々の快心事ではなからうか——エマーソンは、その運命論の劈頭にかう云ふ。

吾々の人生は、所謂「寸善尺魔」である。全く、はかり知るべからざるものである。これを知らうとすることは、むしろ徒勞である。吾々は、吾々の本性、本能の命のままに進んで行くより外には、途がない。しかし、吾々には、自分の判斷力もある。また努力もある。たとひ運命がどうあらうとも、吾々は運命のなすがままに袖手傍觀してゐるべきものではない。吾々には進取の



氣象がある。運命打開の力がある。吾々は、その氣象と力にとつて進撃すべきである——と彼は云ふのである。

吾々人間は、自分の願望を達しようとして、まづ一步を踏み出すと、忽ち頑強な障害物に衝きあたる。たとへば、吾々が社會の人々を改革しようとする熱心な希望をもつたとする。そして幾多の實際にあつてみて、それが全く不可能であると云ふことが知れる。が、この場合、この改革運動は、彼等の小學時代からやらねばならないと云ふことを悟るに至るであらう。そこで、その小學校の教育から手をつけるとしてみる。しかし、そこに集つた子供たちも、すべて悪太郎ばかりであつて、決して従順ではない。ここに至つて、この子供たちも決して良材ではないと云ふことに斷ぜざるを得ない。で、つまり、この社會の人々を改革するには、彼等の生れない前から試みなければならぬと云ふことになる。言葉を換へると、吾々人間が、生れる以前に、吾々を支配する運命と云ふものがあるのだ。これが、世界の理法である。

エマーソンは、世界の理法として、運命と云ふ概念を與へてゐる。人生は、この不可思議な理法に支配せられてゐるのであると云ふ。人間を改革しようとするれば、『運命』と云ふ理法に衝突す

る。——即ち遺傳と云ふ法則に衝突する。人生は、この遺傳の鐵則を動かすことができないと、彼は云ふのである。

然らば、この運命の鐵則は、到底、人生を身動きのできないやうに縛りつけるものであらうか、エマーソンは、『ノウ』と答へる。

もし、世に、如何ともすることのできない運命があるとすれば、この運命は、盲動ではない。故に、吾々は、この運命に従はねばならないであらうか。しかし、吾々も自由を主張しなければならぬ。なぜなら、吾々には、個人としての意義がある。職分としての權威がある。品性の力もある。吾々は、これらを主張しなければならない。運命も眞理であれば、吾々の主張も眞理である。然るに、吾々の狹隘なる幾何學は、これらの極點を量つて、これを調和することを知らない。然らばどうしたらいいのか——エマーソンは、かう反問して、更らに云ふ。

吾々は、謙虚な心をもつて、その相衝突すると見える思想(世界の法則と個人の主張)に追隨することである。そして、そこに大なる調和を發見することである。即ち、必然は、自由と一致する。個人は、世界と一致する。吾々の本性は、時代の精神と一致する。そして時勢の謎は、吾々



の各人各自に解くことができるのである。人間が、自分の時代を理解しようとするれば、吾々の人生觀に屬してゐる主要の問題を一々研究して、そのうちから、自分の經驗に合するものを取りあげることである。そして他の反對するやうなところのある諸問題も、同じく公平に研究しなければならぬ。さうすれば眞の缺點は自然に現はれて来る。そして一部分を過重する弊害も矯正せられて、精確なる軒衡が立てられる。——運命から進取へ——これが、エマーソンの、人生觀の基調である。

## (二) 運命の冷酷と不可抗性

エマーソンは、かうして、運命にたいする、自分の研究と、そこから光明を見出して進む人生の行路を説いてゐる。エマーソンの運命論は、この點に於て、他の運命論者と趣を異にしてゐる。エマーソンは、古來、人間は、いかにして、この運命を感得したかを説いてゐる。彼は云ふ。わがアメリカは、淺薄と惡名されてゐる。古來、偉人や大國民は、高慢家ではない。また滑稽家ではない。すべて、人生の恐しさを看取して、自ら振つて運命と戦つた人々である。

昔、スバルタ人は、國家を宗教とした。故に國家の名の前には、一語も發しないで死んだものである。トルコ人は、人間が世に生れ出た時には、自分の運命は、鐵葉に刻まれてあるのだと信じてゐた。従つて、彼等は惜しげもなく劍戟の中へ身を投じた。トルコ人、アラビヤ人、ペルシヤ人等は、すべてこの運命を甘受した。彼等の古詩にこんながある。

汝が生死を脱せんとして、  
能はざる、二つの日がある。  
定業の日と、不定業の日である。  
前の日には、醫藥も汝を  
救ふことができない。  
後の日には、天地も汝を  
殺すことができない。



印度人は、車輪の下にあつても、堅忍自若としてゐる。カルビン教徒も、第十八世紀頃には、これと類似の尊嚴をもつてゐた。

彼等は、宇宙の重量の爲に、自分が壓抑せられてゐるものだと感じ、自分自身では何事もなし得ないものであると考へてゐた。哲人は宇宙人生には、到底語ることでできない、また指摘することのできない『或るもの』があるのだと考へた。その『或るもの』が、宇宙人生を固く結びつけてゐるバンドであらうと思はれた。チヨウサアは、『カンタベリー・テールズ』の中で、それを美しく歌つてゐる。希臘の悲劇も、また同じ觀念を現はしてゐるのである。『凡そ、天命をもつて定まれる事は、必ず起つて来る。天帝ジヨウブの絶大なる精神は、逆ひて犯すことができない』エマーソンは、運命の力が、いかに人生に強い壓抑を加へてゐるかを説いてゐる。が、彼はまた、實際に、運命は、常に残忍冷酷であつて、その下に置かれた人生が、いかに悲惨なものであるかを痛切に感じてゐるのである。彼は述べて云ふ。

疾病、水火、重力、電霆は、何人も尊重しない。天道はかなり手きびしい。蛇、蜘蛛の行動、虎、豹の搏噬、蟒蛇に纏かれて餌食となる禽獸の骨の碎ける音——この音は、生物の尋常茶飯事

である。が、それは、また人類の尋常茶飯事である。

諸君は、今、平和なる食事を終つた。たとひ屠場が郊外數里の外になつて、それを巧みに匿してあつても、諸君の食物から想像して、諸君は屠場の屠者と同類である。吁、残忍なる種族——弱肉強食、互に吞噬して、甲の種族は、乙の種族を食つて生活してゐる。

遊星である地球は、慧星より来る震動や、他の遊星より来る攝動やを受ける。更らに、自らの地震、火山等によつて龜裂する。葡萄牙のリスボンでは、地震で人を殺すこと、蠅を殺すものやうであつた。伊太利ネエプルスでも、一萬の生靈は數分間に壓し潰されてしまつた。海上には壞血病が流行する。阿弗利加の西部や、ケーエン(南米の東化地方)、パナマ、新オルレアンズ等に於ける氣候は劍のやうに人を殺してしまふ。それはまるで虐殺にひとしい。北亞米利加西部の廣野では、熱病と瘧疾とがあつて、人心を震撼せしめる。虎列拉、痘瘡は或る民族にたいして、饑殺の慘害を逞ふること、恰かも一夜の霜に會ふ蟋蟀のやうなものである。蟋蟀は夏の夜に鳴いてゐるが、一夜、温度が降下すると、すぐその聲をやめるやうなものである。

幾種の寄生虫が、一個の蠶蛾に附着する數を數へたり、場内の寄生虫や、滴虫の吞噬者を探索



したり、交互生殖の隠微を研究するやうなことは姑く措くとするも、鱈、鮫、及びレープラス、噬み摧くべき齒を列ねた海狼の顎、鯨、その他海中にひそんでゐる怪魚の武器は、自然界の裏面に於ける獍猛なる惨劇を暗示することができる。

吾々は、この事實を辯護することができない。天道は、その目的を達するために、荒き險しき奇道を備へる。この絶大なる善悪混淆する手段方法を塗り飾らうとすることは、全く無用である。この恐ろしき恩主(天道)を神學生の清潔なる襯衣と、純白なる襟巻にて装ひ立てようとするのは、全く無益である。

エマーソンのこの宇宙観は、最も注意を要する。彼は、この宇宙の惨忍、冷酷を、宗教の美しい衣をもつて胡麻化さうとするのは、無益であると云ふのである。天道は、是でもあり、非でもありと云ふのである。彼は「その目的を達するため」と云ふ宇宙観上の目的論をしてゐるが、たとひ、その目的論であるにもせよ、天道の、この残忍と、冷酷は、決して、宗教の美しい辯護を許す必要はない。——とエマーソンは云ふ。

人は、或は云ふかも知れない。人類を脅かす災害は異變である。それは決して常態ではない。

吾々は、さうした有爲轉變の起るのを戦々競々として日毎に期待してゐる必要はないと。その云ふことは善い。しかし、異變と雖も、常態の中から起るのである。常態でないからと云つて、安心してゐるわけにはゆかない。その異變を、直ちに喰ひとめる手段が無い間は、吾々はやはり恐れなければならぬ。

更らにまた、これらの大變動のやうなものばかりではない。吾々が日常生活してゐる間に、徐徐として運命の法則に支配されつつある。人生は、隠微の中に、この法則に支配せられて壓制されつつある。これが運命である。

動物園は、一個の運命書である。

動物の脊椎の形状や、その力量。鳥の嘴喙、蛇の頭骨。それらは、すべてその動物の行動を制限してゐる。人種の高卑、氣質の強弱、男女の性もこれとひとしい。更に氣候の寒暖活動力を一方に禁遏する才能の反動もまた然りである。各個の靈(精神)は、自身の家を作つて、之れに住居する。が、後になつて、その靈は、その家に閉ぢこめられて、自在の行動をすることができなくなる。



エマーソンは、かう云つて、そこから、前にも述べた人間の遺傳と境遇を説かうとしてゐる。そして遺傳の法則から、更らにこの法則に對抗する、『運命の制限』と云ふことを主張してゐる。

この主張は、エマーソンの人生論が、非常に科學的であることが知れる。

そこで、エマーソンは、次のやうに云ふ。

試みに、醫書について四つの氣質。——即ち、多血性、膽汁質、粘液質、及び憂鬱の説明を読めば、諸君はまだ自分の知らない、自分の思想を、そこに讀むことができるであらう。吾々は祖先との關係をどうしても離脱することができないのである。また、その父、その母の性質から受けた、黒い滴を、吾々の血管内から除き去ることができないのである。時としては、一家を見廻すと、さながら祖先の色々な品性氣質が、各々別々の瓶に入れられてゐるかのやうな感じがされるのである。即ち一家のもの、女や男に、一々ある主質がはつきりと代表せられてゐることもある。時としては、純粹で混り氣のない濃厚な毒液が、——一家の通患である惡徳が、唯一人の家人に凝收されて、他のものは左程でもないのがある。

吾々は、往々、友人の顔色に變化のあるのを見ると、きつと云ふ。かれの父、または母が、眼

の前に見ると。かうして、五六代の先祖さへ、尙ほ子孫の顔に現れるのである。少くとも、先祖のうちの、七八人は各人の皮膚の裏に包んでゐるやうである。すべて、これらは、血統の然らしむるところである。

試みに土方人夫に向つて、ニウトンの數理を解説せよと求めよ。彼の腦の緻密なる機關は、時代の彼の祖先の過勞と困窮に依つてすつから萎靡してしまつたことを如何にすべきであらうか。彼の小さき圓顔と、豚の如き眼と、這ひつくばう姿は、世界の有ゆる特權も、いかなる法律も、彼を科學者とし、詩人とし、王候たらしむることができないではないか。

キリストは、『女を見て心の中で情慾を起すものは、既にその女と姦淫したるものである』と云ふ。しかし、彼はその身にあり餘る獸性がある。そして思慮は缺乏してゐる。未だその女を見ない前に既に姦通者であるのだ。凡そ、街頭で、かかる男や女に出會つた場合、彼等はお互ひに犠牲となるべく爛熟してゐるのである。危いかな、彼等は、觸れば落ちようとしてゐるのだ。

エマーソンは、遺傳の法則が、運命化して、人間を支配することを、反覆詳論する。彼は、獨逸の物理學者で、太陽の分光器で黒線を發見したフラウエンホフエル。または、英國の大生理



學者であるカーペンタアが、高度の擴大鏡で研究したならば、受胎後第四日目くらゐで、これは自由黨である。これは奴隷解放論者であると見分けるであらうと云つて、遺傳を科學的に論證することのできる確實さを信じてゐる。

更らに、エマーソンは、興味あることを説いてゐる。それは、その人の政見と生理との關係である。——つまり、その人の政見も、實は、その人の遺傳と境遇に依るのでと云ふのである。

彼は云ふ。

吾々の政見は、多分は生理上より來るものである。富祐の人は、年少氣鋭の時代には、最も潤達たる自由主義を奉じてゐる。英國などでは、富豪貴族は、健康なる時代は、自ら進んで進歩主義者の側に立つてゐる。しかし、晩年になつて、死期の近づいて來るに従つて、遽かにその前進を止め、旗鼓を收め、一變して保守主義者となる。一般の保守主義者は、その身體と不健康、不活潑が原因になつてゐる。

最も強き思想は、大多數の中に大國民の中に住んでゐる。最も健かなる者、最も強き者の中に宿る。——即ち、健康なる肉體には、健康なる思想が宿ると、エマーソンは云ふのである。

エマーソンは、かう説き來つて、ここに一つの觀念を掴み出した。それは、力である。彼は、運命は固より廣大であるが、また、力も廣大であると云ふ。そして、これを、二元的に見てゐて、運命と力は、兩々相峙するものと云ふ。——そしてそこにはエマーソン獨特の人生論が力強くひそんでゐる。

### (三) 運命と其征服

エマーソンは、細胞の絶大なる力を説き、境遇の至妙なる力を説く。そして人類の興亡は、その力と境遇に依るのであると云ふ。

彼は、運命をもつて力に對抗させてゐる。運命若し力を追ひて、之れを制限すれば、力は運命に伴つて之れに反抗すると云ふ。吾々は運命を自然史として尊重しなければならぬが、しかし、宇宙は、自然史のみではない。人と運命とは相對抗すると云ふ。彼は、運命の中から、人類の自由意志を力強く引き出さうとしてゐる。運命の一部分に、人類の自由の儼存を信じようとしてゐる。——エマーソンは、これから、彼の進撃的な人生論をはじめるのである。



彼は云ふ。

吾々の靈魂裡には、自ら擇んで、事をなさうとする意志が、滾々として常に湧いて出てゐる。知力は運命を廢滅する。凡そ、人は思想してゐる限りは自由である。古い神語に『自然を顧みてはならぬ。自然の名は人をして窮せしむるからである』と。

運命觀は、これを勇敢なる人種が懐くと、彼等は傲然と運命を信する徒となつて、運命と一味になる。そして、成敗利鈍に甘じて安ずることができる。が、懶惰なる徒が信奉すると、それとは全く感想を異にすることになる。しかし、その罪は運命觀それ自身にはないのである。

運命を以て、運命に抵抗しなければならぬ。宇宙に、横暴野蠻の出來事があつて、吾々に迫つて來たならば、吾々もこれに抵抗して同じく野蠻になることができる。吾々は、もし身體の内々に籠つてゐる空氣の反動がなかつたならば、外部の大氣のために壓潰せられるに違ひない、玻璃の薄皮をもつて造つてある管も、若し同じ水を内に充せば、大海の震蕩に抵抗することができる。打撃に萬能があれば、抵抗にも萬能がある。

エマーソンは、人間が自然の運命に抵抗し能ふことを、物理學的な論證によつて説明してゐる。

が、彼は、運命をもつて、運命に當るは、受止めることであると云ふ。防衛であると云ふ。そして人間には、一層高尚なる創造力があると云ふ。大思想の啓示である。大思想は、人をして奴隸の境遇から、自由の域に入らしめるものであると云ふ。眞理が、もし吾々の心には入つて來ると、吾々は俄かに眞理の大きさにまで成長する。そして吾々は立法家の如く、天に代つてものを言ふことができる。

吾々のこの知識は、吾々をして一切に反對せしめる。他人ばかりではなく、自分自身にも反對せしめる。そして宇宙に親昵せしめる。區々たる小計などは念としないことになる。知識と、靈覺によつてもものを云ふ人は、精神的の眞理を體驗して宣言するのである。精神は不可死である。故に我は不可死であると。

エマーソンは、運命に反抗すべきものは、この精神——不可死の精神であると云ふ。

彼は、人間の魂は、靈に目ざめた時、必らず私慾を超越するものであつて、思想は宇宙を悉く鎔解するものであると云ふ。故に、思想の最も強いものは、最も強い人であると云ふ。

思想は、吾々をして自由たらしめる。道德觀念もまた然りである。そして、眞理の自覺は、眞



理が世に行はれんことを希ふの感情が伴ふ。愛は意志の發動に必要な要素である。鞏固なる意志は、決して製造のできるものではない。一斤の量には、一斤の實質がなくてはならない。鞏固なる意志の力は、宇宙のエネルギーに基かねばならない。そして意志の力を發揮するには、知見と愛が必要である。この兩者の融合を必要とする。故に、眞理は、感化に依らねば十分に理解することができない。

エマーソンは、思想の眞理は、意志によつて大なる力となる。そして、それが運命と對抗するものだと云ふ。従つて、この人格の力が、利慾を忘れ、氣候を忘れ、重力を忘れ、その他、運命に屬する諸種の事件を忘れ去るのであると説いてゐる。

運命は、人間の成長發達を量る尺度である——と、エマーソンは云ふ。吾々の運命は、子供が、親の家にあつて、壁に向つて立ち、年々身長が伸びて行くやうなものである。が、その子供が大きくなつた時、——その子供がその家の主人となつた時、その壁を毀つて、更らに新しく大きい家を建てるのである。勇敢なる少年は、むしろ、この運命の龍にのつて、之れを駕卸することを學ぶのである。彼の學術はいかにせばこれらの人情と妨碍力とをもつて武器とし、羽翼として天

下を雄飛すべきかを考へるのである。

エマーソンは、遂に、運命が、決して人生を拘縛する鐵鎖ではないことを説いた。

彼は、更らに、運命が、決して、全人生を支配し得べきでないことについて、詳しく説くのである。

運命とは、思想の火が未だ浴しない以前の出來事である。——即ち、吾々が、まだその原因を知らざる事柄の名である。吾々の眼が未だそこに透徹しない出來事について云ふのである。

水は船と乗組員を溺らすこと、まるで一粒の沙塵を沈めるやうなものである。しかし、乗組員が泳ぐこと、船を操ることを習へば、水は彼等を王冠のやうに載せて、勢よく運び行くであらう。嚴寒は、何人を問はず、血を氷らせる。そして人を凍死せしめるのは、他の露滴と變りはない。が、試みに、氷りすべりを學べば、同じ氷は、優雅な運動を諸君に與へる。そして寒氣は、諸君の肢體及び頭腦を緊張せしめて、諸君を天才とするであらう。海と寒さとは、アングロ・サクソン人種を天の寵兒とした。——水と蒸氣の秘訣、電氣の震動、金屬の延長、飛行機（エマーソンの時代には、飛行機はなかつた。彼はそれを豫言したのである）飛行船（彼は、これを舵をつ



けた風船と云つてゐる。すべてこれらは、諸君の用を爲さんことを待構へてゐる。

エマーソンは、人間の知識が、自然を征服すべきことを力説するのである。いかなる自然の法則も、人の偉大なる思想——知識と愛とに力づけられた意志をもつて行へば、決して恐るるに足らないばかりではなく、却つて、自然の寵兒となることができると云ふのである。

彼は、更らに生理、衛生方面についても云ふ。毎年、腸窒扶斯のために死ぬものは、戦争の陣亡者より遙かに多い。が、下水の掃除、溝渠の清潔は、腸窒扶斯を滅亡させる。海上勤務をしてゐる人たちの壞血病は、容易に携帯、また購求されるレモン液や、その他の食物で醫やされる。コレラや、痘瘡は、種痘をもつて終熄せしめることもできる。その他の各疫も、すべて撃退することができる。

エマーソンは、人類の多くの疾病、悪疫も、すべて進歩したる科學の力をもつて征服し得られると云ふ。過去の人々が、『運命』として解決し得なかつたものも、すべて征服することができるのだと云ふ。

彼は、更らに、自然が、人類に利用せられることを説明する。

危険なる激流は、人類の爲めに動力として勤勞せしめられる。野獸は、食物と衣服になるばかりではない。また勞働者として人類に奉仕せしめられる。化學的爆發は、能く時計をもつて支配し得られる。——これらのものは、すべて人類が乗つて馳る所の駿馬である。と、エマーソンは云ふ。

人類は、馬の脚にて、風の翼にて、汽力にて、汽球にて、瓦斯にて、電氣にて、千姿萬態に行する。空中に得意である鷲をすら襲はんとするのである。世には、人の使役とならないものはない。

蒸氣は、先日まで吾々の恐れたる惡鬼であつた。陶工や鐵工は、土瓶や鐵瓶に、蒸氣を漏らすために、その蓋に孔を穿つた。それでないと、蒸氣は土瓶や鐵瓶を破壊するからである。然るに、ワット、フルトンは、そこからエネルギーを發見した。蒸氣は惡鬼でなくて、神であつた。これは發明家が探し出さうと苦心した勞働者であつた。

エマーソンは、この法則を、政治上にも及すことを説いた。政界のワットやフルトンの仕事は、危険なる民論を巧みに按排して、一個の安穩なる國家を造り出すことであると云つた。



人生に於ける、運命の教訓は苦痛である。小ざかしき骨相家が、自分の禍福を忌弾なく宣明することは、何人も好まない。たとへば、自分の頭蓋骨に、背椎に、または腰骨に、アングロ・サクソン人種や、セルチク人種のあらゆる悪徳を藏してゐると信ずることを何人も好まない。たとひ自分がいかなる決心をもつて高大な希望に燃えてゐたとしても、必らず自分を曳倒して、一個の利己、賤劣、卑屈、狡猾なる小人に墮落せしむるものであると説くからである。某博士は、伊太利ネエプルス人は、成長すると、皆一目瞭然と、悪徒の容貌を呈して來ると云ふ。この言葉は、少しく過大ではあるが、決して虚言ではないであらう。

が、これらは、すべて火薬庫である。武器庫である。エネルギーは、これから生ずるのである。人は、すべからず、自己の不智、短才に感謝せねばならない。むしろ、自己の才能について、肅然と懼れなければならない。——とエマーソンは云ふ。

エマーソンは、人生に、運命と云ふものがあるから、それを征服しようとする人間の意志があるのだと説くのである。若し、人生に運命がなければ、人間の努力の對象を失つてしまふと云ふのである。人間の生命は、いつも運命に反撥するものであると云ふのである。火薬庫と云ふもの

は、恐ろしいものであるに違ひない。瞬間に數千、數萬の人間を滅亡に導くものである。しかし、その火薬庫に藏してゐるエネルギーは、その利用に依つて、人類のために偉大なる幸福——たとへば鑛山に使用して、鑛石の採掘等に——を持ち來すものであるのだと云ふ。

エマーソンの運命觀は、この點に於て、從來の、佛教哲學上の運命觀とは、全く異つてゐる。また唯物哲學者の運命觀とも、非常な相違がある。

エマーソンの運命觀は、人間の運命をもつて、人類進歩の材料であると見てゐるのである。

彼の人生論は、この點について、他の如何なる人の人生論よりも、科學的であり、且つ進撃的である、従つて、樂觀的である。しかし亦、甚だ嚴肅である。

#### (四) 運命の中に自由と進歩あり

運命は、改善の意義を含むものである——と、エマーソンは云ふ。

いかなる世界觀も、世界の向上的努力あるを認めないものは、未だ健全なるものではない。世界の全體、及び凡ての部分は、改善に向つて進みつつある。その進歩の遲速は、健康の優劣に比



例する。

エマーソンはかう云つて、更らに、明解に人間の運命と、人間の自由性を説く。

彼は云ふ。

各個人の後には、有機的體制が閉鎖してゐる。しかし、その面前には、精神的自由が開いてゐる。更らに最も好き自由が開かれてゐる——と、

彼の云ふ、各個人の後後に閉鎖してゐるものとは、各個人の運命である。しかし、人間には、その前に精神的自由が開けてゐる。それが、人間の進歩である。この太古の、極悪なる種族は、すべて絶滅した。今や、尙不完全なる種族は、死滅せんとしつつある。或はまた高等なる種族の成熟するまでは生残りつつある。そして最後の種族——人類は、あらゆる宏量、あらゆる新知覚並びに同胞より傳し得る敬愛と稱讚とは、すべて運命を脱して進み入つた證據である。人類が發達成長して形骸の拘束、羈絆を脱し、意志の自由を獲得することが、即ち世界の目的である。

エマーソンは、人類が、地上に最高の位置を獲得したことは、この運命を超克して、自由なる精神的努力をしたがためだと云ふのである。そして、それが世界の目的に達する所以であると云

ふ——目的論者である。

吾々の災禍は、吾々を刺激する具となる、貴重な暗示を與へたものである。全動物界に於て、牙と牙と咬み合ふ争闘、食物の争奪、苦痛の呻吟、勝利の咆哮、——遂に全動物園、全獸畜群相融け合ひ、相鍊れて、高等なる使用に適するやうになる状態は、遠景にて觀望すれば、却々に興味深い。

エマーソンは、生物の闘争にたいして、かうした見方をしてゐるのである。闘争は、かれら生物に取つて、進歩の試練であると見てゐる。生物の争闘は、一方より見れば、生きんとする意志の相互の衝突である。が、一方より見れば、生物自體の運命である。そして、エマーソンは、その運命が生物を向上せしめる手段になると云ふのである。

いかに、運命と自由とが互に相出入しつつあるかを知らんと愆せば、各生物の根柢は、いかに遠くに及ぶかを觀察せよ——とエマーソンは云ふ。

人生は、萬物と互に相同情して、極めて遠くまで彼此相關聯してゐる。そして自然の結び目は、甚だ巧みに繋がれてゐる。故に、何人もその兩者——自然と人類——の糸口を見出すほどに聰明



になることはできないであらう。

自然は相重疊してゐる。相交雜してゐる。甚だ織綿されてゐる。そしてその終極は見出すことさへできない。英國の大建築技師でセント・ポウロの教會堂を設計したクリストファ・レンは、絶美なるキングス・カレヂの講堂を評して、『何人か若しその一石はどこに置くべきかを自分に示してくれたら、自分は第二のかかる講堂を建築することができる』と云つた。吾々は、この人間と云ふ家屋に、どこにその第一石を見出すことができよう。そして人間は、その組織はあくまでも同情であり、結合である。諸部分の最も巧みな權衡である。

エマーソンは、人間が、自然の法則に依つて、現在まで發達して來たことを説いて、それは、運命でありその運命は、人間の自由に依つて、十分に征服されられると云ふ。

が、彼は、その征服とはいかなるものであるかを解釋する。征服すると云ふことは、自然の法則に叛逆すると云ふことではない。自然の法則を破壊して、不合理な行動をするのではないのである。即ち人間の組織は、あくまでも同情であり、結合であり、また巧みな權衡であると云ふ。故に、そこから更らに高い進歩をするには、それに調和して行くものでなければならぬ。エマ

ーソンは、その一例として、動物の冬眠その他について語つてゐる。

ある動物は、冬期には惰眠をする。しかし、他の動物は、夏期に於て惰眠をする。故に、冬眠と云ふ名は正當でなくてそれは長眠である。そして寒氣を凌ぐためにするのではなくて、その動物の、適當なる食物供給の有無に依つて按排されてゐるのである。その動物の食ふ果實や生餌のない時に長眠をするのであつた。

眼は、日光の中に在り、耳は鼓膜を打つ空氣の中に在り、足には陸、鳍は水、翼は空——動物は、その棲息すべき處に、内外相互の適合を得て棲んでゐる。

各地帯には、その固有なる動物を有してゐる。動物と植物、その寄生、その敵との間には、調和があり、權衡がある。——これと同様の調和は、人類のためにも存してゐる。人類が、この地球に出現すると、その食物は炊かれ、石炭は坑内に積まれ、洪水の泥は乾いた。そしてその配遇者も同時に出現して、戀愛、合歡、喜笑、涕淚をもつて待つてゐる。これらは粗大なる調和であるが、眼に見えない微妙の調和もこれに譲らない。

エマーソンは、人類が、自然に調和すべきことを説いてゐる。が、彼は、その調和は、人類が、



自己の周囲の萬物を「矯めて」これを自己の用に「適せしめる」ものであると云ふ。即ち、自然の法則——運命に屈服するのではなくて、それを征服するのであると云つてゐる。

エマーソンは、目的論者である。故に、彼は天がその目的を達成するに、いかなる手段を用ひつつあるかを考へる。即ち、彼は、天は手段を浪費するものではない——と云つて、天はその目的を達するのに、最も捷徑を擇びつつあると云つてゐる。

大將が兵士に向つて、『汝等堡壘を要せば、堡壘を築け』と云ふ如く、天は遊星にもせよ、動物にもせよ、また樹木にもせよ——各種の受造物に、彼等の業をもつて、彼等の生計を立てしめるものである。即ち遊星は自ら造り、動物の細胞は自ら作る——そして後、更らに進んでその所要物を造り出すのである。

かく一切の受造物は、——鷓鴣にもあれ、龍蛇にもあれ——みな自家の巢窟を營むものである。凡そ、生命が生ずると、その生命は直ちに自ら活動して、物質を吸収し、使用する。——生命は自由である。

生命は、直接、自由の多寡に比例する。嬰兒は、活氣のないものではない。生命は、任意的に、

超自然的に、その周邊に働いてゐるのである。諸君は、その生氣横溢して、四方に耀けるものを單に斤量にて料られ得べしとは考へてはゐないであらう。或は、彼は、その皮膚内に包まれてゐるものと信じてはゐないであらう。最小の蠟燭も、その光線をもつて一哩を照らし、人間の小乳頭は、星辰にまで遠く瀉ぐ。凡そ何事でも、なさるべきことは、世界はいかにしてこれをなすべきかを知つてゐるのである。

植物の芽は、必要に應じて、葉を造り、果皮を造り、根を造り、皮を造り、刺を造る——第一の細胞は、必要に循つて、胃に化し、口に化し、鼻に化し、爪に化す。——世界は、その生命力を、或は英雄に、或は牧者に投じ、その要する處にこれを派遣する。ダンテ、コロンブスは、昔は伊太利人であつたが、今日は、露西亞人たり、亞米利加人たらんとしてゐる。事物は成熟する。而して新人は来る。境遇に順應する作用は、壇溢なるものではない。終極の大目的に向つて進んで行くのである。

エマーソンは、人生をとりめぐる森羅萬衆は、生々化育して、一大調和に向つて進んで行くのであると云ふ。そしてその原動力は、エネルギーの運動であると云ふ。



宇宙の秘密は、この人と事との聯結であり、人は事をつくり、事は人をつくる。『時勢』と云ひ、『時代』と云ふは、僅々少數の思想家、少數の活動家が、その時代を總括して代表したものである。ゲーテ、ヘーゲル、メツテルニツヒ、アダムス、カルヒウン、ギソーピール、ゴブテン、コウスト、ロステヤイルド、アストル、ブルネル及びその他の偉人がさうである——と、エマーソンは云ふ。出來事は、わが靈魂の思想の實現したるものである。吾々が自己に向つて禱る所の事は、必ず聽許せられる。出來事は、吾々の姿の印象である。出來事は、その身心から生れ出でた兒女である。こゝに至つて、吾々は、吾々の運命の魂は、吾々の魂なりと云ふことを知るのである——エマーソンは、運命の法則と、吾々人生の目的は、同一であると結論するのである。吾々の自由も實は運命の法則の中に生きてゐるのであると云ふ。彼は、波斯の詩人ハフキズが、『あゝ、今までわれは知らざりし、わが道と運命は一なりけり』と歌つたのを擧げて、それを裏書しようとした。

### (五) 紛糾と常住の人生

エマーソンは、人生に於けるあらゆる出來事は、決して偶然に來るものではないと云ふ。殊に、人生の禍福が、偶然に起るやうに考へるのは、一つの妄想であつて、それには、整然とした原因結果があるのである。人は、それを看破するだけの、鋭い觀察眼がないのであると云ふ。——エマーソンは、運命論者として、また因果律の信者である。

天は、人の運命を彼の品性キャラクターの結果とする。そして、絶妙にも、よく人と運命とを一致せしめる——とエマーソンは云ふ。

各生物は、自己の境界を、自己の身中より産出するものである。蛞蝓がその粘泥のやうな家を、梨の葉に汗をもつて造りあげるやうに、また縮毛の呀虫が、林檎の上に自分の床を造り、貝虫が自分の殻を造るやうなものである。

戀愛はいかに狂態であるかを知る、しかし、その醜陋なる行爲も、天國の色彩をもつて描き出す力がある。年少時代には、吾々は燦爛たる虹霓をもつて自分の衣を造りあげる。そして勇敢に、天の主宮のやうに縦横する。が、老年になると、吾々はまたこれと異つた發汗をする。中風、熱病、リウマチス、變心、疑惑、癩癩、剛愎等は、吾々が老年になつて汗のやうに出すものである。



かうして、吾々の運命は、吾々の品性の結果に他ならないのである。

エマーソンは、人間の生活は、その各人の品性の結果であると云ふ。ここで品性と云ふのは、道徳的の意味ではなく、英語のキャラクターであつて、性質とか、特質とか云ふことである。エマーソンは、人生はその品性の映出であると云ふ。そしてその映出が、集積して、一つの都市を造り、一つの時代を造るのであると云ふ。彼が、英雄、偉人がその時代を代表すると云ふのは、ここに根據があるのである。

エマーソンは、人の品性が映出して、社會を造ると云ふ實證を、都會に例を取つてゐる。

都會には、一種特別の人物がある。そしてその都會を一身に代表してゐる。その人物の思想と事業とを見れば、その都會の耕作、生産、工場、銀行、教會、生活法、社交等が、一目瞭然と理解せられるものである。

マサチユセツ州に於ては、吾々は、ニウベッドフルドを建てたる人は誰であるかを知れる。リン、ラウエル、ラウレンス、クリントン——等を建てたる人はたれなるかが知れる。これらの人々は、むしろ歩行しつつある都會とでも見える。そしてかれらは、いかなるところにても、必

らず都會を建設するであらう。

歴史は、自然と思想——運命と自由——の原動反動である——とエマーソンは斷じてゐる。二人の少年が、路傍に相押し相争ふやうなものである。凡百の事物は、相推し、相推されるものである。物質と精神とは、始終、倒れんとしては起き、起きては倒れんとしてゐるものである。故に、人が弱ければ、地は人を制する。人がその思想と感情を扶植すると、忽ち地を制して、自己の思想の美しき秩序に照して、庭園を造り、自己の感情の豊かなる生産に考へて、葡萄園を作る。天地間に於ける各個の固形體は、精神が襲來すると、忽ち溶けて流動體にならうとする。これを溶し流す力の強弱は、則ち精神の優劣を量る尺度である。若し牆壁が頑強で、金剛石のやうであつたら、それは人心の薄弱を表はすものである。精妙なる心力に對しては、その頑強なる牆壁は、精神の品質を現はすべき種々なる新しい形に化現するであらう。都會も意志の表徴である。花崗石は山中より引き出された。鐵は地中から掘り出された。木材や、石灰や、果實や、護謨やかくの如き材料は、陸上に、海上に散在してゐたものであるが、人々はすべてこれらのものを掌握することができたのである。



全世界は物質が思想の電線に通じて四方に流れ走るやうなものである。地の兩極四極は勿論、凡そ精神なるものが建築しようとするいかなる處へも、滔々として奔到する。幾多の人種は、自己を支配する一種の思想を抱懷してこの哲理のために戦ふべく、敢然、武装して地より起き上つて來たものである。この思想は、埃及人と羅馬人とを區分した。澳斯太利亞人と亞米利加人とを甄別した——とエマーソンは云ふ。

が、彼は、同時代の人々は、その思想は、決して相違してゐるものではないと云ふ。眞理は空中に浮びつつあるのだと云ふ。そしてその最も敏感なる人が、まづそれを吐露するのであると云ふ。そして萬人は、すべてこれに次で唱道するものであると云ふ。

エマーソンの人生觀は、かうして、その結論に近づいて來る。人生は、織物のやうなものである。その織地には、絶妙な紛糾をしてゐる。が、その意匠は、絶妙な常住の形を現はしてゐるのである。吾々は、如何にして蠅が配遇者を看出すかに驚くであらう。が、吾々は年々歳々、二人の男、二人の女が、法律上の結婚もなく、または肉體よりの關係もなくて、目と鼻の間、僅か二三歩に離れ住んでゐて、壯年妙齡の大部分を空しく費しつつあるのを看出すではないか。その教

訓はかうである。「吾々が進んで求むれば、得られる。吾々が避けて逃げるものは、吾々を避けて逃げる。」と。

ゲーテは、「われらが少年時代に冀ふ佳物は、老年になつて幾多の推を爲して來り臨む」と云つてゐる。吾々の祈りが聽かれて却つて苦しむことが屢々ある。吾々は大覺悟をしなければならぬ。吾々の欲するものは與られるが故に、心して唯高尚なる事柄のみを願はねばならない。

人生の秘密を解く鍵は、たつた一つある——と、エマーソンは云ふ。そして運命、自由等の難問を解くには、唯だ二重意識を立てるにあると云ふ。二重意識とは何を云ふのであらうか、——エマーソンは、更らに例を擧げて云ふ。

人は、私的性質と、公的性質とに、交々乗らねばならない。恰かも、曲馬師が、甲から乙の馬へ迅速に飛び移るやうにしなければならぬ。或は、曲馬師が、甲の馬の脊に右足をたて乙の馬の脊に左足をたてるやうにしなければならぬ。

エマーソンの云ふのは、人生を曲馬師の如く考へよと云ふのではなくて、運命と自由の、二頭の馬に乗つて巧みな調和を取つて行く曲馬師の如き調和を、人生にも考へなければならぬと云ふ



のである。

人生には、二個の元素が巧みに並存してゐる、自然と靈魂——運命と自由である。そしてその調和と融合が、萬有の目的である。萬有は同根である。原告も被告もない。敵も味方もない。動物も遊星もない。食ふものも、食はれるものもない。すべては同一種である。

天文學上には、廣大無邊の空間はあるが、異質の系統のものはない。地質學上には廣大無邊の時間はあるが、古今一如である。吾々は、決して自然を懼れる必要はない。哲學と神學は互に體現したるものに他ならない。吾々は、天地と同一元素で成つてゐるものである。

エマーソンの宇宙人生論は、實にかくの如きものである。

彼の人生哲學は、謂ふ所の功利主義<sup>ユティリタリアニズム</sup>である。従つて、それは人生に於ける活教訓である。彼の人生哲學を、更らにここで批評するだけの余白がない。が、彼の人生觀は、他の多くの人の憂鬱なるに比べて、明るく、朗らかに、きわめて奮闘的、進撃的、そして樂觀的である。亞米利加の有する哲學者らしい氣分がいかにも濃厚である。そして、最も著名なる特色は、科學的

生物學的であると云ふことである。しかし、その歸着は、遂に唯心的目的論に終つてゐる。

彼は、人生終極の目的は、物質の衣と、その障礙を捨てて、意志を解放することであると云ふ、他の唯心論者と、同一の結論をしてゐる。そして現實に於けるあらゆる禍災は、すべて世界の、一つの大きな目的を達成するための手段であると觀てゐる。——吾々が、エマーソンに聽従すべきか否やは、また別個の問題に屬するものであらう。

エマーソンの哲學は、かうした人生方面ばかりではないが、それを説くのは本書の目的でな



第九講 マホメツト

- (一) マホメツト
- (二) 回教の成立
- (三) 回教の教義
- (四) 修行と律法
- (五) 聖雄主義

江原小彌太



## (一) マホメット

**回教** マホメットは亞刺比亞に生れた。そして世界の三大宗教の一たる回教ファイファイの開祖である。もし猶太人が舊約聖書に記された祖先を祖先に有するものならマホメットを産んだ亞刺比亞人は猶太人とその祖先を同じくしてゐることになる。故に舊約聖書に記された歴史の或部分までは兩民族が一にしてゐる。

舊約聖書の傳ふるところによれば、人間が唯一の神エホバの存在を忘れて手近の偶像を拜し、風俗を紊してゐるのを見たエホバ神は大に憤つて大洪水もつて全人類を滅してしまつたが、たゞ一人の敬神家ノアの一族だけを生き残さしめた。かくてノア一族が再び人類の祖先となつて繁殖をはじめた。

亞刺比亞に第一に移住した民族はこのノアの玄孫アツの子孫である。それからマホメットを産んだコレイシユ家といふのはイスマエルの後裔であつて、イスマエルといふのは猶太人の直系先祖アブラハムの息子である。



斯の如く猶太教ができた猶太人と回教のできた亞刺比亞人とがその先祖を同じくしてゐることは、また猶太教と回教とが或點に於て相通するところがあることを思はしめる。このやうに猶太

と亞刺比亞とが關係の密接なのは地理的に見ても當然であらねばならぬ。

當時の亞刺比亞は波斯、シリヤ、埃及の三大國の中に介在してゐるが、猶太國はその亞刺比亞

の北端にある何百分の一ぐらゐの小國でしかないので、たゞシリヤの一州に屬してゐるのだ。されば總ての點に於て亞刺比亞と猶太とは相影響し合つたものと見ねばならず、耶穌を知るには基督教を生んだ猶太教を知る必要があると同じく、マホメットを知るには回教を生んだ亞刺比亞の宗教を知る必要がある。

### 亞刺比亞

エホバ神の恩恵によつて生き残つたと謂はれたノア一族のアヅ族は亞刺比亞に來つて繁殖したが、時代を経るにしたがつてエホバ神への信仰は現世の歡樂のために忘れ去られるやうになつたので、豫言者へベルは彼等の墮落を救はうとしたけれど、彼等はそんなことに耳を貸さず、亞比刺亞の一都市メツカにある偶像カーバの神殿を拜し、四ヶ年にわたる大旱魃の雨乞

をしたりした。旱魃と暴風雨と大洪水などのため幾度か亞刺比亞に住む種族は滅亡した。これみな偶像を拜するが故の唯一神の責罰と謂はれた。

亞刺比亞人は曠野の兒である。彼等が一日の業を終へて、烈日にして天を仰ぐことの出来ない酷暑の晝は去つて漸く涼しき夜が來つた時、荒寥たる曠野の一角にたゞすんで初めて天空を仰ぎ見る際に、彼等をして驚嘆せしめるものは銀砂子のごとく満天に蒔きちらされた無数の星辰であらねばならぬ。彼等が心奥にひそむ或物はこの無心なるべき星辰の瞬きに何等かの神秘を感受しないでは置かないだらう。

こゝに於て星學は彼等の間に早くも著しい發達をなして、その星辰の觀測には獨創的のものがあつた。恒星を基とした二十八宿の星座を作つて、名づけるに彼等が地上に親める家畜獸蟲の名をもつてした。日本や支那で今も用ひてゐる獸類の名の星は多くは亞刺比亞人の命名したものである。

星學を作つて星學の一科學を生ぜしめる以前に、彼等の間には星辰を拜する自然物崇拜の原始的宗教の芽が萌え出した。それが單に星辰だけではなく、いろ／＼の地上の自然物にまで神格を



みとめて崇拜し、それを様々な偶像によつて表現して、次第に進歩したサビ教といふものを發達させて來た。

### ○ 彼等の宗教

彼等は無数の自然神の上にそれらを支配する主一權力の神サビがあるものと考へた。彼等はこのサビを神中の神とあがめ、もろくの神はサビの補佐であつて、サビの命令により各自がその分擔する職務に就いてゐる、かくて世界は神意の方向に進んでゐるものだと思はれた。

しかしサビだけは偶像に造られなかつたので、彼等は忘れがちであつて、偶像として祭られた恒星や惑星などの手近のものを拜した。その偶像の數は亞刺比亞の人間の數と同じぐらゐあつたと謂はれてゐる。

都市のメツカにあるカーバ神殿のごときは偶像の府で、ホバル神像を主座として三百六十個もあつたから祭典が毎日あるわけだ。このカーバ神殿はもとアブラハムの子イスマエルがエホバ神を祭るとして建てたものだ。主像のホバルはアブラハムの像であつたと信じられてゐる。偶像の中

にはノアが信仰してゐたので洪水の後に水底から拾ひ上げたものだと思はれてゐるものもある。

サビ教を生んだ彼等の宗教思想は、人間の肉體が死んだ後の靈魂は九千年のあひだ神の斷獄にあつて前生の罪業を消滅せしめて神聖なものになるため苛責される、その苛責の苦しみを軽くするため此世に於て禮拜、祈禱、斷食、巡禮などの修行を摘む。

マホメットの産れた西紀四五世紀の頃の亞刺比亞はサビ教のほかには猶太教も基督教も波斯教も入つてゐたし、また異端無宗教の徒もあつた。是等の無宗教の者でも一種の輪廻轉生の觀念を持つてゐて、死者の墓に死者が冥土の旅が樂にできるやうにとて一匹の駱駝を繋いで餓死するもかまはなかつた。

### ○ 當時の亞刺比亞

彼等には都市の住民と曠野の遊牧民との二種あつた。都市の住民は商業、牧畜耕作をなし、社會上にも政治上にも常に優勝の地位にあつて、文化も道德も比較的にかつたが、遊牧の民は今の滿洲の馬賊と同じやうなもので、悪事とは思はずに追剝や強盜をやつてゐる慍悍なる曠野の兒である。



彼等遊牧人は『吾等の祖イスマエルが父アブラハムに追はれてこの曠野に放浪するや、神から惠まれた彼れの財産は即ちこの曠野である。故に吾等の祖イスマエルはこの曠野によこたはる一切の物を取る権利を持つてゐた。吾等はその子である。この権利を行ふのは先祖への義務である』と氣焰をあげた。

都市の住民は漸く財寶に富み、衣食に飽くと共に奢侈の亂行と淫靡の惡風とに慣れ初め、一夫多妻となり、人身賣買が盛んとなり、各國から美姫を求めて宴樂淫行に耽り、亞刺比亞のオリンピヤたる詩朗讀會は青年男女の戀歌交換所とかはり、姦通と野合とは公然と行はれた。

マホメットの生家コレイン家の中興の祖コツセイは都市メツカの主長であつた。市廳をカーバ神殿の前に建て、その前庭を市政議事堂になし、人望と識見との備つた市民の議員が市政を議するところとし、自分はその議長となつた。また彼れは主長の憲法を制定した。一は市會の最終の決定權、二はカーバ神殿の鍵の保管權、即ち教權、三は警察と司法との權、四は市民及び巡禮者に用水の供給權、井戸はカーバ神殿のゼムゼム聖泉たゞ一つしかなかつたのだ、五は租稅、兵力、卜占の諸權などである。

コツセイの没後その長子が跡をついで主長となつたが、兄弟の權力爭奪のためその權力は兄弟と叔父との數人の手に分有された。その中でコツセイの孫にあたるハシエムは最初たゞ救貧稅の徵收權しかなかつたのが、第一の富豪であり仁慈の心が厚かつたせいで人望を得て事實上の市會議長になつた。

このハシエムが死んだ後はその權勢が弟のムクリブの手に歸した。ハシエムの遣した幼兒シヤイバはこの叔父に養育を托されたが、叔父から愛されず、虐待された。彼れはその悲惨の境遇の中に生長して遂に亡父のごとき人望を得て來たが、亡父のものであつた救貧稅の徵收權だけを受けて其他の職權はメツカ主長の名儀と共に數人に分掌せしめた。

彼れの惣領息子が若くして妻をのこして死んだ。妻アミナはその時に妊娠してゐた。彼女の胎内に宿つてゐるのはマホメットであつた。

○  
**マホメット** 豫言者となる彼れの母アミナはヅリー族の主長の娘である。西紀五百七十年八月、産れ出た彼れは亞刺比亞の習慣によつてメツカ郊外の曠野に天幕生活をしてゐる遊牧の民の



女に一時あづけられた。彼れが二歳の時に母アミナも死んでしまった。孤兒となつた彼れにはまだ祖父シャイバがゐたが、これもまた彼れが十歳の時に死んだのである。

祖父シャイバは臨終の時に、このコレイシユ家の嫡男マホメットを彼れの第三男に托したが、マホメットは叔父の家庭にあつても幸福ではなかつた。熱日のもとに幾度かメツカ市の補道の上をはだして走り使せねばならず、郊外で叔父の家畜を牧せねばならなかつた。養父はシリヤの諸地方に行商して、彼地の學者達が常に神を論じ合ひながら己れ自身は不安と不徳との中にある矛盾の生活を見聞し、文字を知る者の悲惨と愚劣さを感じたので、マホメットに決して學問のときものは授けず、たゞ商業上に必要な文字と數學の初步とを教へただけであつた。故にマホメットは無學の一駱駝飼でしかなかつた。

彼れは數奇にして孤獨な哀れむべき自分の境遇を見、自分の周圍の奢侈淫靡な廢頽した有様を見てつくづく人生を觀じないではゐられなかつた。メツカ市中いたるところに祭られた偶像を見て、一片の木、一塊の石に神性が宿つてゐることを疑はずにはゐられなかつた。彼れは神と人生とに疑惑をますます深く深めて行くやうになつた。彼れは養父が率ゐる隊商の群に投じてシリヤ地方

へ旅行した。この異邦の旅行は彼れに測り難い多くの人生を見せしめた。世態の醜惡を見、人生の悲哀を感じ、信仰の墮落を知り、神の存在を疑つた。しかしまた猶太人のエホバ神や基督教徒の神などを聞かされるに至つて、亞刺比亞の神々のやうに人が造つた木石の偶像以外に目には見えないが力ある生きた神のあることを知つたけれども、それがどんな神であるか、それを見得るまでに彼れの神性は未だ開かれる機が熟してゐなかつた。

二十五歳の時、彼れは同族中の富んだ寡婦カヂージャの手代となつて第二回のシリヤ貿易の旅に出た。彼れは大に儲けて無事にメツカ市へ歸つて來た。寡婦カヂージャは四十歳を越えてゐたが、彼れの非凡な商才と亞刺比亞男の曲型的の美貌とに心を動かされて結婚を申込んだ。彼れは彼女の第二の良人となつた。夫婦の中は普通以上の交情があつた。彼れの未だ現れない素質の何物かに彼女は畏敬して信賴するところがあり、彼れはまた後年に彼女を回教徒婦人の燈火であると宣したほどに彼女の美點を認めてゐた。

彼れは十五年間のうちに家は富み、市會の有力な一議員となり、四十歳に及んでコレイシユ家の第一の富豪と謂はれた。彼れは貧しき者や病める者を憐れんで私財を常に彼等に施した。筋骨



のたくましい身長六尺の男、日に焼けて黒けれど血氣のみなぎつた顔色、炯々として底光りのある鳶色の目、濃い長い鬚髯、太い眉と秀でた鼻、なかばタバーンに覆はれた廣く皺の深い額、堅く引締つた厚い唇、山のごとき兩肩を聳かしてメツカ市の舗道を歩む時、その颯爽たる英姿に畏敬の目をもつて見送らぬ者はなかつた。

しかし彼れの内心は懷疑と苦悶とに充ちてゐた。彼れの周囲は彼れの祖先達が創造した多くの神々がごろ／＼ころがつてゐるけれど、それはみんな木や石の斷片にしかすぎなかつたので、彼れの心を満足せしめる力を彼れは感じなかつた。されど彼れの渴仰する眞の神は未だその片影すら彼れに示されないので、彼れは憧憬の目を天の一方に向けるのみであつた。

## (二) 回教の成立

マホメットは忙しい家業の暇を伺ひ、煩雜な公務の隙を見て、メツカ市の近郊にあるヒラ山の岩窟の中に靜座してそこに眞の神に接しようとした。彼れは時に家族をともなふて行くこともあつた。四十歳になつた亞刺比亞曆の九

月の或夜のことである、例によつて彼れ一人、凄いまでに靜かな岩窟の内に端坐し、默想してゐた時、忽ち天空の聲を聞いた。

『宣べろ』

驚いて耳を傾けると、二度、三度、宣べろ、宣べろの聲が聞えた。

『何を宣べるのですか』と彼れは心の中で天の聲に問ひ返した。

『神にかはつて宣べろ』と天の聲の答があつた。

彼れは怪しみ恐れた。直に家に走り歸つて妻の膝に伏した。

『カデージャ、どうしたんだらう』と岩窟であつたことを告げた。

『神様はいつも私達を守つてゐらつしやいます、あなた、あなたはまだ人に悪いことをしません、神を畏れ、神を信じてゐます、私達は神様に感謝しなかりやなりません。あなたは神様に祝福されたのですよ、神様はあなたを豫言者として私達の前にお遣しになつたのでございますよ』と言つた。

妻カデージャはそれから伯父ワラカのところへ走つて其事を告げた。伯父ワラカは盲であつた



が、猶太語に通じ、猶太の神學に通じてゐた有名な學者であつた。彼れは姪カチー ज्याを勵まして言つた。

「お前の良人マホメットは世にも聖なる神の豫言者だ。彼れは嘗てモーゼが聞いたやうにエホバ神の御聲を聞いたのだ。彼れこそは吾が亞刺比亞の聖なる豫言者だ」

盲人のワラカはまた數日後に市中でマホメットに會つた時、見えない目で彼れを凝視して聲を勵まして言つた。

「マホメット、そなたは神の豫言者だ、そなたは疑ふことなく勇猛に神の道を宣べなけりやならぬ。しかし心の盲達はそなたの教に耳を傾げるかどうか、定めし彼等はそなたを偽豫言者と罵るだらう、そなたを迫害して追放するかも知れない。だが、そなたは神にかはつて誠の道を説かなけりやならぬ、心よわくしては駄目だ、しつかりしろ、豫言者よ」

彼れは此處に至つて自信がついた。先づ家族から近親へと唯一神の在ることを説いたので、彼等はぞく／＼と偶像を捨て、彼れの教の門に入つた。彼れの熱烈な布教は次第に人々の耳を傾けさせるやうになつたと同時に迫害を招くやうになつて來た。

コレイシユ家の主長アブソフィアンは市會議長でもあつてメツカ市の主權と教權とを握つてゐたから、マホメットの新宗教は自家の勢力位置を保護する上に於て絶対に禁止せねばならぬものであつた。また久しく偶像崇拜に慣されて、唯一の神があることを認めることの出来ない多くの市民達は彼れの布教を惡罵し妨害しないでは置かなかつた。コレイシユ家の者は不逞の徒を使勝して彼れの布教場を騒がせ、瓦石を投げつけて彼れを傷つけたりした。ラムダハ丘とバサ砂原とで日々に捕へられる回教徒が鞭うたれ、石を負されて酷熱の炎天にさらされたものだ。

彼れが布教の五年目には十八人の信者がエシオピヤのナジヤンに避難した。次に八十三人の男兒と十八人の婦女子の一團が同じく避難した。ナジヤンの主長は彼等の亡命者をよく遇した。コレイシユ家からは亡命者の引渡を要求したけれども、それを拒絶した。コレイシユ家の怒りはメツカ市に踏みとどまつて布教してゐるマホメットの一身に集まるやうになつた。しかしマホメットは彼等權門の一族であり、また彼れに同情してゐる一族もある。救貧税の徵收權と給水權とを持つてゐる養父は一方の權力者で猶ほ健在である。彼等は容易にマホメットを殺すわけには行かぬ。彼等は手を變へて、養父から彼れを説きさとして貰ふことにしたが、養父はそんなことをす



る氣もなかつたし、マホメットもそんなことに應ずる筈もなかつた。彼等はこんど叔父オトバをして説かしめた。

『もしお前が吾れ——古來の信仰に立ち歸るなら、おれ達はお前を選んで市會の議長としてメツカ市の主權を授け、また巨萬の富を贈るだらう』

『おれは富もいらぬ、名譽もいらぬ、王國もいらぬ、おれはたゞ唯一神が此世にくだされた使者として神の福音を宣べ傳へればよいのだ』と彼れは答へた。

彼れは或はヒラの岩窟にこもつて冥想し、またはカーバ神殿に參じて目に見えない唯一神に禮拜し祈禱した。伯父アブラヘブの妻のために岩窟は荆棘で蔽はれ、不逞の徒のために神殿は刀杖をもつて遮られたが、彼れは荆棘を拂ひ、刀杖を避けて岩窟の冥想とゼムゼム神泉の祈禱とは怠らなかつた。彼れの説教の聲はメツカ偶像の徒の嘲罵によつて妨げられたけれども、尙ほ外から來る巡禮商人等の耳を傾けしめた。そのためにコレイシユ族の迫害はこの巡禮商人にまで及んで彼等がメツカ市に入るや嚴重な監視をつけられてマホメットに近づくことを禁じられた。

オマルといふ男はコレイシユ族のためメツカ市民のため一身を犠牲にして彼れと刺し違つて死

なうと考へ、ゼムゼム靈泉の傍に祈禱をしてゐるマホメットに偃月刀を擬して迫つたが、『おれは全智全能の唯一神アラーがこの地上に遣はされた豫言者だ、貴様達はよくおれの言ふことを聞け、信する者は神その現世未來を護りたまふ。信じなければ信じなくてもいゝ、おれは我慢する、しかし神は不信者を厳しく審くだらう』といふ焰のやうなマホメットの聲に打たれて感激と恐怖に襲はれ、刀を投げ捨て『おゝ、豫言者よ、私を赦してください』と言つて彼れの忠僕となつた。

偶像の徒はマホメット立教の第七年に彼れの生家であり同情者であるハシエム、ムタレブの兩家に絶交を宣し、主長の權をもつて一般市民が兩家と交通することを禁止してしまつた。兩家の者はアブトリブに率ゐられ、マホメットを擁して東郊の山地シブに立て籠つて追撃に備へた。かうして三年の籠城の後に調停者があつて彼等はメツカ市に歸ることができたけれど、迫害は一そゝう猛烈なので、マホメットは養育された地タエに逃げたが、タエ市民のために矢張り嫌はれて市外に追つ拂はれてしまつた。

彼れはメツカ市の北西、ヤスレブ街道の路傍で説教をしてゐた。六人の巡禮者のヤスレブ人がそれに耳を傾けて直に彼れの教を信じた。翌年その六人は更に他の六人を誘ふて北郊の岩山アカ



バにゐる彼れのところへ来てその教に歸依した。

『私達はすべての偶像をこはします、盗みをしませんが、姦淫をしません、子供を殺しません、人を誣ひません、豫言者の教に従ひます。布教のために剣を執ることを辭しません』といふ誓約をなした。彼等が歸郷する時にマホメットは使徒マサザを一しよに遣はしてヤスレブ市の布教をさせた。マサザはその市の主長と族長と多くの市民を教化して翌年メツカ市に歸つて來た。

次の年には七十五人のヤスレブ人がアカバ山上のマホメットのところへ来て誓約をくり返して彼れにヤスレブ市への巡錫を乞ふた。彼れは猶ほメツカ市に踏みとどまつたが、信者をして三々五々夜陰にまぎれてメツカ市を立ちのかせてヤスレブ市に行かせた。メツカ市の選ばれた十數人の勇士が夜中ひそかに彼れの家を包圍したが、彼れの姿はいつのまにか見えなくなつた。彼等は騎馬によつてヤスレブ街に彼れを追跡した。マホメットは三日の間メツカ市の南方の岩崖に隠れてゐて間道からヤスレブ市へと落ちのびた。

この遁走日、西紀六百二十二年七月十五日をもつてヘジラ第一年とした。開教十三年である。これから左手にコーラン(聖典)、右手に破邪の劍の彼れの活動がはしまつた。

○  
ヤスレブ市はメツカ市の北方、六日旅程のところにある世界古代都市の一である。マホメットはこの市をメジナと改稱し、先づ禮拜堂を建て、それを自分の住居にもあてた。市民から十二人の委員を選んで各自に行政を分擔せしめ、また市民に賦役と納税との二大義務を承認させた。使を四隣の猶太諸族に派して和親を協定し、力を専らメツカ市征討にそぐことにした。

メツカ市では彼れの盛んにならぬ前にとて一千の軍勢をもつて征討軍を向けた。これ聞いたマホメットは三百人を率ゐて邀へ討つた。宗教的信念に燃えたメジナ軍はその勢あたるべからずであつた。メツカ軍はさんぐな目に遭つて逃げて行つた。回教徒の信する耳目には、マホメットが陣頭に立つて手に小石をとつて『敵の備へ先づ亂るべし』と叫んで小石を投げると敵陣は闘はないうちに崩れ、次いで天使ガブリエルが三千の天軍をもつて來り助けたと云ふ奇蹟的の幻覺が起つた。マホメットは戦利品の處分をした。

『戦つて分捕つた物はみんなおれ達の共産である、その五分の一は聖戰の資に蓄へ、その他は神意による主將の處分にまかす』といふことを宣言して、五分の四を諸勇士に分け與へた。また彼



れは「戦争が済んでも敵を見つけ次第に殺してしまへ、けれども降参する者は厚く待遇しろ、必ず教に耳を傾ける時があるから」と言った。

彼れは此時に老いた妻が死んでゐなかつたので、彼れの使徒アリの娘を妻に娶つた。ヘジラ第七年に回教徒になることを埃及に勧告した時、埃及の太守が寶物を彼れに贈つたことがあつたが其時に二人の娘をも贈つた。妹娘は彼れの寵を大に受けた。

ヘジラ八年に彼れはメツカ市にむかつて最後の征討軍を出してメツカ市を回教徒の手に歸せしめてしまつた。彼れの権力は全アラビヤに及んだ。ヘジラ十年に彼れはアラビヤ全人民の教主となり、アラビヤ帝國の皇帝となつた。彼れは自分の肉體の生命が最期に近づいたのを知つてメジナ市からメツカ市へ現世辭別の巡禮の途に上つた。従ふ信者十四萬と録された。巡禮の式が済むと、彼れはアララット山上に信徒を集めて最後の説教をした。それから天を仰いで「神よ、私の使命は果されました、私の務めは盡されました」と言った。また彼れは「教徒達よ、お前達に對して不正なことが私にあるなら告げる、おれはお前に詫びるだらう。お前達に借金があるなら聞かせる、おれは直に返すだらう」と言った、かくて彼れはヘジラの十一年、西紀六百三十二年六月に死んだ。最期の山上の説教。

『お前達、おれの言ふことを聞け、おれは今後もうお前達に逢ふ機會はない、しかしお前達はお前達の聖なる神を見ることが出来る。忘れるな、神は常にお前達に正しきを求め、常にお前達の生命と財産とをまもり、相互に犯すことがないやうにし給ふ。お前達よ、お前達の妻女の上に力あれ、お前達の妻女はお前達の上に力あれ、愛情と親切をもつて遇せ。お前達よ、忠實なれ、不正をなすな、高利を食ふな、負債者は元金だけを返せ、血をもつて報いるな、血の格闘は慎しめ、奴隸にはお前達と同じものを給與し、彼等に過失があつても苛責するな。お前達よ、回教徒は大同胞の團體である。お前達の物はまたお前達の兄弟のものだ。兄弟の物を犯してはならぬ。お前達よ、今日こゝにゐない兄弟におれの言葉を傳へろ』

### (三) 回教の教義

**猶太教の神** エホバはもとセム民族のケニ族が祭つた神の一つで、モーゼがケニ人エトロから傳承したものと謂はれてゐる。舊約聖書の出埃及記に「シナイ山は煙を出し、エホバは火の



中にありて其上にくだり給ふ。雷と電と密雲とは山の上にあり、煙は竈の煙のごとく立ち上りて山はすべて震ひたり」と、エホバはシナイ山上の雷電の神で、一度エホバがモーゼに顯現してから猶太民族の守護神となつたが、猶太民族は尙ほエホバ以外の諸神をも信仰し、偶像をも拜してゐる者があつた。しかし猶太民族がシナイ半島の地の遊牧生活からカナンの地の農業生活に土着してからは自然現象のエホバ神は完全に猶太民族の守護神となつて、耶蘇が後年に至つて出現したのである。

### 回教の神

マホメットの神アラは即ちこの猶太教の神エホバから來てゐるのだ。アラは猶太語エロア即ち、戦慄、畏懼の意であるとのことだ。また猶太のエル、或はバビロニヤのイルと同じく、單に神といふ義でしかないので、古くから亞刺比亞の各部落で崇拜されてゐた劣等な自然神の普通名詞であつて、マホメットがそれらの各神を悉く統一して唯一神アラとしたのだとも謂ふ。

猶太教のエホバが全然その國民の獨占の神であるに反して、回教のアラ神は亞刺比亞人を主とはするが稍々世界的普遍的のものとなつてゐることは、基督教の主神となつたエホバのごとく

である。しかしその性質は基督教の愛の神エホバでなくて、猶太教の雷電の神エホバに似てゐる。共に宇宙萬物の創造主、全智全能にして最終の審判者、仁慈にして人類の保護者ではあるが、アラはたゞ回教徒に戦々兢兢として畏敬されてゐる嚴父のごとくに思はれてゐる。

アラと人間との位置は絶對に隔絶してゐる。故に兩者の間を媒介する何か必要である。基督教には基督と聖靈とがあるが、アラには天使の存在がコーランによつて記らされてゐる。天使は神が火で造つたもので絶對に清淨で精巧であつて、吞まず食はず、不老不死、性の差別もないから生殖もしない、その形態はいろいろあつてその受持の職務によつて區別がある。諸種の姿勢をもつてアラを欽仰し莊嚴するもの、神を謠ひつゝ讚美するもの、人間界の出來事を記録するもの、人間に代つて神に傳奏するもの、神の左右にゐて神の用を勤めるものである。是等は猶太から來た思想であるらしい。

また天使のほかにも惡魔エブリスがある。コーランの説くところによると、もとは神の侍従の天使であつたが、神の命に背いたので墮落して惡魔となつたものだ。けれどもこの惡魔は基督教の惡魔とはちがつて人間には何んの交渉もない。たゞ神は天使に對してすらもその罪を處罰なさる



といふ、人間に對しての見せしめの役に立つだけのものだ。

天使と惡魔との中間にまだゲニイといふものがある。これは猶太思想のシェデーイン（妖魔）から來たものらしく、コーランの説くところによれば、矢張り神が火で造つたものであるが、天使よりも粗末に造られて、彼等は食をとらねばならず、老死もあり、兩性生殖の必要もある。アラビヤンナイトの中に出て來る不可思議を演ずる役者は即ちこのゲニイである。マホメットはコーランの中に『おれは人間とゲニイを教化するために神から遣はされたものだ』と言つてゐる。

○

### 豫言者

マホメットは神アラーによつて遣はされた豫言者であるとされてゐる。しかし彼れは豫言者と共に基督教に於ける耶蘇基督の地位にもゐる。豫言者なるものはマホメット以前に二十萬四千人以上も此世に遣されたといはれてある。この多くの豫言者の中で眞に神の言葉を傳へる宗教的使命をもつて遣されたものは三百十三人であるが、其中にもアダム、ノア、アブラハム、モーゼ、耶蘇、マホメットの六人が主なるものと、コーランには説かれてある。コーランの記するところによれば、經典一百四のうち十典はアダムに、五十典はセスに、三十典はエノに、十典

はアブラハムに授けられ、残りの四典はモーゼ、ダビテ、耶蘇、マホメットに各々一經典づゝ授けられたもので、其内コーランは實に最後の經典であつて、今後は如何なることがあつても此種の經典は絶対に神授されることがない、故に神アラーは最後にマホメットを此世に遣したまふたのだと稱してゐる。

### 宇宙の組織

マホメットの説く世界は地球でなくて地平であり、宇宙は幾層かの層になつてゐて、人間の住む世界層は四周をカーフ山脈がとりまいてゐる一大盆地である。最上層のアラスは聖火に燃える神の世界で、その次の層が水晶のごとく透明な世界であつて最終の審判が開かれる神座のあるところだ。それから下の層は光榮の世界、安息の世界、鏡の世界、不老境界、歡樂境界、天の樂園界、久遠の樂園界など、次々にあつて、この九層の天上界の下に七層の空界があり、その下が七層の地上界で、人類が棲息してゐるのは地上界七層の最上層であるのだ。

人間の地平界を圍んでゐるカーフ山脈の東には「曉の泉」があつて、太陽が毎朝三百六十人の天使が棹さす「日の舟」に乗つて泉を發して空界に上り、空海の「虹の海」を西に航して「夕暮の井戸」の中に没する。夕暮の井戸は非常な高熱の湯の泉であつて、番人の巨人魔が大海から魚をつ



まみ上げ、この井戸の湯で煮て太陽一行に饗する。夕暮の井戸に没した太陽は其日のことを神に報告し、天の安息世界で次の日の航海まで休む。其間の夜は月が太陽に代つて空界を航海するのである。また天空の無数の星は上天第二層の天井に懸けられた神祕の燈火であつて、雷は天使の私語であり、日月の蝕は虹の海に住む海蛇の仕業である。地球地動の科學を知つてゐながらこの地平説を一しよに信じてゐる者がある。

### 死後の生命

人間が死んで墳墓によこたへられると、死の天使アツラエルが来てその死を承認し、やがて試問の天使の來ることを告げて去る。次に二箇の試問の天使が来て、神アラーに對する信仰と豫言者マホメットに對する敬仰とを尋問する。正信の死人は平和の中に安堵させられるが、不信の死人は天使から鐵の矛をもつて頭をひどく突かれる。不信者は其上に七頭の惡龍や蝎やいろ／＼の毒虫に化身して最終の審判の日に再生するまで苦惱の生を送らねばならぬ。この墓中尋問とそのために水葬火葬を禁じてゐることの思想は猶太から來たものだ。

尋問の後は死の天使アツラエルが再び来て死人の靈と肉とを分離し、不信者の靈は毒虫に宿つて畜生道に入るが、正信者の靈は他の二つの天使に扶持されて上天の神の御座を拜し、下つて何處

か安穩な安息所に最終日の審判の時まで安息する。是等は基督教とよく似てゐる。靈と分離した肉體は次第に土に歸するのであるが、たゞアチブといふ薦骨だけは最終の審判の日の來るまで人間の種子として残るのだ。この薦骨は神が最初に人間を造る時に先づ初めに造つたものであると信ぜられてゐる。世界最終の日に神は四十日間にわたる雨を降らせてこの骨から人間の芽を萌え出させるのださうだ。

### 最終の審判

世界の終りには生物は悉く死んでしまふ。神は審判の座に威儀をたゞして立ち、會て生きてゐた者をその死の眠りから蘇生させて峻嚴の審判を行ふのである。これもまた猶太教や基督教と共に同一の思想から産れたものだ。

この最終の審判の日が幾年後に來るものか、マホメットはその期日に就て天使ガブリエルに質問した。しかしこの質問に對してはさすがの神の秘書官長ガブリエルも答へることができなかつた。神ひとりそれを知つてゐるのである。その最終の日の來る時の有様は基督教のヨハネ黙示録に似たところがコーランに記されてある。

最終の審判の後、斷罪された亡者共はその極樂行のものも地獄行のものも一度はみんなシラと



いふ細い丸木橋を渡らなければならぬ。それから極樂へ行くものは左へまがり、地獄へ行くものは右へまがるのだ。

### 地獄と極樂

その地獄は七段に別れてゐる。第一は回教徒の不善のものが落ちるところ、第二は猶太教徒の落ちるところ、第三は基督教徒の落ちるところ、第四はサビ教徒の落ちるところ、第五は波斯教徒の落ちるところ、第六は偶像禮拜の徒が落ちるところ、第七は最重苦惱の地獄であつて、表にアラ一の信仰を装つてゐる偽善の徒が落ちるところだ。その地獄の苦痛には「地獄は各々大寒と大暑あり、悪人は永久に苦痛を受くる」とか「水を求むれども與へられず、煙を吸ひ、焰を呑み、身は常に燃えてその苦いふべからず」とか、また「大寒の風は吹きて肌を裂き、骨を凍らせ、氷りたる碧血はほどばしり出づ」などくらゐで、印度人よりは想像が貧弱である。

第七天の下に極樂がある。最上の小麥粉をもつて地を敷き、紅白の花をもつて飾り、建物の壁は黄金と白銀や珠玉寶石をもつて塗られ、樹の幹や枝は黄金、その葉は悉く白金にて光り輝き、香氣ある花は四時にその美を競ひ、幸福の樹ツバには柘榴、葡萄、夏目棕櫚、その他の美果が枝から低く垂れて、食はんと欲する者の口から自ら入る。肉を欲すれば鳥肉、獸肉、魚肉、望むがま

ゝに調理して運ばれる。生命の川カウザルは或は乳、或は酒、或は蜜など、人が呑みたいと思ふ一切の飲料を湛へて、酒は呑めども頭を害さず、着物は絹に金糸銀糸、珠玉をちりばめる。清麗、豊艶、妍美の天女七十二人はその妻女となり、八萬の奴僕と美少年とは常に侍して用を辨す。是等は釋迦の想像と相似てゐる。また女に對しては「醜婦は美人となり、老婦は妙齡の女となつて極樂に入る」と言つてゐる。マホメツトが釋迦と違ふところは精神上の安樂を説いてゐないところである。

### 運命説

人間が現世に於ける善惡、幸不幸など、いろ／＼の人事は一つとして神意によらないものはなく、神は實にその一切を豫め定めて神の豫録に明記してゐるが、人間には毫もそれを豫知せしめない。基督教の「神の攝理」と稍々似てゐる。人間は定められた運命のもとに生れ、長じ、働き、やがて死し、試問の天使によつて來世の運命が定められる。マホメツトは「お前達はどんなに利口でも未來を知ることにはできない、お前達の未來はたゞ神だけが知つてゐる、お前達の努力は少しもお前達の未來を轉ずるに機能はない、お前達よ、たゞ運命にしたがつて未來の幸福を神に祈れ」と言つてゐる。即ち宿命説である。



#### (四) 修行と律法

**五箇の信條** マホメットが定め 信條、第一は無始無終の唯一至上神アラ一の信仰、第二は一日五回以上の祈禱と禮拜、第三は回教曆九月の一ヶ月間の齋食、第四は聖地メッカへの巡禮、第五は神のために敬虔な信者への喜捨である。第一のアラーの信仰は理論的方面の信仰であつて第二から五までは實行的方面の修行である。

猶太教、基督教のごとくマホメット開教の目的は偶像破壊である。たゞ神アラ一に對して祈禱と禮拜とをなす、これが彼等の修行第一である。人間は感覺 觸れないものは忘れがちであつて、信仰もとかく偶像へ流れ易く、見えない神は見捨てられる、そこでマホメットはそれを毎日わすれぬために祈禱と禮拜とを一日に五回もしると言つたのだ。彼れは「祈禱は宗教の柱にして天國の鍵なり」と言つてゐる。

**清淨と割禮** 『すべて宗教の修行は清淨を初めとせねばならぬ、祈禱の鍵は實に清淨そのものである、清淨ならぬ者の祈禱は決して神に聞かれない』とマホメットは言つた。祈禱禮拜するに

は先づ身心を清淨にする。その方法は冷水で全身を洗ふのと顔手足を洗ふのと二つある。全身の沐浴齋戒はゴスルと言つて、これは死屍に近づいた場合、送葬した場合、交媾した場合、その他に手淫、鶏姦、夢精及び性慾的行爲や衝動のあつた場合に行はれるもので、祈禱禮拜や讀經また自家の業務をとる場合には略して顔手足だけを普通は洗つてゐる。この沐浴洗淨の齋戒法は猶太より傳へられたものだ。

割禮といふのは、男の兒は陰莖の包皮を、女の兒は陰唇の一部分を切斷するもので、猶太から傳へられたものだが、初めから宗教的の意味があつたのではなく、男の割禮は女子の歡びを買はんがためであつて、今でも南洋ポリネオ方面ではその目的から實行されてゐる。宗教的の割禮の初めは猶太人で、舊約聖書に『婦女もし種を宿して男子を生み、第八日に至らば嬰兒の前の皮を切るべし』と制定されてある。マホメットはこれを汚穢を喫つて清淨を期する一方法となしたもので、それは包皮は不潔をとまなふからである。また手淫を誘發せしめるものだ。

身體をいろ／＼の意味に於て清淨にして祈禱禮拜をなすには非常な繁雜と嚴格な規定とが遵法された。また齋食によつてそれ以上の修行が行はれた。腹及び肉體の各部を貪慾の惡徳から清淨



にするため、耳目舌鼻などの感覺器官を食物の汚れから清淨にするため、俗心を法心にむかはしめ、想念を神のほかの一切の俗事から斷つため、回教曆第九月の新月の夜から次の新月の夜まで三十日間、齋食の式が行はれる。この期間は生殖行爲や死屍から遠ざかり、飲食を斷ち、香を嗅がず、灌腸や注射で腸から汚物を出すといふやうな極端なものであるが、それは日中だけのことで、日没後は飲食も交媾も自由である。

聖地メツカの巡禮に就ては『メツカに巡禮しないで死んだものは猶太教徒や基督教徒の死と同じ』とコーランに言つてあるほど嚴重に勵行される。巡禮はたゞ善男善女が信州の善光寺様をお参りすると違つて非常の難行苦行をもつて行はれるのである。

また喜捨については『人は祈禱によつて極樂の中途まで達し、齋食によつて極樂の門前まで到り、喜捨によつて初めてその門内に入ることが出来る』と謂はれてある。如何に敬虔な信者が祈禱、禮拜、齋食、巡禮の修行をしたとて、喜捨をしなければ來世は大寒大暑の地獄に苦しまねばならぬことになつてゐる。この喜捨は宗教的の租税であつて、猶太教が所得の十分一税を課したやうにマホメットもこれを用ひたが、本來の喜捨なるものは任意であるべきなので、回教に於て

は自由喜捨と義務喜捨との二種に分けられてある。

○

**一夫四妻主義** 回教の律法に於て夫婦は一夫四妻と定められてある。當時は各地がみんな一夫多妻であつたので、マホメットはその風習を改善したつもりから一夫四妻と定めたのだ。しかし『男にして妻の各々に同じ衣を供し、同じ食を供し、偏らない愛を一様に與へられる者だけが四妻まで女を娶ることが出来る』といふ條件をつけた。

女を奴隷のごとく見なした當時にあつては彼れの規定は大なる改善であつて『男は常に女に優れり、神は實に斯く造りたまへり』と言つてゐる一方に『夫は妻の衣裝なり、妻は夫の衣裝なり』と夫妻を同等に見、また『天國は母の脚下にあり』と基督が『幼兒のごとくならなければ天國に入ることができない』といふかはりに母性を稱讚してゐる。けれどもマホメットが『右の手に得たる女は各自の能力に應じて多數を蓄ふることを得』と言つて、右手に劍をとつて闘つた結果、戦利品の婦女を妾にしたことの弊風が回教徒をして一夫多妻を默認するやうになつて來た。

**マホメットの閨房** 彼れは二十五歳で四十歳以上の寡婦カヂーシャと婚し、五十五歳の時に



彼女を喪つた。この血氣さかんな三十年のあひだ六七十歳の妻を持ちながら實に一夫一妻ですこしたのだ。尤も妻カチージャが彼れの主であつて妻でも権力は彼れの上にあつたにもよらうが、彼女は開教第一の彼れの信者となり、彼れが彼女に拂ふ愛情は深いものであつて、如何に美しい妻を他に得ようとも彼女を彼等と同等に遇してゐることができないと思つたので、妻カチージャ一人で満足してゐたのであらう。しかし如何に敬愛する女にしても敬愛と情欲とは別物であるから、彼れが他に女を欲したことは事實であつたらうが、それにしても老妻一人のほかに妻を持たなかつたことはそれが妻帯觀の理想であつたものと思はれる。

老妻の死んだ翌年、五十六歳で信徒の一寡婦を第二の妻としたが、彼女は間もなく病死したので、使徒の娘を第三の妻に迎へた。けれども其時の彼れの年齢は五十九歳で、彼女の年齢は七歳であつたところから見れば、夫妻たるの關係も無意味のものであつたらう。故に幼妻のほかに二人の女を妻にしなければならなかつた。かくて彼れは四人の妻を持つて彼女等を平等に待遇したわけであるが、その他に戦争で手に入れた數人の妾を持つた。しかし是等は布教の方便や宣教の政策として止むを得なかつたのかも知れぬから、直に全部それを彼れの性的要求と見なし、また

妻帯觀と見なすわけには行かない。

### 近親結婚と離婚

古代から亞刺比亞では父の死んだ後、父の妻を直に息子が受けついでたものだが、マホメットはこれを禁止した。また異教徒との結婚も禁じたが、これはいつの間にか破られた。離婚については『汝等その妻を去らんとする、先づ再三再四熟考すべし』とか『汝等三度その妻を去る時はその妻が再婚して再び離婚されるまで第四の妻を娶ること能はず』とか言つて多少の制裁を加へてある。妻が不法であつて主婦の品格を保ち得ない場合、良人が充分に妻を扶養し得ない場合、夫妻のいづれかゞ交媾の義務を怠つた場合、いづれの一方かで性交不能の場合、離婚を正當と見たのは基督教よりも寛であつて、日本の女大學の片務的に比して公平である。また『女が離婚された時は三たび月經があるまで再婚を待つべし』などは生兒の紛擾を防いだ用意周到のやり方である。もし妊娠してゐる場合は子供を産んで二歳になるまで哺乳の義務を果す間は先夫の家にとまつてゐねばならぬ。死別した場合もこれに準じてゐる。

### 家督財産の相續

家督及び財産の相續は必ず家長または財産所有者が死ななければ發生しないが、近親者が横暴であつて、その遺孤や寡婦に財産を分け與へないで横領することが普通で



あつたので、マホメットは原則としては遺産分配主義であるけれども、もし遺孤や寡婦がその遺産の全部を受けなければ生活して行かない場合にはその全部を相続して、近親者への分配を拒むだけの優越権を持つてゐることを認めた。

家督相続は今日の日本のと變らないが、死者の遺言が家族以外の者を家督相続者に指定することを禁じ、遺産分配を救貧事業のほか近親者以外のものに及ぶことを禁じてゐる。遺言は二人の同族男子を證人としなければ効力がない。

奴隸を財産の一部と見なしてゐたこともマホメットは禁じた。妻カヂージャが彼れに贈つた奴隸を彼れは自由民となした。

**賣淫と姦通** マホメットは賣淫と姦通とを厳しく禁じ、その斷罪は峻酷である。淫を賣つた女は未婚なると既婚なるとを問はず一様に終身禁獄の刑に處した。しかし糺斷するにあつては無實の罪を着せられることのないやうに回教徒の男四人の神聖な證言によることになつてゐる。

姦通は日本のごとく片務的ではなくて、男女とも同罪で百杖の笞刑に處せられることは日本よりも進歩してゐる。良人で妻の貞操を疑つてその不貞を告訴した時、たとひ充分な顯證を缺いてゐ

ても、四度も告訴をくりかへして妻の不貞を訴へ、五たび妻の背倫に復讐することを誓約するならば妻が良人の告訴及び復讐の誓約に對抗して神に無實を訴へることができず、良人の不實を神に愁訴することができない場合、妻の犯行は斷ぜられ、妻が無實の告訴に對抗する誓約ができた場合には妻は無罪を宣告される。しかし夫婦の關係はいづれにしてもそれで消滅する。

下婢の犯行は普通の婦女の半分であるが、普通の女でも月經の時は半分に減刑されることは驚くべく進歩した法律である。

**處置法** 猶太の「手にて手を償へ、目にて目を償へ」といふ報復的の犯罪處罰を受けついで回教の犯罪處罰は甚だ峻嚴なもので、泥棒は初犯は左の手の手首、再犯は右足の踵、三犯は右手、四犯は左足を切斷される。もし猶ほ犯を重ねれば判官の任意の極刑を課せられる。

しかるに殺人殺傷はそれに比して寛大である。マホメットは殺人殺傷を一般の泥棒と同様な見方をしてゐる。即ち殺人も人命や生理的自由の一部を盗んだものと解釋して、賠償によつて濟まされたもので、人間一人の生命は駱駝百頭に價してゐる。もし百頭の駱駝を贈ふことのできない者は僧侶の嚴重な監視のもとで二ヶ月間の斷食をさせられる。



**飲食** 猶太教のやうに煩瑣なものではないけれど猶太の精神を直傳して異様に窮屈なものがある。酒を呑むことは禁ぜられてあるが、酔はぬ程度の少量は差支へない。生血、豚肉、老衰死の鳥獸肉、偶像の犠牲に屠られた生肉、鬭争して死んだ鳥獸肉などの食用を禁じてゐるところは猶太教に似てゐる。

**ト占と魔法** マホメットはト占を迷信として禁じた。魔法も禁じたけれども、神に關係したことでない場合には黙認されてゐる。

### (五) 聖雄主義

耶蘇が最後にエルサレムへ驢馬に乗つて、勝利の象徴たる棕櫚の葉を路上に敷きながら市民が「ホザナよ、來れり」と歡呼の聲をもつて迎へた中を宮殿さして登つた時、神殿内の商人を追拂ふとて持つた繩の鞭のかはりに劍をとつて、市民に「汝等よ、吾れに従へ。偽善者なる學者とパリサイの徒をこのエルサレムから追拂つて、羅馬の軍隊をこのパレスチナから追放しろ。吾れは神の國を建てんがために父なる神より遣はされたものだ。さあ、劍をとつて吾れに従へ」と絶叫した。

たらばどうであつたららう。

彼れの使徒たるペテロ、ヨハネ等は彼れに如何なる救世主を求めてゐたか、猶太民族は如何なる救世主を待ち望んでゐたか、それはマホメットのごとき聖雄の救世主を彼等は要求してゐたのである。しかるにナザレの耶蘇は却つて偽善者なる學者とパリサイの徒のために、國民を虐げてゐる羅馬の執政者のために十字架にかけられた。故に彼れを信じた市民は四散し、彼れに従つた使徒は失望して姿を隠した。使徒達はその後彼れの本旨を了解して基督教を建設したが、一般の猶太人は彼等の要求する聖雄の降臨することを他に待ち望んだ。彼等が待ち望んだ聖雄は六百年後にやうやく現れたのである。しかしそれはパレスチナに於てなく、亞刺比亞の野であつたために哀れむべき猶太人は今日に至るまで聖雄を見ずに世界を放浪してゐねばならぬ。

劍戟のごときエホバを祖神とするアブラハムの支流たる亞刺比亞民族の中から生れたマホメットがエホバに似たアラの神を造り出したことは當然であつて、また自分の信仰をひろめるため、自分と自分の一族と信者との生命を全うするためには周圍の事情が彼れをして左手にコーラン、右手に劍戟を持たしめなくてはならなかつた。しかし同じ宗教母體を持ち、同じ國情と事情との



中であつて耶蘇は劍戟をとらずに兩手に「愛」をさゝげて十字架に倒れた。兩者がこの相違を來して反對の道に進んだのは一に彼等が性格と人生觀とを異にしてゐるためである。

耶蘇を理想家と稱するならばマホメットは實際家であつた。耶蘇を病的とするならばマホメットは健康であつた。耶蘇を惱める人とするならばマホメットは勇往邁進の人であつた。耶蘇がたゞ人間を見てゐたものとするならばマホメットは當代の亞刺比亞人を見てゐた。耶蘇が「人はパンのみにて生きるものに非ず、神の言葉によつて生く」といふことを極端にすゝめて「汝等まづ神の國とその正しきを求めよ、しからば其他のものはみな汝等に與へらるべし」と言つて、金と武力とを捨て、神の愛のみにむかつて突進したものとすれば、マホメットは人生を神と金と力とに待つべきものとしたのである。

耶蘇は神の國を得るためには人生を犠牲にしたのである。足をのせる國土はなくとも、身を入れる家はなくとも、親妻子はなくとも、餓え渴くとも、神の國を得るためには悲しとはしない。マホメットは未來は天上界に住むことは定つてゐてそれを望んでゐることは勿論であるけれども、神の設定によつて此世に産れて來たかぎりはこの人生に於て最もよく生きんがために、コイ

ランと武力と財寶とを求めた。なぜなれば人生は正義と財寶とが必ず必要であつて、それを獲得し保存するには武力によらなければならぬと人生を觀じたからである。

○

耶蘇は「神のものは神に返せ、カイザルのものはカイザルに返せ」と言つて、猶太の祭政一致の傳統を破つた。基督教が世界的になつたのにはそれが有力の原因をなしてゐる。マホメットはその傳統を踏襲して祭政一致をもつて進んだ。故に左手にコーラン、右手に劍といふわけで、布教されて神の國となるところ即ちマホメットの王國であつた。宗教は思想を束縛する、吾れ／＼は思想の自由を欲する、故に祭政一致の國に住むことを欲しない。日本は祭政一致の國ではない、吾れ／＼は悦ばねばならぬ。しかしほんたうは祭政一致ではないだらうか、日本固有の宗教「神道」がある、これが嚴として吾れ／＼の頭上に懸かつてゐて、祭政一致の實質を備へてゐる。吾れ／＼には眞の思想の自由はない。けれども兎に角、日本その他の諸文明國は猶太教や回教でないだけ祭政一致の國ではなく、また猶太教と回教とが祭政一致の宗教なるが故に日本及び諸文明國の宗教となる可能性を缺いてゐるわけである。



しかしながら理想家たる耶蘇が見た人生とちがつて實人生は「神の國」のみを得てゐることが決して幸福ではなく、否、幸不幸よりも前に此世に生きてゐられない、即ち本尊の人生そのものが無くなつてしまふ。『まづ神の國を得よ、しからは其他のものは與へらるべし』とは云へど、決して其他のものは與へられず、代つて與へられるものは人生の終焉である。人間は神の國とパンとを同時に得るか、まづパンを得なければ人生はその人に無いものだ。他の人間は耶蘇よりも其事をよく知つてゐる。たとひ基督教を國教としてゐる國の政府も國民も其事はよく知つてゐる。故に事實に於て矢張りマホメツトのごとく左手に聖書、右手にも聖書と表面は見せかけてゐても實はひそかに右手に劍と軍艦とを持つて進んで來た。今日の大強國はみんなそれだ。印度、印度支那、濠州、ヒリツピン、亞弗利加、南米、アラスカ等は悉く『左手に聖書、右手に軍艦』の賜物である。

勇猛な獅子や虎が地球上に数が少なく、最も貧弱なる人間のために捕へられて動物園に監禁されるやうになつたのは如何なるわけか、彼等は世界の生物の王とならんがためその爪牙を發達せしめた。大なる齒牙を養ふには大なる顎骨の必要がある。大なる顎骨を養ふには大なる頭部の必

要がある。大なる頭部を養ふには大なる食物の必要がある。かくて彼等は爪牙のために生きるやうになつて、其他の發達がとゞまり、生理的には均衡を失つて來たので、巨大な獸類は次第にこの地球上から姿を失ふに至つたのだ、人間がこの地球上に覇をなすに至つたのは、一切を脱して裸體となつて、豺狼の齒牙の代りに刀劍を有し、千里を走る虎の脚の代りに汽車、自動車を有し、大海を渡る鯨の鰭の代りに軍艦汽船を有し、大鵬の翅の代りに飛行機を有し、不必要の時には納庫に入れ、必要の時には出して用ひること、獅子や虎のやうに年百年中それを體の中に背負つて歩かない經濟的などところに原因があるのだ。

マホメツトは正直にも左手にコーラン、右手に劍を持つてその一生涯を通したが、利口な基督教國は左手に聖書の必要のある時には左手にそれをかさし、劍と軍艦との必要の時には聖書をポケットに隠して右手に劍をひらめかしたから、其他のことも發達し、地上に覇をなすに至つたのである。

○  
基督教國がその教祖耶蘇のごとく『神の國をまづ得よ、しからは其他のものは與へらるべし』



を正直に守つてゐたならば國土もなくなり、人生もなくなつてしまつたのだ。耶穌は「劍に立つ者は劍にて滅ぶ」と言つたが、劍に立つ者はそれでも滅ぶ時までには立つてゐる、劍に立たざる者は最初から立つことが出来ないのである。彼れは「富める者の天國に入るは駱駝が針の穴をとほるよりも難し」と言つたが、貧しい者や弱い者は天國へでも行かなければ仕方がないのであつて、富める者は天國へ行かなくとも、富と力を持つて地上に既に天國を持つてゐるのだ。

如何に富んでも心に幸福はない、如何に力があつても命を寸陰だも延すことはできないと耶穌は言つた。それは誠にそのとほりである。しかし故にそれは富んだ後に心の幸福を欲するし、力を持つた上に永遠の生命を欲する心にはなるが、それより前に、永遠の生命よりも現在の寸陰の生命、はかなき人生そのものを保存するために、貧しい者は先づパンを得ねばならず、弱き者は力を得なければならぬ。耶穌自身ですらも、貧しい者に食を施し、病める弱き者に力を與へて醫してやつたではないか。

マホメットは正直に人間は何が必要であるか、人生は何のであるか、現實を明確に見たのである。かくて左手にコーラン、右手に劍を持つて進んだ。劍をもつて立つたマホメットは平和の中

に死し、劍を嫌つて進んだ耶穌は十字架上に殺された。人生は劍をもつて他を殺さねば自分が劍をもつて殺されるものだ。他人を幸福にするには劍をもつて守つてやらなければならぬ。

私は人生に徹頭徹尾、武力と金力とが必要であるといふのではない、マホメットとてもまた右手に劍を必ず持たねばならぬといふのではない。「回教に歸依するや、然らばその生命と財産とは保證せられ、回教徒の特権は附與せらるべし。降伏して朝貢するや、然らば信教の自由を許さるべし。戦ふや、然らば饜殺し、殲滅せらるべし」と言つて、手段として劍をとつたのである。

耶穌の十字架の死が基督教にどんな力を與へたか、マホメットの教が文明國に及ぼさないのは如何なる理由か、私は基督教や回教そのものを此處に論ずるのではなくて、人間たる耶穌とマホメットとの經た人生の行路をのみ見て、彼等が如何なる人生觀を抱いてゐたかを考へるのだ。耶穌自身は現在の人生をよく生きるには神の國のほかは武力と金力との必要があることを知つてゐても、その理想たる「神の國」を完全に自分のものにするためには自分の身も家族も捨て、顧みない理想家であつて、且つその理想の徹底的實行家であつたから、悩みは大きかつたにしろ、と



にかく自分の進むべき道へ突進して行つたのだ。故に彼れ自身としては満足であつたらう。

この地上の世界が大海に變じた場合に、人間の肺が腮と化して手脚が鰭とならねば生存をつゞけて行くことが出来ない、しかるに耶蘇は敢然と立つて人間は元來肺臓と手足とを持つべきものだと言つて、勇ましく溺れて死んだ人のごとくである。吾れはとにかく生きたい、よく生きたい、故に腮がなければ生きてゐられないものならその腮が欲しい。マホメットは當時どうしても劍を持つて立たねば自分の生命と一族の安全とをたもつことが出来ず、神の國を天下に知らせることができないと考へて、右手に劍をとつたのだ。吾れも武力の必要の時には武力、金力の必要の時には金力、自由自在に自分の必要なものは何んであるかを聰明に見定めてそれを擷得して人生を最もよく生きて行きたい。

耶蘇は神の國を得るためには一切の人生を犠牲にしても惜しくない性格を持つてゐた理想家であつた。マホメットは武力をもつて立たねば理想國を建てることのできないと見、且つそれを實行するだけの力を持った英雄であつた。吾れは耶蘇のとき理想家ではない、心に神の國を得てゐても貧しいければその神の國が消えてしまふ人間だ、貧しいければ神の國のことなんかよ

りも一片のパンに心を勞する人間だ、神の國よりも命の惜しい人間だ、命が惜しいために神の國を得ようとするので神の國のために命を捨てる人間ではない。また吾れは生きるがために生きるに都合の好い國土を欲するけれども、マホメットのやうに自ら立つて建設することが出来る英雄でもない。吾れは人生のために平和の國土と富と力とを得たい、而して後に神の國を得たいのである。

しかし吾れは弱い凡人であるにしても耶蘇やマホメットよりも物の實際を知つてゐる人間である。耶蘇の考へた神や未來生や最後の審判の迷妄であることを知つてゐる。マホメットの考へた神や宇宙の構成や宿命説や未來生のことなど一切それが迷妄であることを知つてゐる。たゞ吾れが彼等から得たいのは彼等の精神力と肉體力とである。理想にむかつて突進した耶蘇の精神力と、必要の物を自ら獲得して王國を地上に立てたマホメットの英雄力とを吾れは欲する。



## 第十講 ニイチエ

中西伊之助

- (一) 人生の否定と肯定——『悲劇の出生』
- (二) 現代文明への呪咀、歴史への叛逆
- (三) 超人の意義
- (四) 神の否定
- (五) 永劫回歸の意義
- (六) 戦國の人



(一) 人生の否定と肯定——『悲劇の出生』

ニイチエは、近代哲學の生んだ、燦として輝く彗星である。彼の人生論は、他の多くの哲學者に比して最も著しい色彩をもつてゐる。今その大要について述べよう。

フリードリツヒ・ニイチエは、一八四四年に、獨逸の寂しい町、レッケンに生れた。丁度その時フリードリツヒ・キルヘルム四世の誕生祭の鐘の音が、寺の鐘樓から響きわたつてゐた。

ニイチエの父は、アルテンブルク公の家庭教師であつた時プロシア王と知つた。そして、王の親切な友情に依つて、レッケンの牧師となることができた。父は、王の誕生日に長男の生れたのを喜んで、彼をフリードリツヒと名づけたのであつた。が、その父とは、五才の時に死別した。

ニイチエは、母に伴れて、ザアルのほとりのナウムブルグにある祖母の宅に引き移つた。彼は一家の希望の的になつて育てあげられた。まるまると太り、色は黒く、頬は紅く、まるで百姓の子のやうに強健であつた。

いたづら盛りには似合はず、彼は孤獨を好んだ。そして書物と音樂と、花とに親しんだ。また、



たつた一人で散歩した。

ニイチエは、小學校の終り頃に、もう人生にたいする不可解と不安に苦しんだ。プオルタの豫備校には入つた頃は、彼は既に、權威に反抗する意志を、直截に發表するやうになつた。そして人生問題にたいして、詩を書いたり、學課を冷笑して、希臘哲學に讀み耽つたりした。

ボン大學に入つた時、ニイチエは觀劇や、酒と女を讚する、有りふれた獨逸學生生活を送つた。が、さうした喧騒なる生活は、彼の求めてゐるものではなかつた。煙草と、酒と、女との中から彼は極度の惡感をもつて、再び孤獨と嚴肅なる生活に入つた。ニイチエは、放蕩の心持に沈湎するが如き人間は、深い思想を掴む「感じのこまやかさ」と、「考察の透徹」を缺いたものであると云つて、終生それを斥けた。

一八六五年の秋、ニイチエはライプチヒに轉じた。そこで、彼は希臘精神とシヨオベンハウエルとワグナーとの強い影響を受けた。彼のライプチヒに於ける言語學の研究は、彼をして益々希臘精神に接近せしめて行つた。

ニイチエがシヨオベンハウエルの「意志と表象としての世界」を手にしたのは、一八六五年で

あつた。丁度、彼がボン大學に於ける、喧騒——酒と、女と、煙草と、オペラの中で、まづ衆人に接近し、そして衆人を自己の高さにまで引上げようとした彼の企ては、全く空想に終つてしまつた時であつた。

人間にたいする大きい絶望——と云ふよりもむしろ彼の性格にはふさはしい憎惡と焦燥を懷いて、彼はライプチヒへ來た。そこで、彼はシヨウベンハウエルの哲學にふれたのである。

幼い時に父を失つて、男性らしい強く深い愛に飢へてゐたニイチエ、そして彼の周圍には平凡と墮落に蠢めいてゐる人間を見たニイチエ——それらの人生にたいして、底強い否定の叫びをあげて、雄々しい孤獨の中に歩む意志の哲學者、シヨオベンハウエルの人格は、彼のために、大なる眞晝の太陽のやうに感じられた。

若きニイチエの魂を灼いたこの稀世の厭世哲學に次いで、彼の心を躍らせたのは、ワグナーであつた。一八六八年、彼はワグナーに會つた。この藝術家のもつ、強い意志の力が、若いニイチエの魂を咬んだ。シヨオベンハウエルとワグナーは、ニイチエのためには、熱であり、光であつた。ニイチエの人生論——彼の偉大な哲學はこの熱と光にはぐまれて、雄々しい芽生を開始した



のであつた。

『悲劇の出生』は、一八七一年。彼の二十八才の時に發表したものであつた。彼は軍隊の激務のために健康を害したが、その後、過度な勉強のための病苦と戦ひながら、この書を著したのであつた。

『悲劇の出生』は、哲學と藝術の渾然たる融合から成長した、青年的理想の燃焼であつた。彼は、この一巻をもつて、彼の戦闘の生涯をはじめた。『悲劇の出生』は、彼の人生に於ける、宣戰の布告であつた。が、この書によつて、彼が教授をしてゐたパーゼル大學の學生は、すべて彼から去つてしまつたと云はれてゐる。

『悲劇の出生』は一方には希臘精神の強調であつた。即ち生命の力、生命の充實、生命の歡喜——生命の肯定であつた。が、また一方には、その生命の存在を苦痛とし、空虚とするシヨオペンハウエルの人生否定の哲學を以て之れに對抗させた。更らにそこには、藝術をもつて人生の救済を實現しようとするワグナーの藝術觀があつた。肯定と否定と、厭世と救済と——希臘精神と、シヨオペンハウエルと、ワグナーと、ニイチエの『悲劇の出生』は、この相尅關係に立つ、悲壯なるオ

ーケストラであつた。

ニイチエは、その最初の著『悲劇の出生』に於て、彼独自の人生觀を築きあげた。この著は、彼の人生觀の出發點を示すものとして、重要な位置に在る。

ニイチエは、まづ、シヨオペンハウエルの説いた、『意志と表象としての世界』を肯定する。そこから、彼は『悲劇の出生』を説かうとするのである。

彼は希臘の美の神、アポロをもつて、表象の世界であるとした。(第二講シヨオペンハウエルの項参照) アポロは、美であり、歡喜であり、樂天的である。——即ち、希臘思想は、アポロをもつて表象されてゐる。更らにこれを推しひろめて考へるならば、希臘人の思想と精神は、人生に於ける表象の世界である。——と、ニイチエは考へた。

が、人生は、希臘人の思想や精神ばかりが全部ではない。それは、一つの人生の表象に過ぎない。吾々の人生は、意志である。——ニイチエは、ここから、更らに、酒の神ジオニッスを擱み出して來た。ジオニッスは、即ち意志である、ジオニッスの求めて飽くことを知らない努力は、吾々の人生に他ならないと、ニイチエは考へるのである。



アポロは、シヨオベンハウエルの云ふ空想と夢幻の美しい假象である。アポロは、人生の生成に伴ふ苦惱を、その假象によつて解脱せんとしてゐるのである。が、その解脱は、消極的でありまた、空想と夢幻は、人生を創造に導くものではない。アポロの望んでゐるものは、この假象の永劫である。空想と夢幻の中にある、安逸である。人生を幸福と快樂の對照と觀じ、安價な肯定に安じてゐるものである。そこには、靜謐と平易があるばかりである。——吾々の人生は、かかるもののみではないとニイチエは考へるのである。

人生は、新しいものの創造と、古いものの破壊である。人生には、生きんとする強烈なる意志が存在する。それはアポロの如く、幸福と快樂を追はうとしてゐるのではあるが、しかし、アポロの觀てゐる人生は、美化された空想の世界である。人生は生成流轉である。その生成流轉の中に、一貫してゐるものは、人間の意志である。意志は、飽くことなき慾望の追求である。そしてそこには、絶間の無い破壊と創造が連続してゐる。苦惱に次ぐ苦惱、努力に次ぐ努力が、そこを流れてゐる。この意志、この意志の持つてゐる苦惱と努力——これが、表象としてのアポロの人生の奥底に流れてゐるのである。この意志なきアポロの人生は、無意義である。——とニイチエ

は考へた。そして、その意志を、希臘の酒神ジオニッスとして抽象した。アポロの人生は、ジオニッスの苦惱と努力なくしては、その意義を全く失つてしもうものであると、ニイチエは説いたのである。

美しい假象の世界、そしてその下を溢流する苦惱と努力の世界。——そこには、當然生れねばならない人生の悲劇がある。古代希臘の悲劇は、實にこの人生の表現に外ならない。そして近代に於ては、ワグナーの音樂に表現せられてゐる——と、ニイチエは説くのであつた。

人生の極致は、即ちこの悲劇的藝術である。藝術は、ジオニッスの、強烈なる生きんとする意欲の上に置かれねばならない。藝術家は、人生にたいする強烈なる創作慾から發生しなければならぬ。最高の藝術は、悲劇の藝術である。そしてそれは、アポロとジオニッスの人生の衝突から起る悲劇の表現である。即ち、ニイチエの『悲劇の出生』は、アポロの人生の否定であり、ジオニッスの人生の肯定であり、そこから起る素晴らしい悲劇の藝術に對する讚美である。安價なる靜寂の人生、懶墮なる平板の人生の、勇敢なる否定であり。高價なる生成の人生、破壊に亞く破壊、創造に亞く創造の人生の肯定である。そしてそこから、むくれあがる、壯美、哀痛の悲劇藝術！



それこそ、吾々の人生を救ふ唯一のものである。——と、ニーチェは考へるのである。生成の人生、創造の人生は、不斷の變換交遷である。吾々は、この『存在の苦惱』を、それによつてのみ超克することができる。そして、そこに、壯絶なる幸福も喜悅も享受することができる。力強い人生への挑戦。躊躇なき流血。響わたる破壊。沸きあがる創造。そこに美と力の人生の姿を見るのである。かかる闘争と、そして破壊と、創造なき、道徳的、基督教的、或は智的解釋は、すべて迷妄である！——ニーチェは、かう叫ぶのである。

ニーチェの藝術的形而上學——藝術的的人生觀は、ここに明確に打ち樹てられた。

## (二) 現代文明への呪咀、歴史への叛逆

ニーチェは、自己の思索を更らに深めて行くことによつて、現代文明の思想傾向が決して眞の文明に進んでゐるものでないと云ふことを感じた。それが、大なる墮落であると感じられた。

ニーチェは、現代文明の根本問題について、『時代外れの考察』を著した。この書は『悲劇の出生』から見た、實人生にたいする、彼の挑戦であつた。ストラウスと云ふ俗人の典型である教育

者が力強い者、創造する者にたいする障碍となり、疑へるもの、迷へるものにたいする迷路となり、高き目的に向つて奔るものの足の鎖となり、萌芽にたいする毒霧。新しき生に渴せる獨逸精神については、灼きかわかされた沙漠となると斷じて、ストラウスによつて代表された『低き天國』を憎惡した。そして、現代の文明は、現前の状態に安價なる満足をもつた學者の文明であると罵つた。

次に、ニーチェは、人生と文明について、彼の思索を進めて行つた。それが、彼の第三著『生活に對する歴史の利害』である。

文明は、人生にたいして、いかなる意義をもつか——文明は、人生の裝飾ではない。文明は、人生の生活思惟、假象意欲を貫く統一的創造力の發現である——とニーチェは云ふ。その意味はかうである。

これを、ニーチェの『悲劇の出生』の、アポロとジオニッスで説明しよう。文明と云ふ一つの表象——それは、アポロである。アポロがアポロとしての人生を營んでゐる限り、その文明は、人生の裝飾である。そこには、ジオニッスと云ふ、創造意志があつて、はじめて文明の意義を備



へるのである。眞の文明とは、この創造意志の發露であり、表象である。文明は、人間の衷にある渾沌が、この人間の衷にある意欲——そこから湧いて出る最深要求によつて整齊せられたる、創造的統一である。故に、文明とは、生成の人生であり、創造の人生である。あらゆる古いものを破壊し、排除し、そして新らしい生成を遂げ、創造を遂げるものでなければならぬ。——文明とは、強きジオニソスの表象の世界でなければならぬ。

ニイチエは、文明にたいして、まづかう意義づける。そして彼は、舊い歴史の概念を叩き潰さうとしようとした。舊い歴史の權威に叛逆しようとした。

吾々の人生を記録する歴史は、吾々の生活を激勵し、且つ活潑ならしめるためにのみ必要であり、且つ存在する理由がある。それ以外に於ては、無用であるばかりでなく、むしろそれは有害極りないものである。——と、ニイチエは斷定した。

歴史は吾々の意識の中に、頑固なる凝結を作るものである。それは、過去にたいして、明瞭なる記憶を作りあけるからである。これが、吾々の生活の流動を妨げ、これを不活潑ならしめる。故に、歴史を忘れ得るものには、歡喜と幸福が惠まれる。が、歴史を忘れ得ざるものには、痛苦

と惱亂と錯雜と退嬰が興へられる。そして生活の瓦碎が来る。

人類の歴史は、この點から見ると、二つの相反した兩面を持つてゐる。吾々は、歴史に依つて過去に於て、尊い人類の苦闘の跡を知つて、吾々の現在を刺戟し、激勵し、更らに將來に向つて有効な暗示を得てる。が、吾々はまた、歴史に膠着したる舊き傳統と智識に依つて、吾々の自由なる創造力を腐蝕せしめ、そして吾々の生活を凝滯枯渴せしめる。——吾々の人生は、この兩面の利害をもつ歴史にたいして、さていかなる恩惠、また害毒を受けてゐるか——ニイチエは、それを考へようとした。

歴史はいかなる程度に、吾々は忘れなばならないか。それは、ある人間、ある人民、または文明の『創造的な力』の強さの程度によつて定まる——とニイチエは云ふ。

『創造的な力』は、人生の獨自なる成長の段階に於て、過去、及び外物の同化、失はれたるもの、傷けられたるものの回復、破壊された形の、『自らの衷よりする』造營などに依つて、現はれるものである。即ち、人生に於て、人間が過去を同化せしめ、また自己の周圍を同化せしめる力。人間が過去及現在に於て失ひ、傷けられたるものを、自己の手に奪還する力。破壊せられたる自己を